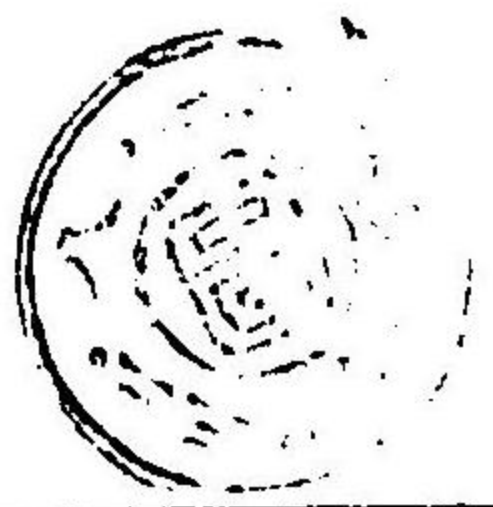


女學叢書 第壹卷

養西婦女風俗

大日本女學會發行



思ひめぐらせば、早々五とせが昔の夢となりけりな。清
う晴れたる緑の空に、白玉の光磨き出たりしアルメスの
雪、小暗う霧渡れる山の中らに、黒龍の跳ると見えて、ほと
ばしり落ちけるニヤガラの瀧、其山其水、今もなほありし
ながらに、めでたくこそあるらめ。況て、色麗はしき言葉の
花園に見しらぬ人と、睦び蔭深き文の林に、珍らしき友と
遊びける、そのかみの春秋も、今は世を變へたる事とのみ
覺ゆる、いとかなしや。さるは、詞ふつゝかに、ざえ短き身
にて、ふと知らぬ境にさし出でたる程、故郷の戀しさは、さ
るものにて、悲しくも、心細くも、うれたくも、口惜くも、思ひ
屈しける事のみさは、なりしを、時過ぎては、憂きを數へし。

袖の涙は餘波なう乾きて、やうく物馴れ住みつきて面白し、をかしど感じたりし事をのみ忘れ難う覺ゆるはげに、うしと見し世ぞと打ちうめかるゝが、人情の常にもやあらん。さても、其程見もし聞きもせし事のさまを、たゞありに、日記のはしにかきつけたる、もとより皮想の見にして、至り深からん方々の、目觸れ給ふべきにもあらずとて、旅つゞらの底におし籠めたりしを、さらば、まだ見ぬ女子たちの爲にもとて、切に請はるゝまゝに、女學講義の附録として、物せしなりけり。かゝれば、いかで巻などゝして、永く世に傳ふべき價かあらん。ざるを強ひて、これ散りばはし果てぬ迄に綴り集めてんとある、今更それをさへにい

二

なみかねて、そがはしに、このことわり一言かい加へつるも、中々にかゝやかしければ、今朝開いたるさ百合の花に眠れる、小蝶ども化して、まことの夢と消えよかしとのみ願はるゝも、例の後れがちなる、心のすさびならんかし。

著者しるす

明治三十二年七月初旬

泰西婦女風俗目次

緒言

家庭の有様

中等社會

主婦のしわざ

其日課

某女博士のホーム

某夫人のホーム

家庭の教育

衣食住に就きて

家族の娛樂

看護のありさま

上流社會

主婦のしわざ

其日課

目次

一
四
四
四
五
五
一〇
一六
二八
四一
四六
四九
五四
五六
五九

衣食住に就きて……………九八

看護のありさま……………一〇六

家族の娯樂……………一〇八

下等社會……………一〇九

主婦のしわざ……………一一〇

家庭の教育……………一一七

衣食住に就きて……………一二五

看護のありさま……………一三三

家族の娯樂……………一三五

女塾のありさま……………一三七

教育の方針……………一三八

教育の方法及び塾長教師塾生の舉止……………一四五

休業……………一五八

神祭……………一六四

塾舎の構造及び衣食住の形状……………一六五

女子の教育……………一六九

教育(文學、技藝等も)……………一六九

大學……………一七七

中學……………一七八

小學……………一七八

師範學校……………一七九

幼稚園……………一七九

學科課目……………一八〇

學科程度……………一八一

就學年限……………一八二

學資……………一八三

躰育……………一八四

美育……………一八六

退學後の結果……………一八七

女子の文學……………一八九

女子の技術職業……………一九七

女子の財産……………一九八

女子の風俗

宗教の影響	二〇四
女子の氣質	二〇四
英國婦人の氣質風采	二一四
佛國婦人の氣質風采	二一七
獨逸婦人の氣質風采	二三〇
奧伊、白、瑞等の婦人の氣質風采	二三三
米國婦人の氣質風采	二三五
海水浴郊行	二三六
待客訪問のさま	二三七
少女の交際	二四六
書信、音物	二五四
衣食住其他	二六四

泰西婦女風俗目次終

泰西婦女風俗

下田歌子

言

余は往年歐洲女子教育のありさまを視察せんとて我が浦安の國內
 遙く離れ支那海の濁浪をきり印度洋紅海の苦熱を凌ぎて先づ佛
 國馬港に着した。いちに國都巴里に入りて此處に止まること一月餘り
 移りて英京倫敦に在ること殆ど一箇年餘更に再び佛に至り瑞西白耳
 義伊太利、埃太利、獨逸を廻り又英吉利より米國合衆國を経て太平洋の
 波最と平かにわが日本には歸り着きぬるなりけり。此間僅かに滿二
 箇年に過ぎざりければ到底十分の視察を爲すこと能はざりしは頗る

泰西婦女風俗 緒言

遺憾に堪へざる所なりき。然れども其滞在の日數最も久しかりける。英國に於るが如きは幸ひに懇篤深切なる同國貴婦人の斡旋により、ベツキンナム宮殿に於て女皇陛下に謁見し、尙ほ且つ特に其常住のウインザー宮殿にも召されて午餐を賜ひ、親しく女皇と談話するの榮をも得たりしかば同國に於る上中流の家族及び官私立女學校、家塾等にも宿泊滞留するを得、其家庭のありさまより子女教育の模様まで、概略見聞するの便宜を得たりき。而して身は女性なるを以て其交際の日淺く、其滞在の時短かりしにも闕らず、歐米に在りては女子ならでは聞りて語らざる事見さるる所をしも見もし聞きもすることを得たりしは實に望外の悦びなりかし。されば前條述るが如く、歐米各國巡廻中、英に止まれりし間最も長かりけるが故に、上中等家族の形狀を寫すこと、重に英吉利を詳記するの已むを得ざるが如き、讀者幸ひに豫じめ之を諒せられんことを希望す。且爰に掲ぐる所の家庭のありさま、即ち主婦が日常取扱ふ所の事の如きは外國に渡航せられし方々の目には、

誠に有りふれたる事柄のみにて興味も薄く波瀾も無く、一見眠りを催すの誹りあるべきを思へば、そいろに汗あゆる心地して、面赤むわざにはあれど其見聞のまゝをど強ひて、友達のそゝのかされたるに、さは兎も角もとて筆の行くに従ひて、斯くは書附けたるなりけり。

家庭のありさま

主婦のまわ

余が彼の國の家族中に止まりて親しく其一家團樂の形況を觀察したりしは、重に上流及び中等の家に於て、其下等社會の如きは唯貧民學校育兒院等を巡廻せし序を以て、殊更に近傍の貧家に伴なはれ、其住居のありさまを一わたり打ち見たる許りの事のみなれば、決して詳細に其慘狀困苦の模様などを寫し出すこと能はず。故に爰には先づ中等社會家内の狀より書き起して、其上流に及ぼし貧民家族の情況も見分し得たる許りのものは、逐次之を抄記せんとす。

凡そ一家の主婦即ち人の妻たり母たる人の其家政を主り、其子女を教育し、且其良人子弟が交際をも助けて専ら内治の任に當ること、我が東洋に於るも亦大抵同様のありさまにて是れ即ち女子が天賦の職務なれば、今古不變之を勉むることなり。唯も西洋に在りては實に最も主婦が専任なるもの、如く是等内政の事は其重大なる事件を除くの外は、大抵皆一に其妻な

其日課

る人が、手中に調理するを常とし、其夫は容易に隙を容るゝこと稀なり。就中英國の如きは、其良人の朋友なる男子が訪問にも大抵主婦が在宅の日時に於て爲すが如き、尙交際の事は後に云ふべし、女子が家事一切の事に専任せる、大旨斯くの如し。

總べて西洋諸國が生存競争の烈しき、其世襲の家資最も豊かなる上流社會の富豪を除くの外は、自活の道また誠に容易ならず。西歐に所謂「時金」なる語は、實に彼れが家庭のありさまに於て始めて始めて其然る所以を知らるゝなり。彼等は其幼少の内よりして、自主獨立の精神を養はれ、其物を處理するにあたりて、勉めて其順序を過らざらんことを習はしめらる。故に長じては、時の最も貴重なる事を知るからに訪ふ客も訪はるゝ主人も、決して此黄金なる時を濫用冗費すること無き社會の習慣は、誠に主婦が一家を整理する上に於て、其經濟の點にも、其執務交際の爲にも、實に甚だ便利を感ずること少なからず。されば爰に先づ其日常主婦が務むる所の概略を云はん

に總じて此中等社會に在りては、良人たる人の外交家たるか、又は妻なる人

泰西婦女風俗 家庭の有様

の何等か特別の理由あるにあらざるよりは、其交際時期なる間と雖も盛大なる夜食夜會等に招かるゝこと稀れなり。たゞ親戚朋友などの茶話(茶話)は専ら英國に行はるゝ風俗なりとて、午後四時より五時までの間に於て互ひに相往來し、大凡二三十分間乃至一時間ばかりにして、退散するを常とし、または時に夜食に會することもあれども、これとても極めて小人数に止まり、大抵午後七八時の頃より始まりて、九時十時が程には終るなり。其夜食後に來訪する者の如きは、決して不時に在ること無く、必ず幾日何時頃よりと約束したる人に限れり。斯かれば、主婦は大凡毎朝七時前後に起き、佛京巴里の如きは、中等社會に於るも、これより遙に遅し、寢室の内に於て其裝飾を終り、朝の衣服を着けて、下婢の指揮手傳ひを爲し、朝の衣服は最も塵末なるものなり、朝飯の用意全く整へば、食堂に備へたる鐘を打ち、鈴を鳴らし、なとして、家族に之を告ぐ。家族はまた之を開きて、身仕度を整へ、それより又十分許しの後、第二の鈴の報ずるを待ちて、各々食堂に集まり、食卓に着くを常とす。英國に在りては、朝飯にも手輕き肉類(鹽豚、魚類、半熟雞卵等)を添ふ

るが故に、多少朝飯の仕度に時間を費やすことありと雖も、自餘の大體諸國に在りては、大抵麵包と咖啡等のみを以てすなれば、其湯を濁すの時間だにあれば、足れりとす。其れさへ、電氣又は瓦斯を使用するが故に、其輕便にして迅速なる、皆他の仕事の片手間にして十分なり。朝飯終れば、下婢が掃除を濟ませたるを見て、室内の裝飾即ち花の萎めるを更へ、器物を置き改め、なとし、さて自ら市に至りて、其日入用の諸品を買ひ、求めなどするなり。然るに、此購求せる物品の運送甚だ便利なるが故に、敢て時間を費やすこと無く、又人手をも要すること少なし。されば、随分年老いたる婦人と雖も、容易に之を購ふことを得。運動がてら、恩み半分は、往々孫兒などを率て行くこともあり。さて斯く、大凡一時間計りも、買物に時を費やして、家に歸りたる後は、銘々一家の經營を務む。彼等が衣裳の破れたるを繕ひ、下着帶等を編みなどするは、普通一般の事とし、總べて、女子が衣食の營みに専任すること、別に東洋婦人と異なる、と無く、勿論中には、其生活殆ど男子の如く、更に女子が天職を捨て、問はざる、生意氣無頼の婦人無きにしもあらねど、其家資隨

分に豊かなる家に於ても、勤儉なる婦人は、自己及び小児の衣服等は、其盛服を除くの外は、大抵其裁縫を自らする人も、少なしとせず。然りと雖も、其秩序だちたる社会と、簡便なる機械とは、能く其人工を助くること、少なからざるが故に、又幼児よりしつけられたる習慣の、其時を用ふること、上手なるが爲にや、主婦は、斯くの如く、家事一切の事を務むる上に、親戚朋友の訪問往來等より、種々有益なる集會などにも出席し、又は、其人の職業を助け自らも亦著述に従事するなど、其しわざ、随分多きに居るなり。(手工の事は、尙後段に詳記すべし。)中には、學校の教師、其他の職務ある婦人は、各外に出でて、其業を執ることあれども、秩序だちて、取締りよき、家屋の構造、婢僕の仕事は、毫も其主婦が不在なる間に、不都合、不經濟等を感ずること無きが如し。殊に、感心なるは、其母親の留主に、殘されたる小児の大人しき一事なり。彼等は、其下婢が保護のもとに、甘んじて遊び戯れ、此淋しき家族の内に、慈母が歸るを待ちつゝあるなり。(委しくは、家庭教育の所に云ふべし。)さて、晝飯は大抵、正午十二時、又は午後一時を以てす。(英は大抵一時、佛は十二時を普通と

す。)晝飯迄は、主婦が家事を整理する時間にして、最も多忙なる時なり。斯くて、食事終れば、夜食の支度、即ち火に懸くれば、直ちに煮爨し得らるゝ迄の準備を爲し、下婢に命じ置きて、午後三時よりは、訪問の客を受け、又は、他を訪問し、其宅に在るの日は、喫茶の時間前後に於て、夜食の服に改たむるなり。(平常に、夜食服用ふるは、先づ、中等社會中の上級に位する所の程にして、是より以下、即ち其家計、餘り豊かならざる家にては、用ひざるもの多し。されど、家法嚴かなるあたりにては、唯形許りなるも、制規の禮服を着るを見たり。其他は、午前に着用する所の仕事着を脱ぎ、其れより、其衣服に更ふるを常とす。委しくは、後段衣服の所に云ふべし。)さて、夜食の席は、殊に、家内一同が、天上の樂園に入るの思ひにて、最も睦み樂む所なりとす。さるは、銘々其職業に勞きつゝ、終日、緩話の折も無き儘に、此時に於て始めて、親子、夫婦、兄弟、姉妹、打ち集ひ、其日の出來事をも語り合ひ、笑ひ興じて、歡を盡すなり。(英國に於ては、殊に、家族の歡樂を欲する習俗にして、所謂ホームブレイシャヤの名ある所以なり。)食事果つれば、妻は、洋琴を彈じ、風琴を奏で、夫は、謠たひ、子女

躍る。是時に在りては老も無く、少も無く、親も子も、妻も夫も、皆無邪氣なる小兒と化し去りて、他見には餘りに馬鹿らしくも覺ゆる迄妙にもあらぬ奏樂、節整はぬ唱歌などを、左も得意氣に物するさまは、誠に子供らしく、實に天真爛漫の性情を見るに足れり。是れ此ホームフレシャーこそ、其終日營々と労働して、一秒時間も冗に消費せず、張詰し心の弓を弛ぶるに、最屈強の仕組にして、其衛生に裨益ある、また決して僅少にあらざるなり。而して、此間最も、其歡樂の根を取り、音頭を取ること、は主婦が旨と勤むる役目なるが如し。試みに、左に名望ある一二婦人が、家庭のありさまを記さん。

余嘗て、英國のある有名なる職工學校の教頭たる、工學博士某氏が許に、其女子部教育の模様を見んとて、四五日客寓せしことありしが、其妻女が家事を整理するの巧みにして、然も、其勉強には實に驚歎措く能はざりき。

此婦人は、もと、オックスフォールド大學の名高き英國の卒業生にして、女博士の名、随分世に聞えたる人なり。其家は、倫動府の場末にはあれども、表通りは、道幅廣く清潔にして、裏は打ち開けたる、スコエヤの芝生、青やかに見

渡されて、最も景色よく、四層樓の、最も便利よき家屋の内には、十二の部屋ありき。夫婦二人暮しの家に、何故斯く許多の部屋を要するに、かど、試みに、女史に問ひたれば、女子答へて、我が夫は殊に弟子を受すると深く、其嘗て數年以前、博士は、三十七八、女史は、三十四五の年齢にて、博士が教授より、教頭に榮轉せしは、未だ、五六年前のことなりと聞きぬ。卒業して、田舎に行きたる生徒などの、其學校の大會、又は、其職業上の要用にて、上京の砌訪問して、さまざまの談話を爲すを、聞くことを、こよ無き樂みとせらるゝが故に、舊生徒等も亦悦びて、大抵我等が家に止宿することゝはなれり。さて、其青年諸子の、爲には、甚だ便利にして、且我等も亦其學べる所を實踐せし物語りを聞くは、最も有益に最も面白き事なれば、平常は、小人数の家に、は甚だ無益なる空室をも、斯くは許多備、置き候ふなり。と云はれき。

さて、女史は朝飯後、其良人を、學校に出だし遣りて、後、其日、入用の品を自ら近傍の市店に求め、晝夕食の料理の仕度を爲し置き、女史は最も料理に巧みなり。午後よりは、余を伴ひて、大抵三時過るまで、學校を巡廻せしめら

れき。女史は自ら着る所一切の衣服を裁縫し、尙其上に良人を助けて大
部の著述をもせられぬ。(女史が文章に巧みなるは遙かに其夫の上に出
づとの評判なりき。)而して其家に使ふ所の者は唯年齢十四五許りなる
童一人のみなりければ、余は女史がいかにか能く時を用ひたりとも斯くの
如く、交際も頻繁なる家に於て家政を取るの片手間に、いかなれば斯くも
立派なる著述までの助勢を爲し得らるゝかを怪みて、其日課の立て方時
間の割り方等を教へられよと請ひたれば、女史は打ちほし笑みて、我等は
なほ未だ子と云ふものも持たねば、他の婦人達よりも其働く時の多くを
持たざる可らず。凡そ人の他に倍して偉大なる事業を爲し、許多の書籍
を読み且著す所以の者は、唯其時を能く用ふるにあり。而して、其時を能
く用ひんと欲する者は、單へに一秒一瞬の少時間を惜むべき事を忘る可
らず。僅かに三分間五分間なればとて、冗に費やす時は、積り／＼て多く
の時間を空費することゝなるものにこそ。さて此短少時間をも、空しく
費やさむとするには、先づ其爲すべき事の最も便利に最も容易く爲し得

らるべき様に順序だて正しく備へ置く事必要なりと思はる。縦令ば、書
状を書き、又は物を記さんとするには、己れが書齋に入りて、身を動かせば、
忽ち筆も取られ、紙も出だされ、墨汁も吸取紙も封蠟も手に從ひて使用せ
らるゝ様に爲し置くべし。然する時は、其之を取り揃ふるの時間を省き
て、容易に其欲する所を爲し得らるゝが故に、少しの暇にも、事を取らんと
するの心出で来るものにこそあれ。總じて物を手重に爲し置く時は、決
して事はかどらぬものなり。殊に著述などをせんと欲する者は、常に小
さき手帳と鉛筆とを放つ可らず。車上途中何方にても、臆りに書き出さ
れたる思考は、直ちに之を書き止め置くべく、又其眼に觸れ耳に聞きて心
の止る節々は、必ず之を記して貯ふべし。然すること、日を重ね年を積む
程には、遂に多くの材料と好き考案とを求め出ださるゝものなり。
さるからに己れが日課の業は、他より餘りに過度なりと、忠告さるゝ程自
らは苦勞なりとは覺えず。されど、近頃は少しく健康の不充分なるを感
ずるが故に、勉めて友達の夜會等にも出づる事とはしつ。元來己れが斯

くも強ひて衣食住一切の事に下り立ちて自らせんと欲せしは故あることにて君も親しく見聞し給ひしなるべし。近來我が女子教育の程度大いに進みて殆ど男子と同一なる高等の學科をも學び且其勞力も亦男子に譲らざる人の續々輩出するに至りしは女子の爲甚だ悦ぶべきに似たりと雖も一方より云へば又大いに憂ふべき節の無きにしもあらず。それを如何にと云ふに女子が學問技藝の程度の高まると同時に其自活の道を得る事も亦次第に多きを加へ其獨立者の數を増加するに従ひて女子が天賦の職即ち其緻密細小の事に關することを厭ひ人の妻となり人の母となるも彼等は其良人が手助けをも爲すこと無く其己れが最愛の生の子さへに他の手に一任して顧みず。况て厨房等の事の如きは更に措きて問はざるに至れり。(料理人を備はるゝ程の家ならば兎も角も)斯かれば小兒が衣服の裂け汚れなどしたるを見ては唯口賢く下婢が不注意を責めて使ひはたり夫が友輩と物語りする時などには己れ先づさし出で咄しの腰を折り自説を主張し我才に誇り傍若無人の振舞ひを

爲して猶未だ以て足れりとせず彌々其我儘を逞うせんとするを見てはげに老婦人が守舊主義も亦あながちに英國風の頑固なりとも醜難きに似たり。されば己れが此家に嫁きたる始めより既に當世流の女博士と自稱する者のやゝともすれば其室家に宜しからざる言行を見て心竊かに感ぜ憂ふる所少なからざりしが故に時には身自らも餘りに過度なるべきかと思ひながら家事一切の事を我が手一つに取りしたためつゝ斯くは良人が著述の勞を助けんとは企てそめたるなりけり。若し幸ひに我が健康の許さん限りは尙今一層勉強して靜かに老後の計をも爲し置かんと志しつゝあるなりと談られぬ。實に女史が勤勉と女史が學識とには唯感服の外無く斯くの如きはまた到底尋常一様の人の企て及び難からんことを歎じたりき。然しながら女史の品格風采は無下に惡しといふ程にはあらぬも先づ中等の人柄にして其言語動作の整然秩然としていかにも一見識ある天晴の婦人たるを知らるべしと雖も尙毛を吹きて環を求めば閑雅優美の氣韻には乏しく所謂あはれに懐かしとか

おほどかにこめかしなど云ふが如き形容詞は更に冠らすべき餘地無きが如し。彼の紫女が筆に書かせたらんには猶賢としと云ふべからんぞと評しぬべき。されど今より後斯くも生存競争の彌々烈しく成り増り行く世に在りては先づ此種の女子を以て上の階級に數まへつべうぞ思ひなりぬる。

又余が倫助に到り着きぬる始めより無二の親友として恰かも同胞姉妹の如き最と深切なる助けを受けし一夫人ありけり。此人の生家は或る富豪なる貴族にして其夫はまた英京屈指の金満家當時下院の議員なりき。

東洋人の目もて見る時は此夫人ぞ誠に深く敬愛すべき婦徳を備へたるとは感ぜられき。勿論英國にても淑徳慈善家の譽れ高く又女子教育の事にも中々の熱心にて自著の出版物等も世に行はれつゝありき。此家は倫助にても目貫の場所に在り。家屋の建築室内の裝飾等も十分に行き届きて之を前の女博士が家に比すれば彼れは中等の中の階級是れは

先づ中等の上の部類或は上等の下許に數まへられぬべき家格なりかし。夫人は其交際時期には随分夜食夜會等の招待頻繁にして又自宅へ案内する賓客も少なからぬが故に(勿論余が在英中盛大なる宴會を催されたる等の事は無かりき其間は夜の更くること多きが爲朝は大抵九時頃に起き(平素は八時頃)裝飾終れば朝飯の卓に就く。(男女の子供は大抵學校に登るを以て彼等の朝飯は父母より先きに別々に食す)其前後、真人が側らに在りて必ず一二新聞の重なる所を讀み聞かせ或ひは其夫の許に到着せる朝配達の郵書を示して其代筆すべきものを受取りその認むべき要點を問ひ聞きなどをすなり。(夫が要用の書状も大抵夫人が代筆なりき)朝飯後には先づその日の家事を婢僕へ云ひ渡しさて自分の部屋に籠りて書状を認むるか然らざれば子女の通學せる學校を參觀し或ひは市に買物を爲し晝食には主人は大概不在なる日多きが故に其兒童と共に會食す。(子供は過半近傍の學校に通學し正午には一旦歸宅して晝食を爲すことなりき)午後夫人は暫時休息してさて他を訪問するか。

泰西婦女風俗 家庭の有様

又は他の訪問を受けられぬ。當家には別段受日と云ふは無かりしかど
其在宿の日の茶時には多少の來客あらざる事は無かりき。喫茶の前後
に於て夫人は必ず夜食の服に着更へ、主人も亦夕刻には歸宅して、燕尾服
と改む。夜食も交際時期の間には、屢々朋友の來たり會すること多く、小
集にはあれども、最と賑かに、樂しげなる家族にぞありける。且夫人は熱
心なる慈善家なるを以て、度々貧民院孤兒院病院など種々の所に至て、物
品を與へ、金圓を惠み、夜は有益なる宗教又は各種の學會に至ることも屢
々なりき。夫人は當時年齢四十七八にして、十五六の女兒を頭に、男女五
人の子を持てり。其内三歳許りなる末女には、保姆をつけ、今一人の侍婢
には、他四人の子女が世話を爲させぬ。佛語と洋琴とは別に教師を僱ひ
て、自宅習古をせしめ、自分にも時々其復習等を試みられき。(勿論夫人は、
佛、獨の語も達者に話し、洋琴も随分上手なりとの事なりき。)又日曜日に
は、朝は大抵夫婦親子打ち連れて、寺院に詣で、それより博物館、動物園等
に伴ひて、子供の爲に、智識を啓發するの助けとなし、且新鮮なる空氣を

呼吸せしめて、彼等が健康を保持することを勉むること切なり。冬季に
は、毎年亞弗利加のマアラなる別荘に、舉家移るひ住み、子女の爲には、必ず
家庭教師を僱ひて、伴ひ行き、其日課は大抵學校の如く修めしめ、自らも、
倫動に在る時と異なりて、甚だ閑暇なるが故に、一つの小學教師となりて、
黑板の前に立つも、中々面白きものなりと、語られたる事ありき。夏季は、
三四週間或ひは一箇月許り、海邊に旅行することにて、此際にも、大抵子供
を携ふるを常とすと聞けり。然るに、余が在動中、夫人は、其人の郷里なる
蘇邦に所用ありとて、唯一人出向かれたりし事ありしが、其留守宅に於
て、末女過まちて、階段の上より轉ひ落ち、面部に疵を負ひたりしに、偶々邪
熱の少しある程にて、大に苦痛の狀を呈し、日夜泣きむづかる事、頗りなり
と聞きしかば、余は取り敢へず、之を見舞ひて、其頁人に、夫人は何時頃歸宅
せらるべきかと、問ひたりしに、其人答へて、否、未だ歸京の時日はさだかな
らず。實は此事を、速く告げ知らせんかと、一度は思ひたりしかども、其歸
るべき日も、最早程無きに、彼れが偶々の不在にかゝる出來事ありけりと

旅行先きに途報じて驚かさんも誠に氣の毒の至りなり。醫者が言によれば、今一兩日立たば必ず大に其苦痛も薄らぐべく且決して左許り心配なる容体にはあらずと云ひたる故直ちに看護婦を僱ひて保母の手助けとなし己れも亦臥戸を共にして母の名代を務めつゝあるなり。と語られたるその日本の風俗と異なりて夫が妻に對する務めの甚だ懇篤深切なるに驚きたりき。さてそれより一週間許りを経て夫人は歸り來たりしが恰も其時余はある女友といもに小兒の容体を見舞ひたる折なりき。(主人は昨日より小兒が熱度の低くなりしに安堵して職務に赴きたりて不在なりき)夫人は家に歸るや否や其負傷の顛末を聞けるものと見えいと氣遣はしげなる容子にて惶たしく三階の小兒が寢室に登り來るに彼女は小さき臥床の上に起き直りて愛らしき人形を翫び居たり。夫人は先づ其兒の案外に快きさまを見て最といたう心落居たるが如く走りよりて小兒をしかと掻き抱き其悦びて母の首に巻きつきさしあてたる薔薇色の頬に接吻を施し、我が愛兒よ。勘忍せよ。母が御身を

家に残し置きて一入田で行きたればこそ斯かる憂目は見せもしつれ。せめては速く歸り來て母が手に看護も爲べかりつるものをア、嘸待遠にありつらん。されど其れも我が親愛なる夫のわれに物思はせむとて告げ玉はざりしなれば必ず父をも母をも恨みな玉ひそ。いで今日よりは此母が側ら去らず慰め參らせんかし。されど母あらぬ時なりとて決して強情張り給ふな。能く保母の誠めを守りて斯かる過をな再びしたまひそ。と大人なる人に物語りする様に説き聞かせてそが邊りに立てる看護婦と保母とに向ひ御身達左こそいたう心遣ひしつらめ。今日よりは母が附き添ひ居るべければ少し打ちくつろぎて休息せよかしと云ふに保母なる人は涙を流してその不注意を詫びたりしに夫人はほど息を吐きて唯打ちうなづきたる許りにて何事もいはずさらに我等と談話せられぬ。斯くて余は夫人が久しぶりにとて強ひて抑留せらるゝ儘に夕景まで此家に遊びたるが我れと諸共なりし女友の歸りし後夫人は保母を別室に招きて人は誰れも過せんとして爲る者にはあらず。殊に御身

三日
が日頃の注意と親切とは余能く知れり。幸ひに疵も左迄に深からず且其経過も宜しければ最早何事も愁ふべきにあらず。必ず不日全愈すべし。決して心を痛むること勿れ。されど物は總て心の緩ぶ時に禍ひの生ずるものにて此見の少し物心づきてや、大人しう成りぬと思ふ其意りよりこそ斯かる事は出で來つるなれ。今よりは一層能く注意して其過ちを重ぬること勿れ。と最としとやかに云ひ聞せられぬ。余は側に在りて夫人が其天真爛漫なる慈愛の状と且其侍婢を薰陶使役するの道を得たるに感じたりき。此夫人が夫に事ふる有様は實にわが東洋夫人に勇躍として寒き朝涼しき夕其衣服を撰定増減する事等より食物の嗜好一切の事まで注意至らざる所無く毫も其良人をして不満の心を起さしめし事ありしを見ず。又夫が朋友と對話する時など英國の禮法として男子の客も先づ婦人の意を迎へ其詞に従ふが常なれども夫人は夫が自説を吐く時には謹聽して敢て詞を交へず其己れが語る事も夫聞きて以て不可なりと云へばげに左もこそと自ら耻らひたるさまして口を

つぐみぬ。その形狀誠に年若き女子が夫に對するさまにも似たり。此種の人は實に女權の強き英國などに於ては殆ど多く見ざる所なりき。夫人は既に五十に近き程の齡なりけれども容顏清く麗はしく妙齡の昔忍はるゝ人品いと氣高く奥床しく立居ふるまひいかにも優美閑雅にして天晴貴婦人の標本たるに耻ぢざる人なりとぞ覺えし。夫人は其子女を鍾愛すること甚だ深かるどもに之を教ふること亦極めて厳しく子女の其母を愛し慕ふことも格別なると同時に之を恐れ憚ることも亦非常なりき。概して云へば彼等は其善き事を爲しけりと自ら信する時は一分時間だも速く母に見えて之を見し之を語らんと勇みたち又其惡き事を爲したりと感ずる時は其母の足音を聞きてさへも身を縮めて懼れ愁ふるところ無かりき。一日彼の幼少なる未女は頻りに其廣間と次の間との間を走り廻りて或は椅子に登り坐蓐を拗げなどして戯れ遊びぬ。(來客ある時も其處に小兒の來り遊ぶを許すは極めて親しき友達の間柄のみに限る。)夫人は小兒の名を呼びて靜かに爲べしと誠めたるに彼

女暫時が程は長椅子に横はりて打ち静まり居たるも、頑是無き子供の事
とて、須臾にして復たもとの如く騒ぎ始めたるに、夫人は更に嚴かに再び
其名を呼びて去れ。次の間に行けと命じぬ。其時嬉戯跳躍我れを忘れ
て、笑ひ興じ居たりし小兒は、其母の顔の常ならぬを見て、忽ちに肅然と身
を締め首を垂れ、足音を盗みて恐るゝ。他の一室に至り、大きな椅子に
身を埋められたるが如く、腰打ち掛けて短かき足の中途に垂れ下りたる
を、動かさんともせず、双眼に涙を浮べたれども、それさへに拭ひもあへず、
息を殺して悄然たるさま、他の見る目もいたはし氣にいとほしかりき。
母は更に、此兒を見向きもやらす、又朋友と談話を續けぬ。わが國の習俗
ならんには、義理にも何と取りなして、其死しをも請ふべき所なれども、
此國にては親の子を教へ、誠めなどすること、甚だ至當の事なり、其兒の爲
なりと思ふ時は、決して御世辭に執りなし、詫び云ふ等の事無きは、嘗て屢
々見聞したる事なりければ、余も亦知らず顔作りて言交せもせず、打ち過
ぎたりき。斯くすること大凡一時間近くにもやなりにけん、この憐れな

る小兒は、恰も四人が、救死の沙汰を待つが如く、時々頸をひきて、母の方
を痛み見、且、喟然として首をうなだれぬ。余は餘りに惘然に覺えて、竊に
夫人の耳に口寄せ、彼女は最早大人しく成り給ひぬるものを、速く死して、
此方に呼び還し給ひぬ。と勸めたりければ、夫人は打ち微笑みて、小兒を
招き寄せ、必ず再び悪騒ぎなせそ。又母の一度命じたる事は、能く心に止
めて忘る可らず。と教へたるに、小兒は、其許しを得しを、いたく悦びて、暫
時が程は、其母の膝に、しかど取りつきたる儘に、打ち臥したるさま、いと痛
はしくも愛らしかりき。又或時五人の子供と、晝飯を爲しつゝありしに、
右の小兒の姉なる、八つ許りの女兒が、食物の心に適はぬにやありけん、折
々、給仕の者の顔を睨めて、食刀と食叉とにて、皿の中の物を、衝き廻し居た
りしに、母夫人は、其女の名を呼びて、穢なき食べ方を爲す者は、人と會食す
ること能はず、速く去れ。と命じたるに、彼女は、悄然と席を離れて、食堂よ
り出で行きたりしが、戸外に出づると、頓てわつと泣聲の聞えたるも、夫人
は更に、意に介せぬさまなり。余は、其家庭教育の嚴肅なるに、感じて、覺え

泰西婦女風俗 家庭の有様

三六
ず賞賛の語を發したるに夫人の曰へらく、凡そ兒童を教ふるには父母の命令決して二途に出でざらんことを要す。而して知らるゝ如く、わが夫、子女教育の事一切を擧げて余に一任し、敢て一語も交へらるゝ事無く、夫若し余がしつげを見て、非なりとせらるゝ事ありとも、彼等が前に在りては却て、其非に贊成の狀を爲し置き、さて後竊に余一人に向ひて、此事は斯くしてはいか、彼言は斯く云はんぞよかるべきなど、助言せらるゝなり。斯の如くなれば、見等はたゞ余が命令には必ず勉めて従ふべき事と信じ、余も亦謹みに謹みて、些末の賞罰をも苟くもせざらん事をねんじつゝ在るなり。さて、愛兒を教育するの注意は情に流れず、理に泥まず、仁恕にして、しかも嚴格なるべし。又其子の齡いけなしとて、毫も侮り輕んずるの狀無く、其詞は簡易なるを撰ぶべきも、其心は猶大人に對すると、異なる思ひ無からしむべし。總じて幼兒は存外に利發なる者にて、其割合には、大人は愚かなる者にこそあれ。左は覺さずや。」と云はれたるげに、さる事とあはせて、最といみじくぞ覺えたりし。是夫人また殊の外の日本

びいきにて、我が女子教育のありさまより、其風俗習慣等を聞く事を悦び、又東洋文學を好み、且英文に反譯せる釋子の傳記、佛敎等にも涉獵し、時には最とむづかしき質問等にあひて却りて詞窮する折の無きにし、もあらざりき。さるからに、夫人は彼の過激なる男女同權論等には、絶對的反對者の一人にして、深く日本の武人的教育及び其家庭に薰陶せられたりし、女子が當時の情況を尋ね聞かんと欲すること切にして、屢其美風を賞揚し、余を諷して、吳々も歐米の流弊に溺るゝこと勿からん事を以てし、殊に、其女子教育の程度は、高まるに從ひ、これに伴なふ時弊の恐るべき事等を、さし示されたるなど、甚だ少なからざる利益を感じたりき。蓋し前にも云へるが如く、前者女博士の家は、中等社會の中等とも云ふべき所、後者の夫人は上流の中等より以下許りにもやあらん。故に或ひは上等社會の條に附記すべきかと思ひたれども、此女博士の形狀風采と並べ記す時は、彼是を見比ぶるにも頗る便宜なるべきを、はかりて遂に爰に書き加ふる事とはしつ。

兎にも角にも是等兩婦人の如きは彼國に於ても最も感ずべく賞すべき其粹を振きて掲げたるなれば決して總べて斯くの如しと云ふにはあらず。概して云へば歐米に於ては善も亦我れより優り、惡も亦我れより遙かに優りたる者多きに居るが如し。されど見聞淺き我等が口より言ひ出でんにはこもまた皮想の見とや笑はれぬべき。

凡そ子女を教育するに最も必要なるは其家庭の薰陶即ち母親が補導の力による事は今更茲に之を喋々する迄も無し。而して中等社會に在りては家庭教師保母の助けを借ること少く大抵皆其慈母の手に教育することにて主婦が旨と意を用ふる所は此子女教育の一點に在り。さて嬰兒の哺乳は大抵牛乳を用ふること多きに居り常に正しく時間を定めて之を與ふるなり。されば其定時に至らざる間はいかに泣きむづかることあるも決して其規則に違ひて濫りに其欲する儘に與ふる等の事無きは勿論總ての事愈極めて正格なる規定に従ひて取扱ふことに馴れしむ。斯くの如き習慣は遂に其子が第二の性となりて時來たらざれば其請ふ所を得其欲する所

を爲すこと能はざるものと心得小兒は漸次其好き爲癖に馴れて遂に容易に泣き叫ぶこと無きに至れるものなりといへり。(凡そ歐米の家族に住居したる程の人は皆彼等が小兒の泣聲を聞くことの其日本に比して最も少きを感じたりといふなり)斯くてやうく牛乳に麵包を交ぜたるもの及び肉汁等を與へ次第に柔かき肉類輕き菓子などを食せしむる程に至るも日本の如き飽氣の物無く又かゝる不衛生なる食物を人の贈る等の事無ければ小兒が衛生に就きては甚だ懸念の點少なきに似たり。衣服は大抵フランチル木綿の類を用ひ裾極めて短かきが故に鞞と衣との間より殆ど膚を顯はしたるなど極寒の土地に於ては餘りなる迄覺ゆれども小兒にはなるべく薄着せしめて且其手足の充分に働かし得らるゝやうに爲向け置くこと最も肝要なりと云へばこも亦小兒衛生の理には協ひたるものなるべし。斯く中等の所にては滋養ありて最も消化し易き物を以て充分に養ひ爲したる幼兒の然かも狹袖短装の身輕き衣服は彼等をして勝手に活潑なる運動を爲さしめ遂に軀幹偉大心身強健なる國民を造り出だし北風骨を

削る寒帯の地源暑膚を爛らす熱帯の國にも能く堪へ能く凌ぎて更に格別の痛苦を感ぜざるに至れる。体育の注意と其發達とは殊に英吉利を以て其最たるを稱せざるべからざるが如し。さて是等の小兒が幼稚園に入るの年齢に至る頃ほひよりして専ら自立の精神を養成せんことを勉め其見の手先きさへまだ確乎と物取りしたゝむること能はざる程よりなるべく頭巾靴の紐等をも自ら結ばしむるなり。其風俗に習はぬもの、側らより之を見る時はいともどかしくいたゞしき心地さへせられて己れ先づさし出で、助け爲さまく欲する許りなるを其母なる人のつくゞと打ちまもりて、そが拙なき爲方に打任せ置くことさても、心長き人達かなど、驚歎せらるゝことも屢々なりき。斯くて年や長じて學齡に至るに及べば、其衣服の着更へより、日々携ふる所の書籍器械等を自ら整理し取扱ふが如きは云ふも更にて、漸々物を算へ物を購ふの仕方を覺ゆれば其使用すべき筆墨紙書物等の一切も大抵自ら市に求めしむ。金錢は勿論幼少の時より分ち與へて、其貯蓄心を養成せしむると切なり。故に彼等は、いとけなき頃上

り、金錢の尊きを知ること非常にして其己れが好める玩具などを購はんとするに當りても先づ其價ひの高下を問ひ我が貯蓄金の多少を考へて、其然るべきを撰ぶ等、誠に大人恥かしく己れがしれゝしさの願みらるるに添へて、かたへは少し憎げなる迄覺えし事さへぞありける。さるからに親子兄弟他へ行きて歸宅せし後先づ第一に務むることは、其日支拂ひたる相互の金錢出納なり。縦令一錢一厘たりとも精密に計算して取るべきは取り遣るべきは遣り毫も曖昧に附して捨置く等の事なし。又父母の親戚朋友は勿論下女下男と雖も、年若き子女の前に於て淫穢賤汚の言行に互れる談話を爲さざるは言ふ迄も無く、既に胸部より以下の事及び不淨場等に関する所の事さへも決して之を口にせざるが如き風俗習慣は兒等が純白なる性情を彌々益々清淨ならしめ、無邪氣にして子供らしき氣風は大いに其修學の點に於ても亦甚だ利益少なからざるを見る。又女兒の年齢十五六歳に及べる者も垂髪短衣毫も身に粉粧を施すこと無く、公衆の群衆せる公園等にて、輪を廻し細飛びを爲し、最も活潑なる遊戯を爲すを以て無上の樂

みとし、其舉動格別男兒と異なること無し。然れ共父母亦たこれを制止すること無ければ、彼等は其身長の母と相ひ均しきに達するも、猶小兒の舉動の如く、其頸に巻きつき、其肩にかかりて日本の十一二の子供よりも、猶幼げにぞ見ゆめる。是故に、其學を修め、藝を學ぶに當り、其体育智育上に於るも、天真爛漫更に覆ひ隠す所無く、恰も彼の山野に生ずる樹木の心の儘に、花咲き葉茂りて、自からなる風致中々に見るかひあるが如く、其枝を撓め、葉を透して却りて、美しき花、好き果を得ること能はざるに似ず。總て彼れが教育の方針は、皆此天然の儘をなるべく助暢して、其の餘儀無きもののみを削除するの目的なるが如し。されば、其家族に於るも、親誼ひ子躍りて、夫婦親子は、恰も朋友の如くなれば、斯くては、又其子女を教誡するの道も、竟に過ぎ、愛に溺るゝの弊無きかと云ふに、此點に至りては、又誠に嚴格なるものにて、例へば小兒の稍物心を知る頃より、其母親が禁制せし所の食物を強て請ひ求めらるゝ儘に、止む事を得ずして、時ならざるに之を與ふる等の事無きは、無論の事にて、彼等若し其興へられたる食物を嫌ひ、今日は物欲しからずなど云

ひて、食せざらんと欲する時も、母は其兒の顔色を見、肝温脈搏等を驗べ、彼れが食を欲せざるは、其疾病の爲にあらざして、我儘の爲なりと察する時は、必ず強硬手段を以ても強て之に食せしむる等、其他幼兒が偽言を云ひ、不正を行ひ、或は勉學に怠りたる時の如きは、日本の武人の教育の嚴重なりし、當時の家庭さへ思ひやらるゝ許り、實に嚴にして、少しく酷に亘るの嫌ひ無きかを思はしむる程なり。これ然しながら、此中等階級の家格に於ては、多少父母より得る所の家資あるにもせよ、大抵躬行以て其自活の道を求むるに急にして、しかも生存競争の烈しき何種の業、何等の學も、何等の一つの得る所無き者は、殆ど世に立つこと能はざるが如き、今日の形勢殊に敵國相ひ接して、一步を進むれば、一步の益、一步を退けば、一步の損ある、大陸國民の生活上、勢ひ斯の如き不撓の精神を堅め、専ら實利實益主義の教育を箇々の家庭にさへ施すこと、はなれりけん。要するに、彼れらが取る所は、賞罰嚴明善を善とし、惡を惡として、毫厘も借さざるを主義とし、其舉止動作も、極めて規律を守ることを嚴かにして、恰かも有情なる機械の運轉するに殊ならず。故に、

女子が意思風采も先づ前條に述べたる某女博士の如きを以て最も賞揚すべき婦人の標本なりとなすものに似たり。(上流社會のある部分はやゝこれと趣きを異にするあり。尙後に云ふべし。)さて兒童は日曜日には必ず其父母兄弟姉妹に伴はれて寺院に至り、祈禱を爲し、唱歌を奏し、法文を聴聞せり。殊に英國の如きは當日、寺に詣でざる者極めて少なく、且其時間は大抵一時卅分間、長きものは二時間にも亘る事あるも、猶いと幼少なる小供の更に一言も發せずして、大人しやかに、其終るを待ちつゝある形状は外の見る目痛はしき迄覺ゆれども、これやこの英國人が最も強き耐忍力を養成して、又且神なるもの、觀念を其純白なる小兒が腦裡に注入することを務むるの目的なるべし。又此兒童が休業日に於ては家族の年長者或は教師などに伴はれて、博物、美術、書籍、繪畫等の諸館より、貧民養育孤兒等の各院、勸植、物、養花園、又は諸公園等に往きて遊ぶことなるが、總て彼等の目に觸れ、耳に聽く所の者は、大旨其智徳を涵養するに有益なるものにして、知らずく其裨益を得覺えずして、正科の學業をも助けらるゝこと、實に少小ならざるな

り。彼國の習慣にも、學校外の時間に於て、他の學問技藝を別に習はしむるの風無きにしもあらずと雖も、其母なる人の大抵皆己れも亦た學校の科業を一通り踏みたるなれば、決して無理なる業を、無慾なる幼兒に科し、又は學校教師に不平を鳴らさせ、迷惑を感ぜしむる等の事少なく、能く其子女が健康と學力との平均を有たしむること、適度なるもの多きが故に、家庭、學校、相ひ待ちて、其教育の方針、衝突矛盾する等の虞へ甚だ少なきに似たり。斯くて、やうく年長くるに従ひて、女兒は専ら、其母の手助けを爲し、且漸々實容の應對、接待等、其交際、に熟練せしむることを習はするなり。然れども、亦別に専門學を修めて、大學に入り、或ひは、特種の學校に通ふ等の者は、女兒と雖も、殆ど男子と均しく、其家事、内政の上には、關係せざるが如き輩の無きにしもあらず。總じて、外國の兒童は、男女ともに、極めて活潑にして、且強情なり。其家庭のしつけ、嚴格なるにも、關らず、父母に抵抗し、兄弟に違背するが如き言行、女兒に在りても、随分これ無きにあらず。さる代りに、妬み、猜み、疑ひ、廻り氣等を逞ましうし、又は、中言、謔言などを爲すこと、及び恨みを隠して

其人を友とするが如きは甚だ稀れなり。自ら其權利を主張して、一歩も人に譲らじと争ふ代りに、又他の權利の内に足を入れ、或ひは人の嗜む人の批評に、わたら、貴重の時間を費す等の事は自らも耻ぢ、人にも爪弾きせられて、面前其非を鳴らさるゝが如き、社會一般の制裁力は、兎にも角にも其表面上、一目整然として、秩序正しき強國の躰を形作るに至れるならん。なほ左に、一二見聞せる小見がしつけのさまを掲げん。

一日余は某婦人及び其兒童等とも、水晶宮の音樂大會に臨めることありしが、其歸途同所の靴具店を過ぎたりしに、母婦人は此店頭立ち止まりて、我が親愛なる兒よ。御身等、何にても欲しと思ふ物を云へかし。取りてまゐらせんと云ひしに、齡九つ許りなりける男兒、少し内氣の質と見え、さど顔打ち般め指喚はへて、さすがに彼れ是れと見廻はしながら、孰れにてもと答へて、母の顔を仰ぎたるは、其撰定を請ひ求むるに似たり。其時婦人は更に母が許して、御身の望む所の物を云ふべしと命じたるに、何とて心に欲する事の口に云はれぬぞ。御身は男兒ならずや。己れが

希望を云ふこと能はざるは、憶病なり。又目に見れども、とみに思ひ定むること能はざるは、決斷無きなり。御身が靴具の好悪は母が知る事かは。とくく自ら撰び出でよ。否ならば、需めずして歸るべし。と云ひたれば、見はげにもと思へるさまして、忽ちに小さき劔を取り、女兒は粗立木片やうの物入りたる箱を購ひ、數理より工夫したるもの、左も悦ばしげに持ち捧げて、母の側に走り寄りける時、婦人は軽く兩兒の脊を敲きて、善し。御身は劔……軍人にならんとや。御身は此箱か……ア、女に似合はず、理屈好きの性質、他日何ぞの一大發明にてもせよかし。と打笑ひぬ。其人に依頼せずして、自ら爲すの心を養ふこと、すべて斯くの如し。

又ある時、ある女史の、其が三人の子女及び其他の子供、兩三人を伴ひて、植木園にもしたる事ありしが、長女次女等は、友達を打ち連れて、小半町許りが程先きに立ちつゝ、左も樂しげに物語りして行き過ぎぬ。末の男兒の、年齢七つ許りなるは、母と余とが間ひに入りて歩みつ。兒は急に立

ち止まりて「母よ。待ち玉へ」と呼びさし俯伏きて靴の紐の解けたるを結
び直しぬ。されど結び終りて五六歩歩めば直にまた緩みて解けんとす
る故見は更にこれを結び直すこと兩三回其姉と友人との遙かに遠く行
き離れてとある花壇の邊りに立てるを臨み見は羨ましくも且はもどか
しくもや思ひなりにけん忽ちに涙の玉のほろ／＼とこぼれて、そが小さ
き手の甲に落つるを見たり。斯くてもなほ母なる人は手傳ひて結ばん
どもせず、つく／＼と打ちまもりたる氣長さ、我れさし出で、助けもせま
ほしかりしかど辛うじてねんじて、其がせん様を見居たりしに、見は再び
「母よ。此紐は如何にしても確と結ぶこと能はず、人々ははや花壇の中に
入り玉べるものをいかでこれ結びて玉はらんと請ひたるに、其時やうや
く母は打ちうなづきて、さらば結びて参らせん。されど御身此頃は、これ
結ぶこと上手になりて、常は能くしつるものを、今日のみ斯かるは何故な
りと思ふか。これ御身が心の早く先きに走りて爰に在らぬが故ぞかし。
すべて學校にて物學ぶも斯くの如く、目には見、耳には聞けども、心此所に

あらざる時は更に其習ひしことの記憶の底には止まらぬものぞ。能く
熱々思ふべきなり。」と云ひ教へて、さて後に靴紐は結びて取らせぬ。
又左の一段は以上の二婦人が階級よりは、やゝ劣等なる家格のある老婦人
と、其孫兒が事に就きての一話なり。

或家の老主婦が女け極めて音律に長じ、又聲いと妙に謡ふと聞きて、余が
友なる某女の一日往きて、其唱歌一曲を所望すべしと、そのかされつる
儘にいととて、其が家を訪らひたりしに、老婦人出で迎へて、「いとあやにく
なる事かな。通れ難き人に懇望せられて、已む無くも、其所に往きたり。
されど今一時間が程には必ず歸り來るべきに、若し主達の在しませんに
は、いかで其理由申して待たせ玉へと請ひ参らせてよと云ひ置きて候ふ
なり。暫時慰はせ玉へなど、他事もなく云ひて、頓て客室に誘ひぬ。斯く
て爲すことも無くて、つく／＼と待つ程、折から暑き程の事にて、次の室の
戸も開け放ちたるに、やゝありて十歳許りなる男兒の惶たしげに外の
方より入り來て「祖母よ。見は、此涼車にて歸宅ねばならず、又次の休日に

は再び来るべし。と云ふが否や老婦人は其答へはせで忽ちに眼をつぶらにしましても、此見のしだら無さよ。これみよ。御身が坐に三錢の錢を投げ出だしたる儘に何所へか行きつる。子供に取りてはたいまいの金其れのしまつ忘るゝ様にては兎ても一家を経営すること、思ひもよらずされど今日は先づ見免してん。再び斯かる不取締の行ひをなさば、祖母は拾ひ取めて再び御身に返さむ。と叱り更に、お、忘れたり。昨夜、御身に金二錢を立換へたりき。我も失念したるが悪しけれども御身もまた誠に記憶の悪しき事よ。こも亦其不極りなる性質が爲すとぞかし。以後能く心に注めて、苟くもすること勿れ。と戒めたるに見は、しぶく承引きて、今錢入れの中に仕舞ひたりし銅貨二錢を再び取り出だして、祖母に返しぬ。其時、祖母は氣色なほりて、善き見よ。また次の日曜日に来たれ。祖母は御身を御寺に伴ひて、歸途には某所の公園に往かん。いざこれ持て歸りて母に見せよかし。と云ひつゝ、何にかあらん、小さき紙包みを渡しぬ。見れば最と嬉しげに悦び受けて、忙がはしく出で往きたり。

衣食住に就

この金錢の取扱ひに綿密なる其最も勘定高き風俗、側目より見れば、いと餘りなる迄覺えて、あらずもがなの心地せらるゝや、例の經濟貨殖の道に拙き、古代の志れ心にこそあるらめ。

衣食住に關する一般の事、即ち其風俗の所に記すべきは、爰に省きて、其主婦が日常旨と取扱ふさまのみを、この家庭の條に云ふべし。(前條主婦のしわざの條、即ち其日課の所に云へること、や、重複の嫌ひ無きにあらざるも、その事項の相似たるを以て、また已むことを得ざるなり。讀者幸ひに宥恕せられよ。)總じて、泰西風の衣服は、其仕立さま、専ら其身體に能く合ふ様に造るべきを要するなれば、其格合、中々むづかしきものなり。故に中等社會に在りても、(上流、下等のことは別に云ふべし)其衣服(表衣)の調製は、大抵仕立屋に命ずることにて、主婦は、先づ其布帛地の見立て、及び其積り方等のみを爲すに止まる者多しと雖も、褻の服は、自ら裁ち縫ふ人も少なからず。盛服と外套との裁縫は、無論、本職の人に任するなり、或特別の人を除くの外は。

但し、外套は、仕入れ物を撰び購ひて、其不充分なる所のみを直さしむること

あり。下着の類は、皆其出来上りたる物を買ふを常とすれども、學校などに、裁縫練習の爲に、女兒等に縫はしむること、さらでも亦た、自ら製することもあるなり。殊に節儉なる婦人は、大店に、裁ち屑の小布片を求め、これを集めて、巧みに美服を調製し、且陳る物を縫ひ變へ、或は飾りを改め、なして、いと器用に取ししたゝむるも多し。鞆肩掛等の如きは、自らも編み、店にても購ふなり。(肩掛は、唯室内にて、朝夕俄かに冷氣を感じる時などに用ふるものにて、決して、戸外に出づる折、外套の代りに被ふものにはあらず。但し農家の老嫗が肩掛して、歩行するを、田舎道などにて見る事もあれども、其れ將た若き女子などは、先づ用ひざるなり。)鈕のちぎれたる、裾の破れたる、其他の繕ひ物は、大抵主婦及び年長なる女兒等が必ず自らする事なり(前條にも云へるが如く)。是等の家に在りては、極めて幼少の人の外は、子女どもに、我が衣服は、己れ自ら取り扱ひを爲す事にて、寝に就く前には、ブラッシにて汚塵を拂ひ、衣服掛にかけ、又は、箆等に藏め、翌朝これを取り出だして、更にブラッシもて拂ひ、さて後に着用す。其器具及びこれを据まつくる所の居室も、

極めて簡便に構造したれば、日々其取扱ひに多くの時間を費やすこと無し。而して、汚れ物は先づ大抵集め置き、洗濯屋に出だすを常とすれば、こも亦た、格別甚だしき手数を要せざるなり。さて、衣服の着ふるして、最早再び使用す可らざるに至れる物は、古着屋に賣りもじ、貧しき人に、恵みもして、徒らに納戸の内に藏め置く等の事無ければ、我が邦の如く、物置場、衣服の器具等を、數多く要する事無し。(なほ風俗の所に詳記すべし。)殊に、兒童の衣服は、決して數多く作り置く事をせず、なるべく、手丈夫にして、且洗濯にも堪ふる様の地質を撰び、其時々、調製し、女兒が垂髪の間は、塵造なるレース、或は別の布片を襟より肩の廻りにつけ、風々これを取り變へて、洗はるゝ様の衣服を用ひしむるなり。又婦人の帽子は、平常用ふるものは、勿論はれなる時、分も大抵、其したちの品及び飾りに要する造花、羽毛、絹紐などを見繕ひ、買ひ求めて、主婦自らこれを製し、且女兒等の爲にも造ること多し。普通の家にては、普通店頭にある所の、出来上りの帽を、其儘購ふ人は稀れなり。此他、手袋靴等一切、衣裝に附屬する品の取扱ひに、心を用ふることも甚だし。これ其

物品の價額、孰れも廉ならざるが故に、従ひて、これが保存法に注意すること
は、また自然の理にして、彼の國人の經濟思想に富める主婦が家事經濟の點
に忽せならざる、大旨斯くの如し。

飲食物も、風俗の所に依るべきは、爰に除きて、専ら主婦が取扱ひに屬するも
のを云はん。凡そ牛乳、麵包及び獸肉屋は、大抵の土地にて、毎日其需用の品
を持って來る事にて、其他は中等の家にては、主婦自ら出で、市に需め、時とし
ては、婢僕を以ても、これを購はしむ。又一時に買ひて、貯へ置くに宜しきも
のは、穴藏の中に仕舞ひ置くなり。(穴藏は大抵の家に在り)さて日常三度
の食事には、其食物を盛りたる鉢を、主婦の前に据ゑしめて、自ら其分つべき
家内の人數につけ分くるは、勿論婢僕の分も、己れこれを庖丁して、分ち與ふ
ることにて、決して肉一片、菜蔬一塊たりとも、彼等の自由に任ずる事無し。
(勿論食物の分量は、其煮爇に取り掛る時に、何人前と見積りたる故に、大抵殘
餘の多くあること無きなり)其料理の鹽梅は多くは、主婦自から爲して、さ
て下婢に助手せしめ、其出來上りを視ることなれども、久しく使ひ馴れたる

婢僕ある家などにては、唯其選定見積り等のみをして、大方彼等に打任せ、調
ぜしむることもあり。又蒸菓子やうの物、ヤミ等は、果物を市に需めて、主
婦之を自製し、貯へ置く等の事もあるなり。殊に夏季飲料の如きは、主婦能
く注意して、種々の物を調製し、置きて暑氣を拂ひ、渴を止むる等の料を爲せ
り。

泰西都府の家屋は、大方借家なるを以て、これに住する人は、室内の裝飾を爲
すに止まり、其地價の高直なるが故に、庭園等の廣やかなる所あること少な
ければ、屋外の掃除に多くの人手を要する等のこと無きなり。而して、塵敷
居間などの飾りつけは、勿論主婦が業務にして、其少しく餘裕ある家にては、
時々其模様を換へ、又各種の花弁を以ても、装ひなすことなれども、總じて花
物の價ひ甚だ不廉なるが故に、是等中等の家にては、平常多く挿す等の事無
し。室内の掃除は、大抵一週間に一度程、主婦も下り立ちて、下婢の手傳ひし、
すべての物品をも取り除けて、丁寧に汚座を拂ひ出だすなれども、毎朝は、唯
さつと柄の長き、フレンチ様の箒にて、床上の塵をはき、布片もて、物の上に溜り

たる埃を拭ひとる迄なり。殊に手洗臺の水鉢其他を洗ひ拭ふに洗足盤も、嗽ひのソップも、一つ手巾にて無雑作に拭き取るさまなど、是れのみは不馴れの目にはいとく氣味悪しく覺えたりき。(家屋の構造其他も、なほ風俗の所に云ふべし。)

總じて、泰西の家族には、父母舅姑及び小姑等の相ひ住すること少なく、一夫婦の制また異腹の子女を養ふこと稀れなり。故に一家の内互ひに氣兼ね打ち隠しの風あること少なきを見る。(委しくは風俗の所に云ふべし。)

分けても家族の娛樂最も其多きに居るは殊に英國の習俗なることは、前條既に云へる如く、これは是れ其領土の次第に廣くなりもて行く儘に、其本國民の殖民地に移住することを奨勵勸誘せざる可らざるの必要を生じたりき。而して其母國を離れて遠く異風異俗の他邦に行かんと欲する者の爲には、其が一家族團樂の娛みより外に在ること少なかるべければ知らずく此風習は漸々盛んになりぬるなめりと云ふ。げに、さる事にもやと覺ゆる。さて、是等中等社會に在りては、各自みな其職務家業に營々として、晨より

宵に至る迄敢て要用の外に冗語を爲すの暇さへ無ければ、其喫茶の時間に及び、家内始めて一室の中に打ち集ひ(勿論主人は大抵薄暮まで歸宅せざる人多きが如しがひに、笑語快談するなり。さて、夜食の時に至れば、終日外に在りて事を執り業に就きし人々も、漸やく其家に歸り集まりて、其日ありつる事どもを彼れに語り、是れに咄して打ちくつろぎ興むあへるを常とし、食事終りては音楽、舞踏、玉突き、將棋、其他種々の遊戯を爲し、稀れには食後一時間計りを經れば、我が書齋に入りて、書見を爲し、又は文章を書く等の事を務むる人もあれども、先づ大抵は其時を惜む人と雖も、夜分は割愛して、談話遊戯を試み、強ひて無理なる勉強等を爲すこと少なし。故に余は、其在外中折々夜食後に己れが部屋に引き籠りては、其主婦に諒められ、引き出だされ、左迄面白しども感ぜざりし、音楽を聞かせられ、不馴れの遊戯をも爲すことありき。) 勉めて百事を放棄し精神を安めしむるの仕組、其健康上の注意決して忽せならざるを感じたりき。又其國の中に少しにても空地ある家にては、大方、テニス、コロッケト(蘇邦にては、グラケット場とさへ設けて、女子も盛

んに此遊戯を爲すを見たり。等の遊戯場を作り置き、休業日などには、夫婦親子兄弟姉妹相集まりて庭園に下り立ち、此無邪氣なる子供らしき遊戯を、左も娛しげに打ち興じ、餘念無く走り騒ぎ、狂ひ戯ぶる、さまげに斯くてこそ頭には秋の霜を戴けども、腰に眞弓を張りたる人、少くも面にはやゝ寄る年波の跡を止むれども、皮膚の色なほ艶めきて、老の坂高き齡の積りも、知らず顔なる強壯健全の國民、次第に其數を増加せる統計上の好結果又この躰育に最も熱心なる、即ち殊に戶外遊戯を好み、其精神身體ともに能く、堅忍不撓の人を造るに至れる、また英國の特有とも云ふべし。骨牌は、泰西にては最も流行せる遊戯なりと、豫て聞き及びたりしかども、佛國などにては、眞面目なる中等の家庭に於ては、極めて年少なる子女の折々之を翫ぶを見たるのみなりき。金錢を賭してなど、人の云へりしは、或る一部分のことなるべく、殊に英國にては余はさる遊戯を爲す家族には一泊をも爲したる事なかりき。すべて、何れの國に在りても、人の生活身分職業等によりて、其風俗も自づから、また各一部を爲しつゝあるものなめれども、泰西に於ては、殊

看護のあり

に又、其區畫の判然たるを見る。故に甲の部内のみありては、乙部の事を伺ふに難く、乙部のみ居りては、丙部を知ること容易からず。されば前條述ぶるが如きも、眞にたゞ余が見聞せしもの、限りを云ふなれば、其知らざる所に於て、これを闕如するは、また已む事を得ざるなり。(尙風俗の條に云ふべし。)

凡そ中等社會の家に於て、女子が必須の科として習ふものは、家内の衛生と、看護の方法となり。(勿論上流の女子も、學ぶ事なりと雖も)されば是等の家族にては、流行感冒又は僅かの疾病等には、大抵醫師を招く等の事、少くも主婦先づ、其肺温脈搏呼吸などを檢して、衣服飲食等に注意すること、は云ふもさらなり、大方の藥劑は自ら指揮して、藥種屋に求めしめ、又は種々なる飲料を貯へ置きて之を興へなどすること、恰かも我が従前の田舎の風俗に似たるも、其衛生と看護法との發達は、大抵其手當衛養のしかたを過ること、少なしとぞ聞く。さて、其患者をして、醫に診せしめざる可らざる時、此病症には、誰れ、其れには彼れと、其専門の醫を撰び、(慈意なる主治醫ある家にて、少

しく念入りたる病症には主婦先づ進みて其専門家を撰ぶことを勉むるなり。最も彼の國にては分業の方次第に盛んになりもて行くまゝに醫家中にも其専門の種々に分れたる事極めて夥多しき數となるに至れりと云へり。發病のありさまより経過の模様をも逐一に説き示し醫が診斷を聞き其手當に着手するにも更に醫師が多言を用ふることを要せず。これは是れ一人其主婦のみならず少しく事に馴れたる年長の下婢はまた一通りの看護法は心得居る者少なしとせず。又家族の傳染病に罹りたるは勿論少しく注意すべき病症等なる時にはたとひ其兄弟姉妹と雖も濫りにこれに近づく事を許さざる程なれば兎て其朋友などの訪問にあひても全く快氣の後醫師の充分に消毒法をも施し安心して許可したる上ならでは決して其室内に導く等の不注意なる事無し。よし又普通の病にても容易に客にあはしめて患者を疲勞せしむる様の事はせず。客も亦これに面會を請ふ等の事は更にある事無くして見舞の人は玄關より歸るを常とすなれば大患者ある家にて對客に暇無き等の手数を要する事少なし。殊に小兒が疾病

は最も其母の注意による事多ければ多人數の子女を持たる家にては主婦が繁忙實に非常なるべしと察すれどもそれ將た我が國の如く二重三重の餘計なる用事無き故にや随分病兒の看護を爲しつゝも其職務を執り居れる某々女史が働きいかにも行き届きたるを見たりき。(余も東京にてインフルエンザに罹りて其家の婦人が甚だ懇篤なる手厚き看護を受け又其始めに滞在せし某女塾の老婦人が三四週間の床に打ち臥したりし時其女なる人の看護能く行き届きて半ばはこれ醫師なるが如き取扱ひを爲すを見たりき。勿論此女子は随分衛生學にたけたるよしなれば左もあるべき事なり。且又余が親友なる某夫人が子息は餘程虛弱なる質にて屢々疾病に罹れりき。其都度母夫人が看護のしかた甚だ宜しく能く其事に手馴れたる容子を見る度には女子が斯道に習はざる可らざる事を益々深く感じたりき。又患者の臥室には殊に戸を開閉する時の煽り風及び一方の窓と他方の窓とを開きて兩方より風の通り抜くることを禁ずること甚し。(普通の居間にては嫌へども)故にさらでも堅牢強固なる築造の家は其戸をし

め切る時は決して隙も風のあるべき様無けれど病人の爲に其隙間を注意すると嚴重なり。其も理り彼の國にては、ドラフトと稱へて、非常に怖る程ありて、是に觸るれば必ず咽喉を痛め、感冒すると速かなりき。されば其國に在ては、能く其習慣風俗を尋ね知るべき事にこそ。概していへば、強健の者に於ては成べく、寒暑風雨にも馴れしむる様、身体を練らんとを勉む。就中年少者に在ては、最も冒險に近きとをさへせしむるなれども、醫を招く程の疾病に罹る時は、非常に注意して、鄭重に手當看護するを常とす。

以上中等社會家庭のありさまは、先づ其概略を掲げつ。左に述ぶる所の一段は、或ひは風俗の部に云ふべき事なるべけれど、いかにも其家族の形狀我が國と其趣きの異なる所あるを感ぜしからば、なほ筆の序に爰に記しつ。

余が三週計りが程滞在せし某女史が家族は、其實弟新たに妻女を迎へて、此新夫婦は三階に住み、女史は二階住ひにて、下は客室と食堂と三四名の女生徒が、洋琴を習ひに来る時の、藝古塙に宛てたりき。故に此家は、三人暮しなれども、其會計は、なほ兩家別々にして、所謂持ち合ひ世帯なり。女

史は、毎日近傍のある學校に通勤し、弟は某會社に其妻も貴族某の令嬢に、獨逸語の教授にとて折々通へりとか聞きぬ。さて余が宿泊せしより、四五日を経て、蘇邦よりこの人々の長兄なる人、嫂といふに來りて爰に滞在せり。久々にての入府なりとて、近親朋友を訪問し、又は此所彼所の物見遊山に殆ど毎日の如く夫婦打ち連れて、外出したりき。此日數大凡二週間程なりしが、唯一日、其兄弟姉妹五人連にてある所へ行きたるのみ、餘は更に相互誘ひ誘はるゝ等の事も無けれど、羨みもせず、不満も懷かず、其職務の爲に出づる者、其遊樂の爲に趣く者、極めて淡泊に最も無頓着に、たい一通りの挨拶を爲して、行き別れつ。歸宅後、同じ食卓に集まりては、其日の出來事を互ひにいと樂しげに語り合ふめり。さるを他人の我れは、却りて女史に誘はれて、學校にも行き、他の家をも訪ひ、又馬車を雇ひて、公園等を見物せしめられなごもしたりしを、何故に實の兄弟とは、斯くも疎々しきかと、打ち傾かるゝ心地すれど、能く思へば、皆これ各自決して互ひに其自由を妨ぐる事無きを主として、且表面を繕ひ、虚禮を飾るの風、少なき

が故に、勉めて他の望む所に従ひ己れが意を曲げて、餘義なくさるゝ等の事無く、其親戚の家に在るも、旅宿に在ると格別替ること無し。されば、勿論、其滞在中食物等の實費は兄弟なりとも、皆銘々に支拂ふ事にて、中等及び其以下の所にては、無論他行の時の入費も、亦た割前を出し合ふことにて、一人更に義理立ての費えを爲すことなれば、さてこそ、其出づる人も強ひて誘はず、其止まる人も別に何とも覺えぬなれ。げに斯る家族のありさま、ふと見ては、誠に友愛の情に薄く、且は餘りに勘定高き様の感われども、經濟の免さぬ事は、決して互ひに爲すこと無く、人々みな自主獨立の精神を強め、自ら働きて、自ら勞き、さて後に、自ら樂しみ、自ら遊ぶに、敢て他より干渉すること無し。人は人、我れは我れなりと思ひ澄まして、なるべく、他に依頼せず、己れ能くせんと勉むなる、強情我慢の氣風、又箇々の生活の度を高めたる一大原因なるべし。

族即ち爵位ある人官職高き人及び富豪の人をも數ふべしと雖も、なほ帝王國に在りては、格別の舊家ならぬ財産家は、やはり俄か分限と排斥して、是れと齒するを恥づるの風あり。又この物持ちは、いかにして、貴族と肩を並べんことを欲し、種々の手段を用ひ、金錢を撒き散らして、其地位を高からしめんと勉むるなど、なほ我が東洋の金満家社會に於て、時々耳にせし事柄にも似たる事あるなり。而して、其貴族と稱するもの口には、彼等を賤み退けながら、暗に崇金宗的の意向は、其實彼等富家と相ひ婚すること、を望むなど、其表裏相ひ反したる談話も、少なからずとぞ。兎まれ、唯單に、其資産の多寡によりて、階級を區別するは、北米合衆國のみなるべく、佛國の如き現に、今共和政體と成りて、大方貴族を賤しめ、紳家を輕んずる論鋒、舌刀の烈しきにも開はらず、下にはなほ、其舊格門地を慕ふの意、容易に消却せずと、仄聞くこそをかしけれ。さて、其授爵の掟てある國にても、何伯某男など云へるも、貧窮にして、貴紳の資格を有つこと能はざる如き人は、世に在りとしも知られねば、他の國より、ふと渡り行きたる者が、目にも耳にも止るべきにあらず。

故に余が爰に記せる者は富貴二つながら、ともに全き貴族の家庭と知られんことを希ふものなり。

世に幸ひ人と稱すべきは、泰西上流夫人の境界なるべし。女權の貴き國柄として、彼等は、其従僕等に尊敬せらるゝ程度の、或部分は、其主公が上にも出づる事あるなどは、言ふも更にて、其良人に敬愛せられ、内部には随分に種々困難なる事情の合著したるも、あるべきなれども、鬼にも角にも、一夫一婦の制度は、妻妾並び居ること無く、嫡庶の子女を共養する等の心配なければ、又其子女に孝事せられ、中には遺産の分與多きことを、其生前に望むが爲なりとの冷評もあれど、其眠らんと欲する時に眠り、其起きんと欲する時に起き出づるも、入るも、更に其長上の人の箝制、壓抑を受くること無く、其自からが齎らし來たれる、充分の嫁資は、終身彼女が權利を保護して、其望む所の寶玉をも飾るべく、其欲する所の美服をも裝ふべし。加ふるに、若し其人の慈善心あり、學識あるが如きは、世の爲道の爲に財を分け金を抛ちて、有徳有益の事に費やすを得て、以て芳名を竹帛の上に耀かす、また人世の快事ならずや。

斯くの如く説き來たれば、外國の貴族は、更に一點の患難憂苦と云ふ事を知らざる、極樂淨土の上品に身を變へたる人、天上の樂園に生れ出でたる輩の如くなりかし。勿論我が上流の女子に比すれば、甚だ自由に且歡樂の度も、高きには相違無きも、また一方より云へば、わが貴族にしては、實に夢にだも、見ること無き、非常の苦心を覺ゆることあるを知らん。見るべし。佛蘭西の貴族擯斥論、フランスの皇族放逐事件、其他英と云ひ、獨と云ひ、伊と云ひ、埃と云ふも、其言行一步を過まる時は、縱令帝王后妃、皇子女と雖も、新聞紙は更に斟酌すること無く、其過ちを鳴らし、其不可を攻め、人民亦たこれに雷同して、忽ちに皇族逐ふべし、貴族廢すべし、の激論鼎沸す。勿論我れの如く、卑野汚穢の事項を列ねて、漫りに人身攻撃を爲すとは無けれど、況んや露國の如きは、九重紫微の裡なほ、未だ嘗て帝后の夢隱やかなるの期無きをや。歐洲の皇室既に斯くの如し。況て其藩屏たる貴族に於るが如き、終始常に百般の事に注意して、貧民を救助し、公益を許り、世の爲國の爲に應分の力を盡さる可らざるは、勿論、其庶民に對する交際上、お世辭の撤き方、應答のしかた

等みな大抵貴婦人が實務として充分に心を用ひざる可らず。又其富豪家の工場を持ち山林田野を有する人は其小作人職工等の取扱ひ上恩威其當を得て彼等をして不満を唱へざらしむることを勉めざれば忽ち罷工同盟の大困難を見ること少なからざるなり。是故に富族の家の主婦は中々茫然として手を拱し、離人形然として美味美服に甘んじつゝあるの氣樂を學ぶこと能はず。概すれば其歳出入金の大要自分が資産は云ふ迄も無く衣食住の事就中其子女教育の事項に關しては、縱令皇族内親王と雖も自ら下り立ちて其方針を定めて且これを指揮注意せらるゝとなり。依りて貴婦人等が何の會某の社とて出金出席を促さるゝこと實に甚だ頻繁にして若し是等の事に冷淡なる人は社會の交際全からず云はゞ世の退け者とさげしまるゝなりとぞ。然し此種の人に於て最も羨ましく感じたるは其健康の最も宜しき一事なりかし。軀幹肥大にして血色殊に飽めき麗はしきは一見して其貴族婦人なるを證するに足れり。從來東洋にて柳腰風に堪へず花容春の雨に惱めるが如きを以て美人の標本としなるとは、大はいな

其日課

る相違あるを覺ゆかし。これ其居室の構造に於ける空氣の流通日光の射入等より寒暑を防ぐ衣服の撰定注意も其宜きを得(但し裝飾に熱心なる女子が胸部を強くしむる弊害を除くの外)滋養消化等に適する食物を用ひ而して身軀の運動は充分活潑に其生活行爲隨分自由の天地に逍遙することを得るもまた其健康を助くる一原因なるべし。是等夫人が日課のありさまを其見聞せる所の儘に記せば先づ此の階級の人には夏冬即ち盛暑極寒の季節は過半清涼温暖の土地に旅行するを常とし又は田舎の領地城砦等に閑居するもあり。その帝京都府に住居するは大率交際期月なるが故に各所の夜食夜會に招かるゝこと多く又自らも他を招く折少なからねば從ひて朝寝夜更かしの習慣多きが如し。さて其府中に在る程のことより先づ其概容を摘述せんに主婦は大抵九時頃に目を覺し寢室の呼び鈴を鳴らせば侍婢は紅茶或ひは珈琲と麵包との薄片に乾酪塗りたるもの二三片或ひはピスタット様の輕き物などを持ち來たりて枕頭の卓に置くなり。彼女は先づ是れを食べてさて裝飾に取りかゝる事

なるが髪は随分婢に結ばしむる人多しとぞ。(盛装の時は髪結にも結ばしむ)衣装を着け終れば食堂に出で、家内一同と會食す。さて後は書齋に籠りて書籍を認め新聞紙を讀む日もあり。又は各種の學校貧民育兒養育病院等の見廻り參觀等をなし(中には自費にて貧民學校慈善病院などを設立し、屢々これを檢分し、これを處理し、或ひは自らこれを教授し指揮する人もあり)午後よりは種々の會に臨席し、他を訪問し、又他の訪問を受く。(上流夫人は大抵在宅の日を定め置くことなり)此間夜食は親戚朋友互ひに招き招かれて殆ど寧日無きが如し。是等貴婦人もまた自から店に就きて、屢々物を購ふことあるなり。(但し、飲食物は商人より持ち來たり、又料理人行きて、買ふを常とすれども、他を訪問せんとする時自身店頭に馬車を止めて、果實等を需め、之れを携へ行くなどは珍らしからぬとなり)夜食には無論主人主婦共に禮服に改め、子女も其公然交際を始むる頃の年齢に及びたるは、衣裝を更へて、父母と相ひ列なりて、食を共にするなり。夜食後は、大方音樂舞廳等の賑やかなる遊びを備し、或ひは文談詩話の高雅なる樂みに夜を更か

す事もあり。又年長けて且宗教に熱心なる夫人の如きは、家庭教師に(家庭教師の事は後段に委しく云ふべし)聖書の註釋、耶穌基督の傳記等を讀ましめ、又自ら讀みなどして、其子弟に傍聽せしむるなどのことをも務むるなり。又天氣晴朗なる日には、兒童を誘ひて、此所彼所の公園動物園、其他の館院などへも趣き、専ら其智徳と健康とに裨益あらんことを希ふなるべし。殊に名望高き貴婦人の如きは、其信ずる道、即ち宗教、教育、文學、技藝、何れの事に就きて、會の設立、規則の修正、且つそれが擴張改正等種々の用件を依頼する人多し。然るに彼の國女子教育の普及は、既に現世紀の始めよりして、最も隆盛に至りたるなれば、目下既に七十餘歳の高齡に達したる女子も學校の組織教育の方法等一わたりは知らざる人も無ければ、其主意書約束規定の如きも、大抵皆自らが之を起草し立案し、或ひは知己の女博士、家庭教師などにも記さしめ、其修正助言等、又婦人のみにて取りしたるに、是等に就きて心得べき簡易なる法律などは、また其要を解せざるもあらねば決して、男子の手を借るに及ばず、皆女子の手に成就せしむることなり。さて前

條述ぶるが如き事項に關して、其良人に相談し、助勢を請ふと無きにしもあらねど、良人もまた己れが職務上に於て、其夫人に談合するも、また珍らしからぬ事なれば補助は相ひ互ひにして、實に同等の勢力、價值を有てるが如し。概して云へば貴夫人の日課任務は先づ交際を以て唯一の事とし合せて子女教育の大綱を取ることを、其要とするものゝ如し。

余が嘗て、倫敦に滞在せし頃、屢々來往せし某伯爵夫人の家は、英京中、最も繁華なる一市街の中央なりき。勿論夫人が夫は、樞要の地位に在る人にて、且つ其資産は極めて豊かなるよしなれば、其交際時期即ち府中に住まへる程の多忙繁劇他よりしてこれを見れば、人生果して富貴なる人が幸か貧賤なる者が幸かを疑はしむが如き感起したる事もありき。其夫人がやゝ閑暇の折は、午前二時間許りが程にて、毎夜就寢は深更に及ぶを以て、朝飯の終るは、大抵午前十時頃なり、それさへ各種の案内招待狀、詰否の指揮より自ら返事すべき書簡及びこれより遣るもの、認め方感は家事整理に就きて、侍女從僕、料理人等より伺ひ出づることの、所置返答

及び子女が教育上一切に關することまで自ら一々點檢し終り、進食終れば兼て約束の集會其他に至るか、然らざれば在宅して訪問客を受け又は他を訪問し、夜食及び食後亦た往きて會し來たるを待たざる折は少なし。而して一日、余は『母親會』(これは是等階級の人の子女家庭教育の事に就きて、研究討論する爲に設けられたる會なり)の支部を某所に置くとかの事に、廿三四名の貴婦人が會合せられたる日に、居合せたりしが、其日しも夫の方にも、何にかあらん所用ありと見えて、七八名の來客ありし様なりき。されど、夫人は別にこれを意と爲す容子も無く、熱心に、其會の事にて、辯論討論し、大凡午後二時より始まりて、同六時迄に及びたる時、小傭は軽く戸を敲きて、此の會場に入り來たり暫らく、入口の所に立ち、主婦が談話のと斷るゝを待ち居たり。(此間殆ど、四五分間漸やくにして、少しの暇を見怖るゝ、其側らに歩み寄り、耳元に何事をかさゝやきて、其旨を伺ふに似たり。夫人が聲は、小傭よりも少し高かりしかば、はづれく洩れ聞えぬ。)よし………最早我等が會は終りを告げんとせり。夜食

迄止め給ふとも、差し支へ爲しと申せとやうにありき。小僮の去りし後、尙ほ二三十分間許りありて、此夫人達は退散したりき。余は兩三日滞在の約束なりしかば、一人残り止まりて、其良人が友達二三の紳士と會食せり。其食卓に於ての談話も、良人は妻に向ひて、御身が熱心なる會は、段々盛大に趣くとやいと愛たし。支部の事は極まりたりやと問ひたるに、夫人答へて、漸々の事にて某所に設立するに定まりぬ。實に豫想外と申す程の好結果故、此度の大會には某侯爵夫人の宅にて賑やかなる園遊會を催す積りなりと云ひたるに、良人重ねて、其れならば余も少し張りこみて寄附金せずばなるまじなどあるに、夫人、何卒、充分の御奮發を請ふとて、更に隣席の某博士に向ひ、是非、君が一席の演説を希ふ。且つ必ずその園遊會に臨まれたしと云へば、彼れは、悦びて諾すと答へつ。良人は、また腹れて、御身は余には寄附金のみを促して、饗應の席には洩れよとや。情け無しなど打ち笑ひ興するさまなど、夫妻はげに恰かも朋友なるが如き感あるなり。

又某夫人とて、最も豪富の聞え高き人ありけり。其在京中は、やはり非常に交際頻繁なりしも、前者に比して、齡も遙かに高く、六十二三が程なり、身軀も、少しく虚弱なるよしにて、其對客の際は、大抵妙齡なる二人の女子、これが介添へとし、相ひ助けて、過勞せしめざりき。故に各學校病院等にも、過半は此兩女、夫人の名代として、交るゝ。臨まるとか聞きぬ。然れども、來訪の客は、必ず自からこれを受け、其家政整理上及び、其子どもらが教育の事に就きて、其重なる事は、なほ老夫人が直接に見もし聞きもして、其指揮決断は、更に他の手に任すること無かりき。但し、各所より來たる所の數通の書簡も、また大抵この兩女が、母の仰する儘に、代筆する事にて、其認むる程、斯る時には、斯やうの詞を遣ふがよし、斯くの如き人には、云々の事は、書かぬものぞ、能く叮嚀に教訓せらるゝを見たり。(すべて彼の國の教育は、専ら實地に就きて、なさんと勉むる事多し。なほ後に云ふべし)

又余は一日、某皇女の第宅に詣でし、午前九時過より、午後六時迄事ありけ

り。皇女は良人を失はれたる後は専ら慈善及び女子職業の事に就き熱心に補助救護の道を講ぜらるゝの外は殊に質素なる御生計なりと傳へ聞きつゝるがげに、余が其居室に参りし時は毛織して何やら編みて在しぬ(勿論女子職工學校の事にて同伴の夫人が旨受給はる事ありし序に親しく其事どもに就きての意見をも伺ひ且つ其が日常のありさまも見参らせられたしと、うさく(に希ひ置きたるなれば殊更に常住の居室に導かれしなりき)スコツチの毛織衣極めて儉素淡白なる裝飾のまいにて余が恭しく一禮したるを見自ら立ちて握手し側らの長椅子を指さして余に凭らしめられ皇女も同じ所に腰うちかけてさまん(の物語りどもせられたる後諸工女等が手に成りたる各種の物品を陳列せし一室に誘引し、叮嚀なる説明等を施されて復たもとの室に歸り入りぬるは既に午餐の頃なりき。晝食も極めて質素なる事にて、それ終りて養花室に入り、いろくの花弁など一見する程に女子職業學校の事にて貴夫人四五名參會せられ此談話即ち會議やうの事終りて茶菓を賜はりさて後に暇申して罷出

にけり。其手輕き事誠に驚くに堪へたりしが其れより數月を経て、女皇陛下に謁見の時此皇女も御側に参列せられしを見参らせられたれば更に異人のやうに威儀嚴かに在して同じ御方ども覺えざりき。すべて彼國にては表向きと内輪との區別甚しく公けざまなると私しざまなるとは殆ど別人別格の心地する事ぞ多かりける。

さてこれより其地方なる城將領地に住居せる程貴族夫人が日課の概略を見聞の儘に抄記すべし。貴族はなほ往昔の儘に石垣高く廻らしたる古城の中おるは大きな森林牧場等をやがて我が園として最と廣やかなる家康を建築し其れに住まふも少なからざるなり。(委しくは後に云ふべし)さて是等の人の世に時めけるは交際期月中は、大抵都府に移るひ住み又其靜かにがさやかに世に住みなせるは其所用ある折たま(都へは出づるなむべし。此間なほ盛暑嚴寒には歐米の旅行又は東洋諸國へ漫遊するなどもあり。而して田舎に在る程主婦は小作人の勞動職工の業務を顧み、殊に休業日等には時々園遊會やうの事を催して其工女農婦等を招きて自らこ

れをぬぎらひなどもし、殊に慈善家宗教家の名あるは、日曜學校などを設けて、自ら道を説き業を傳へなどするが如き、篤志の夫人も少なからざるなり。財豊かに品高くて、残りの齡を山青く水清き郊外の山林、田舎の牧野に己れひとり物足らひたる家造りして、心のどかに住みなしたる老夫人が、生活のありさまを見る時こそ世は斯くて盡すものにもがどいと羨ましくさへぞ覺えたりしか。

余が在英中女皇陛下が親戚にあたる某夫人が、田舎の館に十日間計り滞在したる事ありけり。館は倫動より汽車の道大凡一時間半許りの里程を隔てたる所に於て、停車場は其所より五六町の距離にありき。車を下りて、一二町の間は小さき市街なり。市を離るれば左手には深き森、右手は渺茫たる牧場にて、折から夏の真中に近き頃なりけるが、此國のならはしとして、拾せの衣、肌心地よき程にぞありける。夫人の子息は余等が迎ひとして、早く爰に在り。用意の馬車に、余と外になほ二人の女子とは、打ち乗せられて、此廣らかなる野路を馳らせ行くに、途中に合ひあふ農夫等

の昔帽を脱ぎて、町陣に辭儀するを見たり。彼れは何種の人ぞと側らなる女友に問へば、此町はづれより此方は總べて當館の領地なれば、この今見たるは、みなそが中に住まへる小作人どもなるべしと云へり。日はやう／＼西に傾きて、晚鴉啼を争ふ頃、馬車は最と大きやかなる門に入りて、又行くこと一二町許り、車寄せより横に折れて庭園の入口に止まれり。其時子息なる人は、先づ車を下りて、余等を助け下ろし、今日は母が職工女等を、此領地内に廣大なる毛布織場あり招きて、園遊會を催したるが、今大抵退散したり。立食場等甚だ狼籍として、尾籠ながら、これも亦た客人が爲の笑ひ種、田舎風の無雑作なるを見給はんも、或ひは一興なるべきか。苦しからずば、案内し申さんどあるに、余は深く悦び、諾し引かれて、其園内に入れれば、鬱蒼として緑滴たらんとする、各種の巨樹大木のもとに、此所彼所椅子、小卓等を並べて、其立食に供したりと、覺しき酒肉の殘物なほうづだかきを見たりき。老夫人は、青き墓を纏はせたる中門の邊りに出で、立ち迎へられ、その良人及び他の子女等にも、紹介せられたる後垣根の邊

りに並み立ちたりし五六人の老工女どもを招きて、こは東洋の果て日本
といふ所より、ふりはへて渡り在したる珍客ぞかし。滞在あらん程に汝
等が工場にも案内し参らすべしと云ひて、更に余に對し、彼等は我々が所
有の工場に年久しく働はれて、能く忠實に能く勤勉に勞き居る工婦長等
にて候ふなり。御目を賜はり候ひなんやとあるに、余は深く満足せる旨
を答へて、其職業のさまを問ひ聞きなす程、茶の用意宜しき由給事の
報むたれば、夫人はそこを立ちて、ある一小事の藤椅子に我等を着かし
め、茶菓の擺應終りたる頃、老主人は花園に導き参らせんとて、余及び他の
婦人達を誘引せらる。主婦は足部に微疾ありと云ひて、辭して家に歸り
入られぬ。主人は余をして、其腕によらしめ、子息達はまた諸共なる人を
引かる。主人は齡六十四五歳前りが程と見えて、白髪長く肩にかゝれり。
なほ甚だ強健なる容子なれども、さりとて、老いたる人に餘りに廣き芝生
を、あちこちと助け引かるゝが心苦しさに、屢々辭して館の内に入りたる
時は、早う燈火の光最とまはゆき頃なりけり。さて、我が臥戸に定めら

れたるは、二階にして南に向へる最も美麗なる寢室なり、間ひの戸を開け
ば、さしやかなる書齋なり。臥床の邊りには、裝飾の具書齋には、書簡を認
むべき料より、面白き文學品よき小説等の書物、書畫帖やうの物まで、一切
具足して、其注意至れり、盡せりとも云ふべし。侍婢が持て來たる温湯に
顔洗ひ、口漱き、夜食の衣服に着更へて、許り打ちくつろぐ程、食堂の鈴も
聞えたらば、やをら階段を下だり行くに、小値はこの階下待ち居り、余等
を引きて、客室に誘ひぬ。さて更に老主人に助けられて、食堂には導かれ
き。(食事の事は後に云べし)。食事終れば、再び客室に歸り、令嬢が得意の
オルガン(嬢は最も音楽に巧みなり)同伴者の一人なる某婦人が唱歌など、
喝采の内に聲を納めて、それより、主客打ち交りて、交るゝ、奏樂歌謡に興
関はなりけり。一人此内に在りて、己れのみ、爪くはへ居たりしも、かし
かりき。午後十一時頃、寝に就きて、其翌朝の朝飯終りしは、午前九時半頃
なりけん。此所には、其時佛國の女史一人、伊國の一人、伊佛語の教師とし
て止宿し居りて、語學を授け、なほ音楽師は一週に二回づゝ、倫動より通ひ

來て、年少の子女に、音楽を教授せり。是等老夫人及び嬢等は、毎日何事を爲すかど見るに、この滞在中家族一同にて、午前より出かけしは、日曜日寺参りより、日曜學校へ廻りたるも、領地内のある森に、風景佳絶の所に、辨當して遊びたるも、工場を巡覽せし日どの三日間のみにして、自餘は親戚朋友などの宅に行き、又はそれ等を招き、其養花園果實の室、牧場菜園等を見歩きたるは、大抵みな午後二時過よりなりき。されば、朝飯後主婦は大抵、此年少の女子をして、數十通の書狀に返事又は、これより遣るのをも認めさせ、是等上流の女子は大抵、少なくとも、一二外國語を學ばざる者無ければ、嬢等は佛語又は、獨語などを以て、外國よりの返書をも認め居たり。又家務の重なる事どもを聞き、或は自らも書簡を物し、時としては、未男未女が語學、替古室に臨みなどし、午後一時よりの食事終り、二時過よりは、園中を散歩し、他の茶話に會しなどせられたりしが、夫人は、先きに云へるが如き恙ありとて、近傍へは、わが人力車やうの物に乗り、僕をして、徐々と引き行かしむるに、常に大方、其子女の中一人は、必ず徒歩、これに隨行し、且つ、扶け

且つ、談らひつゝ、伴なへるさまの、最と殊勝にも覺えたりしが、それにも勝りて、怪しき迄思はれつるは、良人さへに、其れに従ひて、左も大切らしくいたはり慰めて、さし歩みたるを見し事なりけり。世の幸ひ人とは、是等の婦人をや云ふべき。又此夫人は、殊に熱心なる宗教家にして、日曜の夜は、卅餘人の婢僕を集へて、自ら聖書を説き聞かされたりき。而して、これが其良人に、子女に對する事どもより、起ち居ふるまひ物の云ひさま、品形ちまで、さすがに、最と温雅靜肅にして、其あらゆる人々より、尊敬を受くるも、敢て倨傲の氣色無く、老いてなほ物恥かしげに、打ち沈まりたるさま、かたち、羨みてもなほ、餘香床しき、薔薇花の昔の盛り、忍ばるゝいと、懐かしき人柄にぞありける。

又佛國の某侯爵夫人の招ぎにて、其館に宿泊せし事ありしが、こは、これも、どの城砦にして、物ふりたる、築地の苔、青やかにむしたるに、舊時ながらに、連綿と、今にかゝれる、葛蔓のうら、枯れたるも、見えぬこそ、主が富の餘澤なるらめ。侯爵は、往ぬる年死りて、此廣らかなる城の内に住めるは、主婦と

一女、一男のみ。長男は當時巴里の大學に寄宿せりとの事なりき。寡婦
住みの静かに淋しげなる住居も、財豊かなれば従ひて召し使ふ奴婢も多
く、外庭に續ける養禽所、牧畜の野原も、最も愛たし。佛蘭西人の習ひとて、
主婦が交際を熱練したる、又其世辭の極めて巧みなる實に三日間の滞在
中朝より夜迄母子殆ど附きしりにて、或は近傍の古跡、朋友の家に伴ひ、
或は人を招き、音樂師を迎へて種々の馳走に心をつくされたる中々に心
苦しき心地せられて、今日二日と抑留せられたるも、強ひて辭し別れて
歸りたりき。斯かれば其主婦が日常のしわざも却りて審らかに觀察す
ることを得ざりしは頗る遺憾なりきかし。然し大方はなほ英國と大同
小異なるべし。此館の内にては乾酪なども製造せらるることにて、英に
比して殊に優等なるを感ぜしは、食物調理の良好なるも室内裝飾の優雅
なるとの二點なりき。(なほ後段に云ふべし)而して彼れは實利主義を
尊びて、ありのまゝの風多く、是れは氣韻を重んじて、やゝ表面を装ふのま
まを免がれざるに似たり。(委しくは、女子風俗の所に云はん。)

余が歸途カナダの太守が住居、クイメックの城砦に留まること十餘日間
許り、それより更に府廳のある所オタワに滞在すること三四日間にして、
北米合衆國には廻りたるなりき。其折クイメックの城内には、其令嬢十
四五歳許と未男十歳許りとのみにて、且つ夫人が代理には、其従姉妹なる
某夫人あり。内政の事は皆此人の整理しつゝあるを見たり。當家は實
に往時の藩侯が居城も、斯くやと思はるゝ許り、三重の石垣、嚴めしく守衛
の番兵門の左右に立ち、余等が太守の料即ち其家の徽章ある馬車に乗
りて、出で入りする毎に、彼等が銃を捧げて、敬禮を行ふさまを見たる時は、
彼のはし露の天翔りて、且つ、諸鳥を威服するを、そが羽ふしに住む虫の、已
れ勢ひありと思ひあがりたりし、偶言にも似て、我れながら、わが身の、顧み
られつゝ、いと片腹痛き迄ぞ覺えし。彼女は朝飯終ると、順て食物等の事
は他に云ふべし、家務を聞くにやあらん、其家扶、家従、やうの人と、暫時一室
にて談話し、さて後は、時々、其家庭教師が二人の子女を教授する、學問所等
を見廻り、爾後は、大方、余等を誘ひて、此所彼所を見物せしめられ、或る時

七六
は余は太守が夫人の代理として、某所へ行かねばならず、若し在さんとならば同行すべしと云はれき。そは慈善病院と、移住民の集會所と、貧民職工場となりけり。余は悦びて同伴し、親しく其慰問の状を見、且つ其組織結果等の説明をも聞きたり。茶時と夜食とは、大抵、何人かを呼ぶか又他へ呼ばるゝかなりしも、夫人は主婦不在の事にて、誠に響應もあらずかに、且つ來賓も少なく、淋しき事なり。是非とも君等が滞在中に一度歸宅して、オタワへ案内し参らせんと企てられしが、あやにく、太守は領地内某所に一事件起りて、出張中、議會も開會の真中なり、しかも女子教育の問題討議の折からなれば、夫人は一日も傍聴を欠くこと能はず。(議事等に直接女子が嘴を入るゝ事は無けれど、同性の事につきては義務上よりしても、情義上よりしても、其心を傾くること、大旨斯くの如し。)然し、此問題今一週間に後には終るべし。其れ迄、此所に滞在あれ。必ず自ら迎へ参らすべしとありしが、余はそれをも待たで、秘書官某の公務によりて行かんとある時に伴はれたりき。主婦が不在中、最と廣大なる城中内事の

取締り、數十人の婢僕が指揮等、一切を身に引き受け、る某夫人が多忙實に心苦しく覺ゆれば、屢々辭して、出發せんとせしかども、此夫人の交際にたけたる、更に余が袂を離たず、折角の珍客、若し、主婦が命令し置かれたる、箇所を見せずして、歸し参らせたらんには、主婦にまた何と云はん。疲れ給は、一日二日打ち休みて、更に巡廻せられよとて、さも、懇篤親切に抑留せられしかば、殆ど、近傍の名ある所は、巡り盡しぬ。さて、オタワに往きては、其頃、恰かも、盛夏に向はんとする程なりしかど、議員等の來たり集まれる時に、市中も、随分に賑はしく、余が到着の日、恰も、太守は、地方より歸り來て、暑さの時節、却りて、迷惑なるべけれど、唯、打ち解けたるどち許りにて、小宴を催さんとして、六七人の夫人達と會食を催されたりき。(尙風俗の所にいふべし。)夫人は、中々、繁忙の容子なりしも、其常住は、大方クイベクなるをもて、此所は、却て、旅宿りの感あれば、居城地と違ひて、所用もすくなし。決して、介意せられなとて、自ら所々へ誘導せられき。夫人は、年齢卅七八が程と見えて、色白く、眼涼しく、口元締りて、長け高く、肥え肉づき、

漸乎として上品なる英國貴族の特色を備へたる風采の人なりき。夫人は又女子教育の事には甚だ熱心なりと聞きつるがげに寓居の机上にもそれらの書類を積み重ねあり。余が問ひに答へて當地女子教育等の事即ち佛國風より漸々英國の方針に移り變り來たれる沿革其進歩のさまより得失等に至る途己れが意見もよき程に附け加へて談り聞かされ又日本近來女子教育の形状どもを尋ねられたりしが中々其要點々々をかさず質問されたりき。兎に角此地は尙佛蘭西人種多く宗教も女子の如きは未だ加教を信する者多數にして種々入り交りたる國風これが主宰なる主人其内助たる主婦が務め心遣ひ實に容易ならざるべしと想像せらるること少なからざりき。(尙衣食住の所に記さん)

始め英國を出發せんとせし時は加奈太より北米合衆國を廻りて同地の教育家及び富豪の婦人達をも尋ね女學校女塾をも巡覽せんとて各種の紹介状をも用意したりしかどもおやにく發足二三月前に至りインフルエンザに罹りて殆ど一ヶ月間を空費したりしかば蘇邦の巡廻遅延して遂に夏

期休業の時とは成りぬ。加ふるに其紐育に到着したるは恰かも盛夏の真中にて重なる人は皆涼しき地に轉居せりと聞き餘儀無く滞在日數を短縮して其地を出立ち歸途に登る事とはしけり。されば此間尙一、二學校を訪問せしも其授業を見ること能はず。唯某々婦人に面會せし許りの事なれども筆の序に記して歐洲大陸の條と彼是對照の一助とす。

余が訪問せしは華盛頓府の某紳士なり。こは豫て英國の女友某より書狀を以て何時頃か當席に來着せらるべしと通知ありたることなれば先方には早く聞き知りて案内せられぬ。折柄其妻女はある田舎に避暑中なるも幸ひ主人は社用にて一寸立歸り居れり。折角の來遊ゆゑ是非面會致したしとて其所よりは餘程離れたる所に住める兄の妻女を迎へて主婦の席に着かじめおさく、午餐を饗せられき。會食せる人は五六人の男女なりしが其衣服の華美なる歐洲にては夜食の時ならでは見し事も無き許りの盛裝したるものあり。又この室内の裝飾のきら／＼しき一見其富みの程度の低からざるを知るに足れり。主人自慢げに是れも

貴國の物なり。彼れも日本の品なり。孰れも美術の意匠にたけたる實に、威服の外無しなど、世辭云はれたりしかども、余を以てこれを見れば、我が商人等のなほ米國仕入として、殊に花やなるを旨とせしなるべしと覺えて、色合ひ形ちたひは、でやかに濃厚なるのみにして、甚だ高雅の氣韻を欠きたりしは、最とかたはら痛くも、將た笑止にも思はれたりき。

女子の言辭應對、舉止動作は、活潑にして、いかにも、奥底無き所に、また一種、掬すべきもの、あるに似たりと雖、概して云へば、げに少しく、早野疎放の嫌ひ、無きおたはざるべし。(尙風俗の所に、審かに記さん) 當家の息女も、今年某大學を卒業せりとの事にて、今、一ヶ月早かりしならば、彼女も、悦びて、そが出身の學校にも、案内し參らすべかりしを、などの談話ありき。

返すくも、時の後れたる、頗る遺憾の事にぞありける。

歐洲各國の上流社會、殊に英國に在りては、大抵、小學年齢の兒童は、學校教育にあらざりて、専ら家庭に於て、教育を施すもの多し。勿論、男子は、其小學を卒業する頃より、本人或は父母が望む所の學術技藝を學ばしむる爲には、學校

にも通學せしめ、塾にも寄宿せしむと雖、女子は、大率、母の膝下に教師を備ひて、授教せしむるを常とす。(中には、皇族の女も、特に學校に通はしめて、或る科を修めしむるもの無きにしもあらねど) さて、此家庭教育と號くるものに二種あり。一つは、家庭の内に師を聘し、各學科も、過半學校にて教ふるものと均しきを授け、智徳、体育ともに教育するものを云ひ、一つは、學校に通はしめて、學藝を學ばしめ、其家庭に於ては、旨と其子女が言行衛生に注意し、勉めて精神教育の發達を計り、又能く其學校にて授けられたるもの、復習等をせしむるに在り。普通はして、以て家庭教育云々とは云ふなり。さて、今爰に云ふ所のものは、上流の階級に於けるを云はんとすなれば、先づ、其前者の家庭教育の形狀を述ぶるものなりと知られよ。

英國に在りては、尙くも、上流社會と目せらるゝ所の人は、其便宜上、經濟上、學校に通學せしむる方然るべしと思ふ者も、何と無く、教師を我が家に請じて、教育を施すにあらざれば、己れ自ら貴族たるの品格を墮すかの如き、感じ、從來の習慣上よりして、これあるものと見えて、家計充分に裕かならずと聞く

所の家に於ては、随分に不十分なりとの噂さある教師を招きて安直なる月謝を拂ひ、なほ家庭に教育を施しつゝありなどの悪評を耳にせしこと無きにしもあらず。以て是國の氣風、自由人權を尊びながら、なほ爵位を崇拜するの餘習は、深く彼等が腦裡に染みつき居て、且つ其貴族が自尊の心少なからざるを證するに足るべし。然れども、其完全なる家庭教育は、其効果實に學校教育に優る所少なからざるを見る。この完全なる上流の家庭教育は遺憾ながらも、尙ほ未だ我が上流の家庭に施すと能はざるべきを信ずるものなり。其理由如何。彼れは家庭教育を施すに頗る便宜の點あり。曰く、其一、社會の制裁力能く其子女が倨傲驕奢の心を抑制するに足ること、其二、家庭教師の完全なる者を得るに、格別困難ならざる事、其三、財政の裕かにして、教育に多額の金を費やすを得ること、貴族も總べて然りと云ひ難きも、歐洲に於て尙くも、其資格を有ち得らるゝ程の人は、子女教育に、其費を惜まざる、實に驚くべきものあり。其四、其母親なる人も、亦た皆普通學科課程を履修したる輩なるを以て、教師が取る所の方針と格別の差異無き事、其

五子女教育の事は、大抵主婦が専任にして、尙ほ其上に父母舅姑等の尊親と同居する等のこと、少なきが故に、其命令二途に出でざること。以上の如き風俗にしあれば、其兒童が家庭の教育上甚だ便宜しきを覺ゆると少なからざるに似たり。請ふ序を逐ひて、左に詳記せん。

社會一般の習慣徳義上、其年長者に威權ありて、能く少者してこれに下らしむるの風は、先きに中等社會の所に掲げたるど均しく、殊に貴族の家庭に聘せらるゝ所の教師は、其身分其資産愈々以て、其家の從僕傭婢と格別の差無き程の人少なからぬも、總じて是國の風習少くも中學課程を卒へて公けの交際場裡に應む程の年齢に及ばざる女子が服装は、極めて塵末の物にして、貴族の子も、大抵毛布麻布綿布を着るを常とし、容易に絹布を着ること無きなり。然るに、其家庭教師は、其品質價額は、主婦には及ぶべきにあらざるも、打ち見は先づ其資格を保つべき相應の服装して、交際らふことなり。且つ其食事、父母及び教師は、晚餐に賓客と椅子を並べて共食すと雖も、勿論極めて公式なる夜食には、家庭教師は列せず。されど大抵の食事は必ず

共にすることなり。年少の子女は決して卓を共にすること無く唯養な
どの打ち解けたる時のみをり、父母教師ともに食する事あるなり。
又教師が其教ふる所の子女を呼ぶには、其實父母と同じく、姓を呼ばずして
名を呼び捨てにし、總べての詞も、餘り丁寧ならず、全く母の児童を取扱ふ形
状と、格別替ること無く、但し皇族に在りてのみは、其家庭教師の、プリンス何
プリンセス某と稱するを見たれど、其授業時間の如きは之れに對する言語、
甚だ嚴格にして、餘りに丁寧ならざりしなり。其來たり訪らふ所の親戚、及
び父母の友人、また其子女に對し、且つこれと物言ふ事、また其生みの子に言
ふ所と大差なし。故に見等は、其父母教師の外にも、年長者は皆我れを教へ、
我れを戒むる者と心得居るもの、如し。是等の點に於て、彼の國に在りて
は決して上下の風習格別の差異あるを見ず、極めてその情の相ひ近きを見
る。さて、其家庭教師なる者は、いかなる種類、いかなる學力の人の、これに任
ずるものなるかと云ふに、其程度、低きは尋常師範學校、其上は高等師範學校
等を卒業せし程の人、尙ほ高等の學科を修むるに至れば、大學科程を卒へた

る人をも聘するなり。而して此種の教員即ち小學課程を教ふる人は専ら、
女子が擔當に屬するもの、如く、偶々専門學科等に於て、年少の児童の爲に
も、男子の老教師を雇ひたるを見し事もあれども、これは稀有の事にして、
普通は皆女子を以て、これに充つるものなり。且つ近世に至り、家庭教師學
校の設けさへ出で來て、其所には、普通教育學の外、尙ほ育兒衛生、各國語學を
習熟せしむるなり。余嘗て、こゝを卒業し、貴族豪家の請求に應じて、雇ひ入
れらるゝ人の年俸は、大抵幾ばくが程ぞと、校長の老婦人に問ひたるに、曰く、
其最下等は、一年金五十磅、最上等は二百磅が程にして、若し其人の幸運なる
時には、將來家塾を開き、嫁娶する時の費用さへ、主婦の大いに助けくるゝ事
もあるを以て、今は一般小學の教員たらんと欲するよりも、寧ろ家庭教師た
らん事を望む者少ならずと聞きしかば、余は笑ひて、戯れに、然れ共、よし勞
働者たるども、家庭教師たらざれて、ふ語のありと聞きしは、如何と云ひしに、
彼女答へて、然り、自由を尊ぶの人、もとより、日夜窮屈なる生涯を送ることを
好まざるべし。但し、此自由の風は、餘りに中庸を越えて、随分身勝手とも云

ふべき點に迄吹き廻したれば、唯尋常普通の雇傭さへに其雇主の聊かにて
も無理なる事あれば、忽ち其権理のある所を主張して、毫も其が不道理に聽
従し、耐忍しつゝある者、鮮なきに至れり。况んや家庭教師をや。其君が云
ふ所のものは、尙ほ二三十年が昔のとなるべし。と云はれたるげに、さる事
もぞあるべき。斯く家庭教師の需用年々その多きを加ふると、もに、其こ
れを欲する者も亦た次第に其數を加へ、中等以上の家に於ては、其れを需む
るに難からざるに及べり。而して、是等は大半中等社會より、下等社會中の
上等なる階級が程の人を多數とすれ共、稀れには、貴族の女兒の不幸にして
孤兒となり、又其父母の家産を失ひしが爲に、己れ家庭に教へられたる所を
以て、又他の家庭に教ふる等の、おはれなる者無きにしもあらざるなり。さ
れば、陰には、常に其主婦が機嫌を伺ひて、其嫌忌に觸れざらんとするなどの、
氣兼ね心遣ひ少なからざるべきも、兎まれ、陽には、我れと身分の懸隔したる
貴族の子女に師とし、敬まはれて、美味に飽き、高樓に起臥し、衣服裝飾亦たや
うやうに、人並に着くを得て、終に生涯の活計をも、是中に考へ營みなすな

りとぞ。さて、貴族の主婦は、先づ子生るれば、之れが爲めに、保母即ち嬰兒看
護婦を雇ひ、多くは牛乳を以て見を養ふ事なれども、稀れには、自らのを以て
哺乳するもあり。然れども、よし、縦令物馴れたる保母の、充分に小兒を看護
り扱ふも、決して他人の手に一任すること無く、自ら其重なる事を指揮し、注
意し、又其兒の爲に、頭巾靴等を編み、下着等を裁縫する事をも爲すなり。(當
英國女皇第二の皇女、アリス内親王は、五六人の皇子女が衣服の過半は、皆自
ら裁縫し、其疾病ある時は、必ず自ら晝夜看護の勞を取られたりしかば、終に
其皇女がチフテリアに感染して、薨じ給へりき。以て彼國上流婦人が、其子
女教育の事に心をを用ふるの状を見るべし。斯くて、子女が幼稚園に入る程
の年齢に達すれば、爲に家庭教師を撰抜して、其子の教育に當らしめ、語學は、
大抵保母をして、又は家庭教師をして、兒童が談笑嬉戯の間に之を習はしむ。
故に例へば、男女の子供五人を有ちたる人は、一人の保母は、佛語を能くする
者一人は、英餘は、獨露、伊と云ふ様に、各國の人を雇ひて、之を習はしむるなり。
而して、其授業方法等の如き、皆其家庭教師に専任するは、勿論なりと雖も、其

大綱の如きは主婦これを主りて決して奇くもすること無し。然れ共主婦
大率教育の大略を知るが故に、縦令其教師の爲向け教授の方法等に不足
を感じる事ありとも、其子女の面前に之れを隨實詰問する等の事無く、唯
かに注意を興へ協議を遂げ、其改良を促す迄にて已む無くして、解雇するの
場合に至る迄も、兒童をして、なるべく之れを知らしめず。其教育を重んず
ること、大率斯くの如し。さて、この上流階級の資格を有ち得らるゝ程の家
に在りては、先づ大抵資産も裕かなるを常とし、殊に子女教育の事に、其費を
惜まざる點に於ては、到底我國貴族中に其比あるを見ず。否、我が父母の
教育に資を投ずるの少なきにはあらずして、たゞ其費やす所の種類目的を
異にするもの、如し。乃ち彼れは専ら有益の事、即ち實利實益主義を重ん
じ、是れは少しく無益の方、即ち風流遊戯の技藝を専らとせる傾向あるには
あらざる無きか。例すれば、彼れは貴族と雖も、育兒及び家庭教育の爲に、必
要なるべき衛生、生理看護法、及び教育學等を修めしめ、文學はもとより、又交
際の神補たるべき、各國語學を習はしむ。但し音樂、舞踏の如きは、やゝ風流

遊戯に屬すべきも、これ將た體育、美術、教育の範圍に當て稱めたるもの
にして、又決して智徳の二育に勝たしむる等の事あるを見ず。(特別の希望
むらゝ其科を修めし) 然れば、其家に於て普通の教育を施さんとするに、書
籍、機械等の一通りは、具備せしめつゝあるなり。然るに、我が資産に富める
家庭に在りては、殊に實益の學藝を修めしむるの風、少くなく、詠歌(に)風(は)文字
あ(れ)の(に)は)音樂(て)匠(十)人、琴(等)の如(きは)さ(へ)に) 陶(舞)風(日)本、插花、點茶、諸禮(未)技(の)に) 遊(れ)等
を履習せしむ。其時と費とは却りて、他の學科よりも多きに居ること、或部
分に於ては無きにしもあらず。(小學年齢以上の女子に在りて最も然るな
るべし。) 蓋し、事や、餘談に亘るの恐、あれ共、彼れが其教育に費す所のもの、
多額なるを説かんとして、遂に已むなくも、彼我の差を擧ぐる事とはなりぬ。
斯くて、是等階級の家には、大抵二三の教育新聞雜誌を購求せざるものなく、
(少しく教育文學等に意を用ふる夫人は、大抵何等か右様の會員たらざるは
少なし。) 從ひて、其沿革改良可否得失等、兎にも角にも、主婦が腦裡に識別し
て、我が家庭に取捨し用ふる事とはすなり。而して、年少の子女教育の事は、

専ら母の責任なるを以て、教師の撰定雇ひ入れの事より各學科の程度方針等も主婦先づこれを定めて、其夫と協議し、其これを履行するに當りては、皆夫人が命令のもとに成り立つものなりとす。總じて上流の夫人は、其地位上の義務よりしても、女子に關する種々なる事項に關係し、慈善教育の點に於ては、殊に關かり聞かざる可らざる事多きが故に、尙くも普通の智識ある程の人に在りては、また甚だしき不道理の指揮注文等を、其保母家庭教師に爲す等の事少なきを知るべし。殊に彼國上流社會の家族即ち親子夫婦が情交の厚き實に欽慕に堪へざるなり。一婦一夫の制を以て成り立ちたる、其夫婦の外には、側室婢妾の寵を争ふもの無く、たとひ其内部は云ふ可からざる事あるにもせよ、異腹の落胤をして、子とし認むること能はざらしむる制度は大いに一家の風波を起さしむるに力あるべし。又其兄弟姉妹の中に、同腹異腹等の區別義理立てある事無く、兎まれ外面は其父母てふ人は相ひ互ひに敬愛の情を盡しつゝあるものなりと信ずる所の兒童が祖父母は、かならず別居して、稀れには同居の人もあれども、居を異にするが

一般の風俗なれば、必ず室を異にして、嫁孫などの事には、干渉せざるなり。唯をりく、來往するほどの事に止まれ、決して老人の手に溺愛さるるの弊も無し。(彼の獨逸老帝の配オースタ皇后が、其皇太子の妃英國女皇が、極君の其子女を教育し給ふさまを見て、彼女は大國の姫、其家庭教育の有様餘りに鄭重に過ぎたり。斯くては到底立派なる兒孫を出だすこと能はざるべしと歎ぜられきとか。又、ヴェクトリヤ女皇が其慈孫教育の方針を嫁君に云々と教へられたりとかの例はあれども、其れ將た我が國の姑母の如く下り立ちて、啄を容れ、手を下だして指揮する等の事は、更にあらざるなり。されば、皇族の家庭に於ても、其皇子女は、明暮生みの母后の膝により、腕にすがりて、泣きもし笑ひもし、褒貶賞罰、其慈母の手に出でざること無きなり。斯く幼兒の教養は、總べて母の責務に屬しつゝある習慣なるが故に、其子女が物を過ちたる時などにも、父に知られんよりも、寧ろ母に知られんとを恐るゝの風は、男兒年や長じて後、其品行の點に於ける等は、猶母の探知して、母に訓戒せらるべきを憚ること甚しと云へり。さて、歐洲諸

養の形状を視察せんとの御希望なりとや。さらば今より嬰兒に入浴せしめんとする所なり。若しからずば誘引せられよ。とあるよしを傳へられたれば余は悦びて浴室に入りて見たるに室内は白大理石を敷きつめ、最も大きやかなる楕圓形の湯船も同じ物を以て作られたり。嬰兒の保姆は余を招きて湯加減を見られよ、といひつゝ、度を量りたる寒暖計を示さるゝを見れば攝氏の卅五度に僅かに達したる程なり。尙ほ手をさし入れて見給へと云はるゝ儘に試むれば甚だ微温にして、日なた水許りの心地せり。げに是國の人は斯る温湯に入る故に浴後風邪に冒さるゝを恐るゝこと甚しきも宜なりなど心の中に思ひ續けぬ。斯くて保姆は海綿にて嬰兒が頭部より全身を徐々と洗ひ、此間十分許り、兼ねて暖め置きたる大手拭に受けて能く拭ひ、見床の上に安臥せしめき。兎角する程に喫茶の時にも成りしかば他に約束の事ありて、此所を辭し去りにき。又某貴族が家庭教育の形状を見んとて、其家に宿泊したりき。爰には佛蘭教師の新式なる授業法を施すものありと兼ねて聞え置きたるが其折

主婦に誘はれて、其敷場に入りて見るに、教師は三人の子女を集めて語學を教へつゝあり。其法、先づ名詞を先きに教へずして、動詞を先きにし、恰も幼稚園の兒童が保姆とゝもに遊戯するが如く、一人が戸を開けよ。と命令すれば、今一人がよし。戸を開くべし。と答へ、今我れ戸を開くと云ひて、戸を開くれば、又一人が側らより、彼れは戸を開けよ。など云ひて、其活きど時とを教ふるなど、此方法は、既に他の學校にても見しことなれども、此教師が授業方法の最も巧妙なるが故にや、誠に有益に殊に面白く感じたりき。さて午餐には、母夫人家庭教師及び子女等五六人と會食せしが、夫人は今日習ひたる所に就きて、食事中二三の佛語を以て、子女に談話を試みたりしに、一人は能くし、一人は能くせざりければ、教師は痛く氣を揉みたる容子にて、母なる人に對ひ、御覽せよ。彼兒は兎角物に心を入るる事の薄き故に、同じ様に教へたる事のしかも、年齢一つ劣りたる人にも劣る許り、斯くの如く、不出來なるなり。斯かる有様にては、明日の某所行きも同伴いかいと云ひたるに、夫人然り。兎角、彼れは活氣少なし。勉學

に情る者は遊山をも爲すこと能はず。と云ひたれば、見は泣きぬべき顔つきして能く復習せん。何卒明日は伴ひて給はれよ。と請ひたるに、母は重ねてオ、我が愛見よ、能く勉めよや。明午前の替古の模様により、先生の宣はんに従ひて、母も許し参らすべし。と慰めたりければ、見は更に教師の面を仰ぎて、其許可を希ふの意を示すに似たり。教師も亦た始めて莞爾として、僅かに首肯たりき。其教育をなるべく實地に近づけんと勉むること、大率之れに類せり。

又某伯が領地の城砦に止宿せし間、見聞せし所の子女が家庭教育のさまを零記せんに、晴天の日は、毎朝朝飯前兄弟姉妹打ち連れて、園中の馬場に馬に乗るの替古を爲し、或ひは野外に乗り廻しを試む。それより歸りて、神に祈禱をあげ、朝餐終れば、銘々日課に就きて修學し、午後二時過ぎよりは、大抵音楽やうの事を學ぶか、然らざれば、後庭の池に短艇を置ぎ、又は養花園に花を摘み、我が愛馬に秣ひ、或は舞踏を學びなどして、専ら躰育に裨益あらしめ、兼ねて智徳の觀念を養成せしむ。凡そ學齡兒童は、交際の爲

に時日を費すこと、少なしと雖も、貴族に在りては、殊に貧民育兒院等には、勉めてこれを誘ひ、其慈善仁慈の性情を啓發せしめんと、勉むること切なり。

又余が止宿せし英京の寓居に、最も接近せる某女學校の校長は、チックスホールと大學の卒業生にして、年齢卅六七の女史なりき。此學校に於ては、殊に衛生生理の授業法可なりとの噂さなりしかば、余も屢々行きて參觀したりしが、當女皇が皇孫女に當れる某皇女は、年齢十三四許り、右の二學科を修むる爲に、一週に三回づゝ、其家庭教師を從へて通學せられき。教壇及び授業の上に於ては、其取り扱ひ、更に他の生徒と異なること無く、唯其食堂に於てのみ、一小食卓を別にし、女師と二人のみ、さし向ひて食事せらるゝを見たりき。此の女教師は、其言動起ち居振舞も、殊に閑雅やかに見受けられたりしかば、いかなる人にかと聞きしに、是人は某貴族の夫人なりしが、不幸にして夫にも實父母にも早く別れて、忘れ形見の一子さへ、夫死せば己が好めるまに、一生を教育の事に委ねて、一學校をも

設立せんとせられしを彼の皇孫女の母君に強ひて懸望せられ、今は此の皇子女を我が子の如く慈み教へつゝ居らるゝなりとの事なりき。此他上流社會の家庭教育の形状もさまざま、此所彼所に巡視せしかども大抵大同小異なれば省きて爰に載せず。

孰れの國に在りても、凡そ貴夫人と稱せらるゝ程の人の衣裳、即ち其夜食夜會等盛宴に趣く時の如き最上等のものを云は、幾數万金の價額にも登るべし。例へば露國新皇后が婚儀の衣服は總べて白銀線を以て織り成し、米國某富豪の新婦人が夜會の衣裳に金剛石を縫ひ入れたるが如きは先づ希有の豪華非常の盛装なりとするも、余が英女皇に始めて拜謁の日に參集したりし貴夫人方の衣裳又は各貴紳の盛會に見集めたる等其普通のものを以て云ふも中々目もあやなりとは是等をこそ稱へつべきならめと覺えて、里昂の織物互ひに負けじ劣らじと、新意匠を競ひて造花羽毛刺制の小鳥絹紐等は更なり種々の珠玉を以てさへ飾られたる、長裾輕く曳きて落花流水に漂ふの様を粧ひ、短袖殊更に白雪の肌を顯はして環ねたる寶石は、晴る

る夜の星の如く幾磅を費やしたりけん花束はまた此美麗なる装ひを助くべし。されば斯うやうの場所に至りて右の如き美服盛装を見る時は又決して我等が富の程度、其歩の遠く相ひ及ぶこと難かるべきを歎ずると同時に、希くは我が禮服は縱令不充分なりとも固有の物を存せまほし、と希ふ念慮の益々高まるを覺えたりき。然れ共、これは極めて盛んなる宴會の折のみに限り、其平素は實に意外なる迄質素儉約なる衣服裝飾、また驚くに堪へたるものあり。先づ朝より午後、喫茶の時間頃までの間は皇族紳士の夫人達も大抵重に毛織衣を着し、勿論年齢高き人は絹布を着るもの少なからずと雖も、年若き夫人は高貴の方も先づ鹿衣を用ふるの傾きありて、英國の如きは最も旨と毛織衣を用ゐらるゝ。小中學修業中の女兒に在りては夏は麻布綿布冬は毛布等を多く着用することなり。而して平常自宅に於ても夫人は夜食には必ず大抵夜食服(胸を開き裾を長くしたるもの)即ち絹布を着るを例とす。概して言へば、日常は甚だ節儉にして、事ある時は甚だ驕侈なるに似たり。余は英國内親王方の臨席さるゝ各種の會にも度々詣で

たりしが、方々は、大抵毛布に絹帛を少々交へて、裁縫ひたるものを着されたるが多かりき。

或慈善會に至りて、女皇の皇末女が、店に物購ひ、金圓を支拂ひたる時、皇女自ら之れを手を受けて、一二階の挨拶をもせられしが、其折の如きは薄茶色の地質疎き、スコッチ毛布織を着て、眞珠を黄金もて抱かせたる襟飾及び同じやうなる腕環一つを右手に簪められたるのみ。到底其人と聞かざりせば、内親王ならんとは、知るよしも無かるべく、唯何となく、氣韻高き貴夫人よと思ひたる許りなりしならん。迄ぞ覺えたりし。

總じて高貴の人も、化粧終りて、晝服に更むれば、其儘の衣裳にて、他をも訪問し、集會にも臨み、又遊歩にも出づる事にて、其風甚だ儉素簡便なるが故に、無用に時を費やすこと無し。是等の人は、裁縫は無論、仕立屋に命ずるが普通なれども、猶自分或ひは子女等の爲に、下着を縫ひ、鞆肉襦袢等を編みなすも、亦た珍らしからぬ事なり。

食物は、其都府に住する輩も、富貴の人は、其珍品佳肴を家に貯へ、穴藏に藏め

置きて、臨時珍客の爲に供ふることなり。就中酒類の如きは必ず穴藏の中に貯藏して、是れは何十年以前のもの、彼れは祖父の代より貯へ置きたりなど、とて、賓客に誇る者多し。又其領地田舎の別荘等に住居するは、乾酪、チーズ、干菓子やうの物等大抵の食物は、自宅にて製造することなり。而して、歐洲諸國に到る處、物足らひたる家にては、佛蘭西風の料理をなし、佛國より料理人を雇ひ入るゝ等の事も少なからず。余は本邦に在る程、泰西にては、富貴の人も、最良の食品、滋養分多き物をこそ食らへ、決して我等がごとく、食らふにも堪へ難き迄、一時に無数の食物を夥しく置き並ぶる事は、おらずなど聞きしが、又いと左もあらぬことこそ多けれ。されど、げに我が國の如き、菓子に似たる飾り物に類せるを所狭きまで列ぬるやうの事は、無けれど、朝飯の如き、勿論、これは、英米の風のみ、到底、數種の肉類をまゐることは、爲し得可からざる時に於ても、廣く長き卓上一杯に併列したる、一見中々に物欲しからずなる心地とする。但し朝飯に限り、食卓の外、別に卓を設けて、其食せんとする人の、撰みに一任する等の如きは、頗る便利の方法にて、膳の前後左右に、

許多置き並べたらんよりは甚だよしと覺ゆ。然し概言すれば彼の國にては盛宴に珍客を請待する時は食品の撰定價額よりも銘酒の撰定價額遙かにむづかしく至りて高直なることなり。さて斯かる食事の折の獻立配置飾り附け等は如何程富貴の家にして料理人給仕等許多召使ふ所にて先づ大抵は主婦自から下り立ち之れを取りしたゝむる事多きなり。而して年齢やう／＼に長け餘りに繁劇なる家務に堪へ難き程の頃に至る程には其息女等代りてこれに當るを常とすれ共子息の妻帯したる後は親子の相住みする事稀れなるが故に新夫人の姑母を助け姑母の指揮によりて是等の事にたづさはる事少なし。

住居は彼國にては何方に於ても富貴の人と雖も先づ大抵田舎に本宅を構へ其都府なるは借家なるが多し。(中には都府の中央にも我本宅を構へ居る人無きにしもあらねど)さて其家屋は佛京巴里の如きは十年毎毎に一回必ず外部を塗り換へざる可らざるの制度あるが上に冬季も石炭を焚くことを禁じたれば煤け黒み汚れ損なはれたる所なく畫一の樞端一様の粉

色一見實に月宮殿を臨むが如く最も麗はしく殊に愛たけれども英京倫敦の如きは市街の中央猶往時の儘に狹き通路不器用なる家屋加ふるに日夜焚き立つる石炭の烟にくすぼりて甚だ穢なげに見立て無きも勿論近來新造の道路家屋は大いに其面目を改めて最と愛たけれども其内部に入りて見れば其外観の醜きに違ひて錦繡の織物を以て張りたる壁大理石して彫みなしたる柱階段等は云ふもさらなり春の若草に似て軟らかなる天鵝毛氈秋の紅葉にまがひて眩き窓掛の紅絹或は一箇數万金に價ひすべき油繪の額妙手の術にたくみ出でたる石造泥工の立像造化の神の力を奪ひて室内に咲かせたる珍奇の花弁どもは常にこの豪富の輩が室内の裝飾物と成りもて行きて今は殆どいかなる花の何れの時侯に咲くが天性なるかを忘るゝ迄に成りにたり。さてこの家屋内部の飾りつけは愈々大率主婦が意匠になりて其指揮に取られたゝむるものにして中には主人が斯かる事を好みて自ら下り立ちて爲す者もあれども且つ其什器調度許多持ちたる人は時々室の裝飾物品を取り換ふることもあれ共概して云へば我が國

の如く夥だしき品を土蔵の中に仕舞ひ置きて賓客慶事等のある毎に一切
を取換へ改め飾るなどの事は少なく多くは先づ有りて有る程の物を常に
陳列し置くが習ひなる故に所によりては恰も我が骨董店に行きたるが如
き感なきにしもあらず。そが中に我等が打ち見るには目新らしく是れ將
た東洋の志想を應用せしならんかと覺えしは夏の頃其貴顯の別荘を訪ら
ひたりしに、廣く大やかなる暖爐の前面總べてを我が箱庭の如く作りなし
て青やかに小さき木どもの中に白き紅るさまの花物能き程に交へ植
ゑ打ち水の露の玉最と涼しげに葉未葩に溜りたりしこそ折からをかしく
も懐かしくも覺えたりしか。此他獨塊白磁の如き都府は或部分即ち目貫
の所少しの間こそは家屋道路のさまも極めて廣大に随分に立派にもあれ
其場末の甚く劣りたる到底巴里の如く隅から隅迄行届きたる都は又世界
に二つ無かるべし。殊に伊太利羅馬の都府は實に意外なる迄むさくろし
く狭き道小さき窓何となく孤城落日衰耗に近づきつゝある國都の心地し
てあはれわが日本の帝都は疑ひもなくこれには優りてとさへに覺えたり

しが歸りて後に、こゝなるを見れば、なほ左許り愛たくはあらざりけりと思
ひ成りぬるに添へて始めて渡り來たる人どものふと打ち見ては其内部の
如何を知らず唯たとしへ無くも見所無き未開の國よと思ひやすらんと
思ふぞ最と口惜しき。然しながら彼の羅馬府も其内部に入りて見れば中
々立派なる構造裝飾を施したる家少なからず。殊に有名なる古寺院の如
きは實に世界に無比なるべし。要するに羅馬は外観最も醜うして内部甚
だ麗はしき所なりかし。概して云へば歐洲の家屋は其土地の價額極めて
不廉なるが故に、いか程豪富の人なりとも都會の地に占めたる邸宅の周圍
に廣大なる庭園を構ふる等のこと無く、從ひて莊嚴宏麗なる大層も廻りに
泉水築山木立植込等の無きは、何となく其韻致を欠くものなるが故に、其外
園ひよりも寧ろ室内の麗はしく愛たきが多きなり。されば皇帝の殿宇、女
皇の宮闕など聞きて、外より打ち仰ぐ時は、更に其美を驚歎するが如きも
の少なし。されど其室に入るときは華麗莊絶えも云はず、愛たしども愛た
かりけり。尙ほ云はまくほしき事多かれども、餘りに本題の餘談に亘るべ

泰西婦女風俗 家庭の有様

きを以て爰に筆を止めつ。
 高貴富豪の人の家内に疾病ある時は大抵皆な、良看護婦を雇ひて患者の取り扱ひ一切を任することなり。且つ傳染病の如きに至りては、嚴重に其親戚知友が相ひ近づくことをも止めて、其病毒の蔓延を防ぐに汲々たる決して荷くもせざるなり。蓋し看病はもと、資性温和綿密なる女子に最も適當の業務たることは云ふも更にて、彼のナイチンゲール嬢が勇敢なる愛國の熱情を幾多戰場の負傷者に漲ぎ死を起し生に回し、功徳少なからざりしより此方看護法は彌貴婦人達も研究せざる可らざる義務として常に能く其方法を習ひ一旦緩急ある時は又其難に殉すべしとの輿論は遂に是等巾幗の女性を奨励して其が嫻々たる織手に大患者を看護り負傷者を扱ふの術を知らざる可らざるものゝ如く成りたるが故にこの衛生生理看護は貴女が必須の學科として修めらるゝこととなりたり。されば、アリス内親王の如きも父君アルベルト親王を其臨終迄下り立ちて看護せられ其皇子女が傳染病に自ら其身を斃す迄に一意専心能くこれを看護せられたりしな

り。
 余嘗て英京滞在中豫ねて相識る某貴族夫人の某會に臨まれたるに出であひたりしが夫人は常に愛想よき人にて何くれの物語り最と莞爾にせられしなるが其日は例の笑顔も何と無く打濕りて淋しげに見え顔の色も悪かりしかば所勞にや在すと問ひたれば否己れは恙もあらねど患女が痛く惱みたるにより自らも此一週間許り安眠すること無かりき。勿論看護婦は心知りの者二人迄つけ置きたれども見も我れを慕ひ我れも兒を案ずるが故に夜間は大抵自ら看護の勞を取りたる爲少しく身軀の衰弱を覺えぬ。されど本會は己れ評議員の一人として是非とも出席せざる可らざる義務あり。且つ辛ひ兒も昨夜より大いに快方に趣けり。此分ならば最早決して氣遣ふに及ぶまじと主治醫の云ひつる儘に斯くは物したるなり。と談られぬ。大凡是國の人は男と無く女と無く其實任のある所に務むること大率斯の如し。但しこれ將た其健康の宜しきに基あすること多きに居るなるべしとぞ覺ゆる。

泰西婦女風俗 家庭の有様

總べて泰西諸國に在りては、一家族の親睦交情は貴族も小民も格別異なること無く愛情の春暖かにして互ひに打ち隠しの心少なきは實に羨むに堪ふべしと雖も我等が東洋の風俗を見馴れたる眼よりして之を見ればや、敬意禮容には乏しく其子女が尊親に對するの形狀飄々たる和氣實に堪すべきもの多きも其禮を以て之を節すと云ふに當りては、いかにぞや、打ち傾かるゝ所無きにしてもあらずと覺ゆるや、例のふるめしき心癖なるべし。されど、兎まれ前條にも云へるがごとく、義理立ての他人を交へざる夫婦親子同胞等の相集まりて談笑嬉遊する家庭の内老人も其兒孫等と共に遊ぶ時は恰かも一箇の兒童と化し去りて唱歌舞踏テニス球投げ等の遊戯を試むるは云ふも更に時としては後國に馬を駆け橋を渡すなども共にすなり。彼國の人の老いて益々壯んに且つ其精神の埋れたるやうなる或は老耄れたるが如き者の多からざるも一つは其平素心身の持ち方活潑なるによりて然ること少なからざるに似たり。其他は大抵中等社會の所に云へること、大同小異にして唯其富の度の高きが故に其娛樂の有様も亦た幾

分か異なる所あるべしと雖も要するに泰西の人はなるべく多數の人と集まりて花やかに公けに嬉遊樂することを楽しみ少數の者と混やかに私かに遊び娛しむことを欲せざるなり。されば富豪の人は屢々夜會園遊會等を催し各種の人の餘多集まりて共に俱に歡を盡すを以て、こよ無き樂みとはすなりけり。

上中等社會家庭のありさまは既に其概容を掲げつ。是れより更に下等社會の事に及ぼさんとす。然れ共先きにも既に云ひつるが如く余が専ら心を注いで視察せしは、うち／＼に受給はり置きつる事もありしにより貴族が家庭教育にして次は中等階級の所なりき。其下流に於ける所のものは唯備かに其が一部分に止まりつれば、自らもいと飽かず覺ゆる節の多かるを讀者幸ひに宥恕あらんことを希望す。

初この下等社會にも數等の階級あるべし。諸職工の雇主が家に起居せる者他の爲に使役せらるゝ婢僕の類或は不充分ながらも一家を構へ妻子を養へる者又は總べて慈善の手に救護せられて養育院等に入りつゝある者

泰西婦女風俗 家庭の有様

其れさへに協はずして道行く人の袖にすがり摺附木を賣り草花を鬻ぎ乞食して僅かに一日の露命を繋ぎ夜は公園森林などの樹下にはかなき夢を結ぶ徒も亦た甚だ少なからざるべし。然れども爰には家庭の形況を説かんとすなれば先づ其の家を營みつゝある者の上をのみ旨と云はんとすなり。

衣食住の程度極めて高き泰西諸國に在りては一家の經營中々容易ならず。英京倫敦などに在りては身には穢き衣服を纏ひて終日停車場の近傍に人の荷物の上げ下ろし持ち搬びどもをして僅かに一錢二錢の銅錢を得つゝ、夜と無く日と無く勞き居る輩も一日一志の賃銀を得ざれば細き烟だに立つること能はずとぞ聞く。抑も此階級の人の其都會の地に在る者が妻女など其家に在りては何事を爲しつゝあるかと云ふに下等社會といふ中にもやゝ上等なるは府下場末の所に大抵廉價なる下宿屋を營む者少なからず。下宿屋の多くして且つ上中下等の種類も亦た極めて夥しきは倫敦を以て其最とすとの噂さなりき。さて主婦はその客人が三度の食物を自ら

市に需め之れを調理して薦むるは勿論年少の子女を相手に室内の掃除衣服の取扱ひ及び其出入の世話をなし又殊に勉強なる婦人は其れが洗濯等までも容易に洗はるべき品は手づから爲して別に其代價をも得ることなりとぞ。下等下宿屋の主人は諸工場に出づるもあり又は小者諸會社の雇人等種々なるべきも概して朝は夙く夕は遅く歸るを常とすなれば其客人に對する所用の書附け算用等も大方皆婦人の手に取りしたゝむる事なり。蓋し近來に至りては此班の女子も普通の算筆等を一通り學ばざる人少なく成りにたれば斯許りの事には夫の力を借らずして爲す事を得るなりと云へり。下等社會女子教育の事は尙ほ女塾の所に云ふべし。然るに是等婦人の勘定高くして利慾に抜目無きは實に驚くべきものありとぞ聞き傳ふなる。

余が倫敦に在りける程或る日本の少年に其職工學校にて廻り遇ひたる事ありけり。是人いと懐かしげに余を目送したりしが其折は遂に詞も交へず。教授時間終りて後彼れは其擔當教師に就きて面會を請ひてけ

れば引きて、そが應接所に至らしめぬ。兎見れば、少年は双眼に涙を含み、暫時ためらひたりしが、さて云ふやう、己れは幼き時に両親を失ひて、横濱なる親戚の家に養はれ、候ひつるが、一日腹黒き人の爲に誘惑されて、何處とも無く迷ひ出で、雲を當てなる、海路の旅にさへ出で立ちて候ふ。さて後米國に漂流ひ、英國に航渡りなどして、ちどの路用も名残無く盡し果て候ふ程に、病ひにさへ罹りて候ふを、彼の悪漢は情無くも、己れを打ち捨て、ふと其影を隠しぬ。泣くにも泣かれず、笑ふにも笑はれず、唯、よく此命絶えぬかしとのみ歎き暮らし候ひつるに、定業はなほ盡きずして、やうやうに怠りて侍り。斯くて後は、何詮すべも無きまゝに、米國にて、見知りたる人の許を便り、その小者と成りて、晝夜をわかず、勞き勤め候ひしからに、いさゝかの貯金も出で來て候へば、此由、雇主に物語りて、いかで、さるべからん業一つを學ぶよしも、かなと憂へ聞えたるに、主心ある人にて、痛く憐れがりつゝ、此後の教授某に計りて、己れが好めるまゝに、彫刻科修むることゝはなしつ。斯くて、舊の雇主よりも、少しづつ、の金を、月々惠み給

へれど、其れにては、半ばをだに、さゝふべきにあらず。さりどて、僅かの貯へを使用し盡さば、若し再び病み煩ひもせん時に、すへ無かるべければ、なほ晝は或所に通ひて、少しの給金を得、夜業の科に編入を請ひて、斯く毎宵午後七時より、十一時迄、勉め勵み居り候ふなり。斯く打ちつけに聞えまつらんも、最と無禮なりと思すべけれど、斯かる身にては、故郷人の在し、まさんを探ね出で、訪らひまつらんも、恥かしければ、幾年月見し事も無き日本人の、賊に懐かしく思ひ參らせ候ふ餘りに、斯うはさし出で、候ひつる罪、いかで許させ給へど云ふ。最と痛はしくも、將た殊勝なる青年よと覺えて、其人には、尙此上も油斷無く、勞きて、身を立て志しを行ひ給へなど云ひ勵まして、さて其が受持教師と云ふ人をも尋ねて、其男の上、懇ろに頼み聞えつ。名も顔も見知らぬ人なれど、旅に在りては、故郷人と思ふには、ただにもあらで、憐れに覺ゆる。げに人の情許り、怪しきものは、あらざりけり。さて余を伴ひて、參觀せしめたる婦人の家にて、彼れをいとほしき者に、云ひ思ひて、其れが下宿のありさまの如何にも、費用多く、不便なる

やうに聞き渡りたれば近きに其が教師の妻女を頼みて同宿を請はせん
 などありて其下宿屋の主婦が事ども片端崩し出でられたるに左様の社
 會の事聞かんも亦たこよ無き参考と成りぬべしと思ひてなほくど問
 ひたれば其婦人いへらく總じて下等なる下宿屋の主婦など云ふ者は極
 めて貪慾なる者の少なからぬが常なれども是れは亦た餘りなる事に
 せおれ。唯其法律に觸るべき盗み詐偽りをせぬまでにて半片の薪包數
 本の指附未はものかほどもしさしの蠟燭は其の三分一以下に至れば扱
 き取むを常とし半ばにして消えたる暖爐の石炭はいつも餘波無く掻き
 さらはれぬ。總べて其始めに約束せざりし事としいへば子供が隣家に
 使ひしたる貸銀靴の泥落としたる報酬迄も毎朝靴墨をつけて磨かす
 代を取るは普通の事にて勿論なり。はたるとぞ聞く。斯かれは其受持
 教師も我が夫も最と痛う憫然がりて彼男の爲に計をちつゝあるなり。
 と語られぬ。

扱又夫婦どもく思ひくゝの職工業を營み朝より家を出で暮に歸る徒

あり。是等婦人の爲には一つの便法ありて小兒持たる者は其工場に行く
 途次、幼兒補育所又は幼稚園等に至りて其兒を預け置き歸途更に其所に立
 ち寄りて連れ歸ることなり。(此幼兒補育所幼稚園等は慈善家宗教家又は
 町村費などにて設立したるものもありて要は下等人民貧困者の爲にする
 目的なれば其報酬謝儀に類して納むる所の金額は極めて僅小なり。(中に
 は全く無謝儀なるもあり。毎朝兒を伴ふ時大抵一錢若しくは二錢を納む
 るのみにて二錢は最下とす。晝飯を與へ其他一切の世話補育を爲すなり。)
 勿論此幼兒補育所には生れて數月を出でざる所の嬰兒より幼稚園に入る
 迄の年齢の者をも預くるを得。而して幼稚園は(英國にては小學校に入る
 者は先づ大抵滿七歳よりにて六年迄は幼稚園に在るを常とす。他の大陸
 諸州は我が國の如く滿三歳より滿六歳に達するまでなるが多きも所によ
 り場合によりては少しづゝの相違あり。)小學に入るまでの兒童を預かり
 爾後は尙な學校に通はしむるなり。且つ列國に於ては下等人民貧民と號
 る者は無論の事の爲には極めて廉價なる授業料を以て又は無月謝にて教

ふるもの少なからざるなり。委しくは家塾のありさまの所に云ふべし。前條に述べたるが如き下宿屋の主婦は(都府に在る者)場末の家賃廉價なる所に住ひて家を下宿人を置き我が家族が衣食住一般の事に就きての業務の外に其客人の世話する事なれば毎朝朝飯を終ると頓て大きな籠を手にして市に至り一日の總菜に要すべき品其他入用の物を見積りて買ひ整へ(勿論夜食後に行くこともあれども家に歸れば其子女が掃除終りたる後の寢室に入りて臥床の蒲團敷かへの手傳ひし其子女無きは自ら掃除をも爲し又は少女を雇ひ置きて爲しむるもあり。總じて臥床の敷蒲團は極めて大きな物故毎朝打返し敷き直す時は大抵二人して兩端を取りて之を扱ふことなり。)さて一日の食事調理に取りかゝる事なるが元來彼國の割烹は煮るにも炙くにも大率其時間を以て定むるなれば此間其傍らに在りて適宜の手仕事をなすも極めて容易なるなり。是等の婦人は上中等社會の如く交際期月の區別も無く午後と雖も終始其職務に營々として休息の暇誠に少なし。然れども大抵一週間に一回許りは午後三時より五時

頃迄の時間に於て親戚朋友其他を訪問し又他の訪問をも受け日曜日には寺院へ詣づるの外は子女を誘ひて公園などに赴き遊び夜食後は其買物等所用ある時の外は怪しげなるピヤノに向ひて音楽を奏しなどして一日の勞を慰むる者多し。(最もこれは下等人民中の上等に位する者にて其中より以下及び貧民と呼ぶる所の者は日暮後も中々休息の暇あること少なきよしなれども其諸工場に雇はるる者など決して我が國の如く多數の間を勞動する事無し。勿論其代り彼等が事を執りつゝある間は又決して我が國の如く屢々休息し冗談する等の事は無きなり。)又朝より各種の職工場に至りて終日其業務に勞き黄昏家に歸る者は其晚餐後に於て各自衣食住に就きての事は營むなり。(衣食住の事は後に云ふべし。)然しながら此班の人も日曜日だけは先づ大抵肩休めを爲して寺參りを済ませたる後運動を爲す等の事を無上の樂しみとするに似たり。(但し貧民院等に入りて養はるる者の事は家庭の範圍外なれば爰に載せず。)

ねど唯彼等が如何に其子女を養ひ育てつゝあるかを約言するも亦た無用の事ならざるべし。さて其兒童は大抵海關又は無月謝の學校に通はしめて義務學齡の年月間は必ず學に就かしめ彼國普通教育の獎勵法は政府非常に強硬手段を取りて其命に従はざる者は罪あり。伊國の如き現に其罰則に當てられたる者の物語りを聞きにき。其通學の間夜は其復習などを母姉などの傍らに試むることなり。されど總じて小學年齡の子女が其復習に時を費し腦を遣ふ事は決して我が國の如く夥多ならずこれ其文學の我れの如く漢文を交へ用ひ言文相ひ均しからざる等の困難少きに基ゆる事多きに居るが故なるべきも教育の方法亦た其實利實踐を旨とするの工夫及び其改良進歩の日に月に著くして其受業者に裨益すること少くならざるに至れるを知るべし。さて其義務年齡を卒れば銘々其方向を定めて自活の道を求むべき職業を學ばしむることにて女子の如きは是れより母の手助けを見習ふなるが或ひは出で人に雇はれまた夙に工女となりて僅少の賃錢を得んと勞くも少なからざるべし。然るにこの階級の人

の精神教育は殊に最も宗教の力廣大なるを知る。標悍猜智貪慾強情の國民も其幼時よりして宿されたる神なるものゝ觀念が非常に彼等の邪念恣情を抑制して其言行を正道に趣かしむると誠に著るき効あるを見る。而していかなる家族にも奇くも卓の一基腰掛の一脚も存する所にては聖書の一冊許りは供へ置かざる者無し。こは重に英國にての見聞を記す。且つ日曜日毎には必ず其父母兄弟姉妹打ち連れて寺院に詣で法文説教を聞く事にて宗教家の亦た是等下民を濟度するには務めて慈惠施與の澤を敷き以て彼等を感化せしめんと競ふこと切なり。又晝間人に雇役せられ或ひは家事の助手に暇無き子女等は夜食後更に夜學校に通ひて筆算外國語等を習ふ者も少なからず。(外國語を學ぶは下等の者に在りては店番と成る爲に甚だ入用なるなり)總じて下等人民の子弟が就學の時間は短きを常とす雖ども社界百般の事漸々進歩したる國柄に在りては日曜の休暇に運動に出づるにもすこし物心あらん者は其見聞する所を取りて以て學問技術の裨補と爲すに足れり。且つ英國に於ては殊に是等時間を多く持

つこと能はざる人の爲に極めて廉價なる各種新聞雑誌の發行ありて、之れを助け導かんとする方法の宜しきを得たるが故に彼等は是れに依りて、大いに其徳性と智能とを啓發せらるゝこと多しと云へり。(英京倫敦に於て、若し午前八時前後他出して市中或ひは涼車中に在らんに、恰かも其時間には諸職工等が工場雇主の家などに通ふ時にて、男女壯少を問はず皆廉價なる新聞雑誌を手にして讀み且つ行くを常とす。)

余が英京倫敦滞在中、或る宗教熱心の婦人が家に「母親會(上流社會の所に載せたるものとは別なり)なるものを催さるゝことありけり。これは總べて下等社會の婦女を集めて、宗教的修身の演説を聽聞せしめ、立食の宴應をなせるなりき。此會はもと某々夫人が慈惠の爲に設立せられたるよしにて、其施主は總計廿人許りにして、此人々毎月一回順番に、彼等を私宅に招くなりとぞ。余も亦た某夫人が許に開られたる時、其形狀を參觀せずやとありしかば、其所に臨席すと云ふ某女に就きて、問ひ合せたるに、斯かる催しある程、參會する人は菓子にまれ、菓物にまれ、多數の人に行

き渡るべき、鹿末の食物を持參して、恵む事なりと教へられしかば、乃ち雜菓やうの物二三品を用意して訪らひぬ。本會員の多くは、諸職工女、又は雇人足の妻などいふ者の種類が多き故に、晝間は、いづれも、其の職業にいとま無かめれば、必ず夜食後に開らるゝことなりと聞えつ。余が來會せしは、最早午後八時頃なりしかば、既に當主婦が、一場の演説は終りたる後にて、某宣教師の立ちて説教にかゝらんとする時なりき。其説教の大意は、善を勧め、惡を懲らすべき事に於て、其例證に、某善者の陰徳を施したりし報いにより、陽はに神の幸ひを與へ給ひし事蹟なり。言は卑近にして、其意味は深遠、學べる人も、學ばざる人も、いと面白く感じたりしこそ、是の老宣教師が、技量の勝れたるなりけり。次に某夫人は、子女教育の事に就きて、といへる題にて、下等人民の妻女が心得になるべき事、及び、幼兒をして、正義正道に導かしむべき道理と方法とを説き示されたるにも、亦た充分に傍聽する價値を有せりき。右終れば、某夫人は、ピヤノを奏で、衆會を立ちて、神歌を唱ひ、さて老師が祈禱中、一同は跪きて神を祝しぬ。是時

既に時計は十時半になん／＼たりき。主婦は人々を誘ひて立食堂に集きたりしが今夜此所に集へる婦女等は、大凡五十六七名許りなり。折から秋の末つ方にて、やゝ肌寒き頃なりしが、彼等の多くは皆大抵綿布の洗ひざらしたるを着け居たりしかども、さすがに垢つき汚れたるなどはあらざりければ、余甚く其心用ひの愛たきを瘻めたりしに、主婦答へて、此會の規則中、身分不相應の奢りは、最も深く戒むる所なれども、衣食住の清潔法は、殊に厳しく奨励するが故に、苟くも本會に臨む者は、勉めて、斯く着用の衣裳に注意しつゝ來たるなり。といはれき。斯くて、その卓上には、麵包、バター、菓子、菓物、雞卵、冷肉、及びラムネやうの物を、山の如く置き並べたり。當夜の施主及び其が助手の夫人達は、左も樂しげに、いそ／＼と、自ら肉を盛り、麵包を配りて、此客人を饗應せり。(元來歐米各國にては、立食の時、婦人が立ちて、卓上の肉を取り、且つ、これを配附する等の事無く、こは、愈々、男子が爲すことのやうになりたるも、此席に限りて、斯くも、身分ある夫人達が、下り立ちて、取りしたゝめらるゝ、亦た一つの奇觀なり。(余も亦た、こ

れに倣ひて、甲に乙に、食物を配り與へなどしたるに、この婦人どもの悦び畏みて、老いたるは、涙さへ落して、嬉しむたるげに、心行くわざなりけり。立食終れば、銘々衣囊より、最と大きやかなる手巾を出だして、各自の前に据ゑたりける。皿の上の物、一つも残さず、包み持て歸るを、なほ、主婦は呼び留めて、卓上なるを、更に彼れ是れにと、分かち與へなす。斯くて、大方退散し果てたるは、十二時許りに、かありけん。主婦は、莞爾に余を顧みて、感謝に禮を述べて、さて、君には、左こそを、かしく思されけめ。彼等は、極めて貧しきものなれば、月に一回の饗應を、此上無き樂しみとして、自ら悦べるのみならず。あはれなる、彼等が子供は、懇に就かしむれども、いも眠らで、母が土産持ち歸るを、待ちつゝありとぞ聞く。斯かる、賤しき者の、振舞ひを見馴れ給はぬ、御目には、いかに多慾く、怪しと思し召されけん。されど、貴國にも、此程の人は、なほ同じ様に、ぞあるらし。左は、あらずや。と言はるゝに、余は、心の中にて、否とよ。我が國にては、盛大なる、權家の夜會にも、手巾に物包みて、食堂より立ち出づる紳士を見たる事もありけるよ。と、

思ひ出ださるゝに、人は知らぬことなれど覺えず面赤む心地して、最どかたはら痛くも、をかしくも思はれつるを、左あらぬさまにもて隠して、貧しき人の形狀は、孰れの國も同じ事にこそあるべけれ。されど彼等がいかに物靜かに打ち長みて、長き説教演説を講聽したる、誠に殊勝に覺え候ふ。貴國の人は、下さまの婦人も、誰れも、斯くあるにか。と問ひたれば、否々法話などの窮屈なるを聞くことを嫌ふ、無頼の婦女も甚だすくなからず。又は酒を嗜める者、賭事を好める者なども、中々なほ許多候ふなり。さるが中に、縦令かたへは、其施與を欲する故とはいへ。兎まれ、斯會に入りて、斯道を聞かんと希ふ者は、皆彼徒の中の、善良なる者にこそあれ。而して此修身と子女教育との談話は、彼等が爲に裨益する所少なからざるを覺えき。彼等は、健氣にも、斯會員中の婦人が、甚しき不幸災厄に罹りたる時には、互ひに云ひ合はせ、語り合ひて、不如意の中より、應分の助けをも爲すやうになりもて行きぬる。最と嬉しき事にこそ。勿論國民教育の普及につれて、是等階級の人も、かつ／＼曲みなりにも、説教聽聞の要を

衣食住に就きて

手帳に書き留め置く許りの事、または兎やら斯うやら、聖書の一條も讀み得る程になりたれば、平身なる今宵の談話は、耳に入る許りになりたる。こも文明の餘澤とやいはまし。など語られぬ。誠に斯かる仕組は、下等社會婦女の爲には、げに少なからぬ益あるべしと感じたりき。下等社會の人の着用する衣服も、其中に就きて、上の部類に置かるべき人々が、日曜日、寺参りの形狀などは、中々立派なる事なり。職工小使なども、随分に絹帽を戴き、フロックコート、モーニングコートなどを着、その妻女も、毛織衣の小奇麗なるを着て、打ち連れて行くさま、目馴れぬ程は、何處の紳士連なるかと、迄覺えしもをかし。されど、最下等の輩が、襤褸の衣服を纏ひて、破れた靴穿ちたるが、路傍に徘徊して、小さき花束、摺附木の箱など、隠ぎたるさまどもを見れば、其不潔なる、また我が國のよりも、數等甚だしきに似たり。況して隆く尖りたる鼻、深く凹みたる臉、面、蓬髮、青き腫のきら／＼と光りたる、誠に彼の地獄畫に見たる、惡鬼の心地せられて、最と怖ろしくも思はしかりけり。一日、某夫人に誘はれて、貧民學校に行きつる歸途、殊更に、ある貧者の

家に入り立ちて見じことありしが、一種えも云はぬ惡臭の鼻を衝きて何と無く頭重き感じのせられたりし。此破屋の内に在りける妻子の衣服は破れ垢つき、そいけ綻びて見る影も無く佻しげなりしが、斯くても身の顯はなる將た徒然なるなどはあらざりけり。國の體面上なほ一步我れよりは進みたりけりと覺えしぞ例の最と口惜しかりける。

又片田舎の農夫等が衣服も亦た數等の階級あるべけれども概して云へば、先づ物質は疎末なれども餘りに汚穢しからず。況て伊太利などの如き夏季炎暑の随分に酷烈なる國柄に在りても、其戶外に出で、耕耘の業に従事しつゝある者どもの決して肩を脱ぎ、腰を顯はしたるなどを見ず。兎にも角にも、衣裳を具備し、靴を穿きたる、懸うはあらず、覺ゆかし。是等の農家に、日和よき日には、賤の女等の小川の邊りに、衣洗ひて、背門の木立の枝より枝に掛け干したるさまなど、何となくわが内地の田舎に、鬻婦として面影に立つ心地せられたりき。

泰西衣食住の中、食物は、最も其上級を占め居るものゝ如し。宜なり。肉食

を旨とする國柄に於ては、殊更に肉食せんとするも、中々容易ならざるなり。而して其人民一般が常食なる、麵包、牛乳、牛肉の如きは、其始め、政府が務めて、出來得べきだけ、廉價ならしめんとせし結果、これをわが國の比すれば、他の贅澤品の、非常に高價なる割合には、存外に安直なり。されど、其れさへに、食し得られぬなどの、極貧の細民に至りては、牛豚の腸など、犬だに食はぬ物を、さへ、拾ひ來たりて、僅かに鹽ゆでにして、其饑えに充たしむとぞ。最と痛はしき限りなりかし。其れより以上は、いかに貧困者たりとも、麵包と、バターと許りを、食用とせぬものは、無しとぞ云ふ。余は、穢げなる衣服を着けて、作事場に土擔ぎしつゝある者の、查辨當を食するを見たるに、なほ、バター塗られたる麵包に、鹽肉、乾肉、ソーセイ、等を、むしり食しつゝあるを見たりき。又、余が寓居の出入魚商が店は、最も信用ありとの評判なりしが、ある夕景に、宿の人々と散歩に出で、その店頭を過りたりける程、貧民の群とちほしき婦女等の列をなして、魚買ふ者許多あるを見しかば、余は、同伴婦人に向ひて、彼等は何故に、今斯く此所に集ひて、施物にても受くるが如く、先きを争ひて、魚を

購ふにか。と問ひたりしに、彼女答へて、此店の主人は正實にして情ある人なり。さる故にや、徳は孤ならずして、其商業の日々に隆盛に越く儘に、いと多量に心を用ふること切なり、我等が此店に就きて、魚求めんとする時も、其品の少しにても、陳しと思ふときは、決して賣らず、皆別所へ除け置くなり。而して、日暮を待ちて、其悪き品を極めて、廉價に、近傍の貧民等に賣り與へ、且つ、極貧の者には、無代價にても、施與することあり。是故に、彼等は斯く、我れ後れじと競ひて、此店には來たり集まるにぞありける。など談られき。總じて、肉類の中にも、牛、豚、羊の肉は、至りて安直なれば、中以下の人は、大抵此種の肉を食すること多し。是等の肉の、最も下等なるものを買ふは、寧ろ普通の菜蔬類を購ふよりも、甚だ廉價なるなり。

下等の人の都府の住居は、大抵六七八階など、家屋中に在りて、最上層に住ふことにて、地下の室、即ち穴藏のやうに、暗燻たる所にも住む者あり。斯かれば、ふと外國などより、渡り行きたる人の目などには、有名なる都會の地は、皆貴紳富豪の住居のみにやと、覺ゆる迄、更に貧寒の藏室、破屋の眼に觸るゝこと

と無きなり。斯く、幾數層の高き、又は、人の家の地下に住へる者どもの有様、容易く見るべくもあらず。依りて、先づ或る人よりの傳聞の儘を記さんに、極貧の細民は、僅に、一夜一錢の銅貨を挿ひて、身を入る、許りの席を借るも、一室に、許多の人の入り込む事なれば、身を伸ばしては寐るよしも無く、たゞ蹲居りて、一睡の眠りを食るに過ぎずとぞ。又、早朝に公園の樹下を過れば、草を敷寝に、なほ動めき居る者をぞ認むる。其れより、今少し勝りざまなるは、兎まれ、怪しの臥床、塵未なる椅子、卓等の備へつけあるを見たり。

余が、在英中、最も久しく寓居したる家の主婦は、殊に、慈善深き人なりき。己れ富むとは無けれど、將た、左許り貧しと云ふにもあられば、告ぐる無き民どもを、恵むを以て、老の樂しみとは爲なるべし。其家の牛乳配達の妻、子産みたるが、産後の肥立ち、悪くて、痛く惱めるに、六七歳を頭に、四人の小兒を持たるなれば、一家の烟ほとく、消えがてに、すと聞きて、或時は、食物の餘れる、又は、蓄りたる衣どもを、屢々、おくられぬ。余も、亦た、不用なる物取りした、ためて、靴へ、遣らんとせしに、主婦云へらく、彼のあはれなる女は、

貧しけれ共其心誠に氣高く直はなるものなり。さればこそあれ。神の冥助もこと無くて一時は危しと逢見思ひたりし病も今は大方愈りがたに成りにたれば床の上に起きかへりて幼き人を相手に家事何くれと營みつゝぞある。」と語りて貴婦訪らひ給ふとあらば己れも諸共に行かん。いかに。」と云ひ出でたれば「そは一段の事彼女いか許りか悦び畏むらん。」などあるにさらばと打ち連れて出で立ちたり。そが家は某町の片邊り第六階目の所にありて階段廻り登るに足最とたゆし。やうく登り果て見れば彼の牛乳配達が室は右側の狭き二室を占めたり。左には又他人の住まへるなるべし。同伴の老婦人戸をほとくと打ち叩けば内より返答して開きぬ。年輪卅歳許りの女顔の色青ざめて落ち入りたる臉物凄きやうなれど容貌態度無下に賤しき人とも見えぬ。こはとはと驚きながらさすがに惶て騒ぎたるさまも無く七歳許りなる少女を招きてふりたる木造りの椅子二つを我等に與へ日頃の長まりを述べて悦び居たり。斯くて主婦は今日持て來たる物ども包み打ち開きて與へ

などする程に此室内の形状を見れば時は既に十一月の半にて是國には火無くては凌ぎ難き寒さなれども暖爐は寂として物も無し。されど朝夕は折々焚きたる事もあるにか石炭の燃えさし五六片を殘せり。鐵製の臥床破れたる毛布被せる布も此所彼所裂け目繼ぎ合せたるものと顯はなれども露汚れたる所は見えず。窓には小さき土燒の鉢に雜艸の花植ゑたる汝もあはれは思ひ知りけりと覺えてそいろに懐かし。板張りの床は釘あらはなれども其れ將た能く拭ひ渡したれば穢けならず。何くれの事に就きても神の恵みと打ち畏みたる。げに斯かる小民には宗教てふ勸善の器械は非常に効用あるものなりとぞ感歎せられし。田舎の細民が住居は都府の細民の如く數層の樓上に住まへるならねば意を注ぎて之れを視察せんと欲すれば容易に知るを得べし。さて是等の家も主に練瓦造なるが多く稀れには塗家もあり。屋根は草葺なるも少なからず。室内のさまは其都會に在る者と大同小異なるに似たり。余某貴族が領地の城砦に滞在しける程日毎に近傍の田舎を廻り歩きけ

るが一日、途上俄か雨に遇ひて、同伴者一統とも倉皇路傍の民舎に入りたりしが、此家は其諸共なる領主が配下の小作人なりければ、主人も主婦も畏み迎へて、椅子よ卓よど立ち願げども、貧しき家なればとみに取り整ふべくもあらず。人々は痛く心苦しがりて、「左なせそ。雨だに漏らずば、其れにて事足りなん。」と云ひつゝ、狭き一室に押しこもり居たり。主人は窓より吹き入るゝ横しぶき防がんとて、風の煽る硝子戸辛じて引き立てつれど、笑止や、其が三分の一は碎け破れたる儘なれば、雨は其に障るべくも非ず。其所近き人の衣見く、ひた濡れに濡れたれば、若き人は斯からんには、途中に立ちたらんこそ、中々に、後る安かるべけれ。など忍びつぶやくもをかし。斯くてやうく、小降りになりければ、悦びを述べ、辭し去らんとするに、主婦は早く紅茶を作りて、最と大きな茶碗にうつし、いざ／＼と薦められたる志の厚きに、無下にいなみもえやらで、之を喫し、ちどの茶代を與へぬ。彼等は、屢々固辭して受けざりしを、辛うじて手に握らしめつゝ、立ち出でけり。此間、此家の内の形状を見廻はしたるに、

看護のありさま

農家のさまは内外の國ぶり、格別の大差無きに似たり。但し、こは是れ、小作農人が住居にて、即ち下級の者なれば、農具なども具足し居らぬに相違無きも、其壁にもたせたる器具は、疑ひも無く我等がのよりも、遙かに進歩したるなるべしと覺えき。されど斯道に不知案内なる眼よりして評するなれば、其當るや當らざるやは知らず。下等社會に於ては、家に患者在るも、大抵は容易に醫に診せしむること無きは、いかに下等の醫者なりとも、診察料の容易ならぬによるなるべし。(但し、貧民病院に入る者は別なり。)然れども、近き頃、普通教育の普及は、百般の事に裨益する所少小ならず。家内衛生の事も、無月謝にて、教ふる所さへ出来たれば、是等主婦も亦た少しは、簡易なる看護の方法如何は知る者も、やうやうに多くなりて、大抵は手療治にて、其病を治せしむる事多しといへり。余が親しく參觀せし、某宗教女學校中に設立したる、夜學校には、男女を通じて教授しつゝありしが、委しくは、女塾のありさまの所に云ふべし。其が中にも、家内衛生、及び簡易なる看護法の科を設けて、教授するを見たり。

爰には諸職工男女の來たり學ぶ者多きよしにて彼等は晝間には其正業に就き夜食後來たりて教へを受くることなり。余は其法の最も下等人民に益あるべきを稱讚し其衛生科教師に就きて其教授の方法と結果とを問ひ聞きたりしに女史答へて其始め此科を設けたりし頃は非常の困難なりしなり。此方にては是れならば充分下等人民の度にも適することならんと思ひて極めて簡便に最も廉價に爲し得らるべく工夫して教へたる事も爾後其結果を問へば曰く折角の御指南ながら我等が家にては斯うくの故障あり。云々の難儀あり。げに善き事は善かるべきも到底我が分限にては實際には行ふべきにあらず。と云へり。甲も乙も大抵大同小異の返答なりき。是に於て我等は屢々失望と苦心とに打たれて之を應せんかと思ひし事も度々なりしがさてはならじと志しを勵まして病者ある毎に其家に就きて親しく其有様を見聞せり。斯くする事數十ヶ月の後やうくに悟り得る事も出で來て今は誠に少なからざる裨益を彼等が上に見る好結果を得たるこそ嬉しき事なりけり。

家庭の娛樂

れ。と語られたる。げにさる事とぞ覺えし。又所によりては「貧民産婦保護會」といふもの有志夫人の手に成りたるがありて凡そ貧困の民の妊娠して臨月に至れば其家計の困難なる狀を具して町内に信用ある人の保證を請ひ右會社に願ひ出づる時は社員一名其家に出張し其れ相應の見積りを爲して産前産後一切の主産婦中入用品物品を貸與する等の方法を設けたるものなりとぞ。家庭に於ての嬉遊娛樂の有様は余が親しく見聞したること無ければ委しく爰に云ふによし無し。但し日曜日其他是等下等人民が休業日に在りてのさき即ち其日頃の苦勞を忘れていかに楽しく面白く一日千秋と待ちつけたる日の暮るゝを惜しむ心こよ無く深かるべしと外目にも推察せらるるは彼等が戶外遊戯の形狀なりけり。労働者が肩休めの日都府の場末なる公園に行きて見れば日出より日暮に至る迄三々五々隊を爲して東西より來たり南北より集まる者恰かも甘きに附ける蟻の如く其幾數百人なるを知らず。少壯男女思ひくに輪を廻す者球を抛る者或は茶店に菓子果

物を賞翫し酒舗に一酔の樂みを買ひ談笑遊樂嗤々として笑ひ喋々として
暗る。又空を仰ぎて樹下に謠ふあり。地に伏して芝生に眠れるあり。賦
に愉快らしく思ふと無げに見ゆるも宜なり。彼等は常に樓上地下の窮屈
なる所に家居し眼に麗しき草木を見る由も無く口に新鮮なる空気を吸ふ
とも無き身の一週間に一度の暇を得て斯く打開けて心地よき廣場に出で
て遊ぶなれば其が平素の鬱を散じて悦び樂しめるもげに理りにぞ見えけ
る。又彼等は總て賭事勝負事を好むこと甚しく勿論賭事を好むは上中等
社會を通じてなれど、その旨と男子に屬するに於て且つ家法嚴肅なりと稱
せらるゝ家にては斯うやうの事を好まざるはなほ我が風習と格別變ると
無きが如し何事の勝敗にも金錢を賭して利を争ふと多しと云へり。然れ
共此最も多慾なる民性は利能く利を制し慾又慾を制して却て一般の人の
賭奕の爲に身を亡ぼすが如きに至る者は存外に少なしとぞ。げに能く務
め能く遊ぶてふ語は彼下等人民が上にまで及ばしたる風俗なりけり。

女塾のありさま

前巻既に上下を通じて家庭のありさまを略述したれば是れより更に項を
改めて女塾のありさまを云ふべし。(勿論題目には女塾とのみ記したれど
も事の序によりては女校の形況にも説き及ぼす事あるべし)原來女子教育
上の視察を細かに試みんとする者に在りては到底學校の授業時間内に参
観するのみに止むるは決して充分の裨益無かるべきを思ふが故に其滞在
日數の短き所其土地に知人少なき國にては已むを得ずしてたゞ晝間學校
巡廻のみをせしかどもや、長く滞留し得らるゝ限りの國に於ては勉めて
同地のあるべしを求めて以て塾舎の中に宿泊したりしかば其視察上大いに
参考となるべき事を見聞したるもまた甚だ少なからざりしを覺えき。但
し女塾の重なる所は一々に其名を附せんとす。されど其弊風と欠點とを
察り無く記さんとする時は大抵其舎名塾號を避けて書かず。こは余が自
ら竊かに守る所にして乃ち人の善はなるべく擧げ人の惡はなるべく藏す

はしと希ふ意なれば讀者幸ひに其をばくしさをな咎め給ひそ。
 歐洲各國女塾の形況を云はんとするに當りて必ず先づ爰に特筆すべきことあり。曰く教育の方針これなりとす。これは其の政府も國民も宗教に熱中する輩も哲學に熱心なる者も僉異口同音億兆心を一にして匪勉精勵互ひに負けじ劣らじと其同一の針路に向ひて導かんとするものは國民教育其ものなることを知るべし。彼れは其男子と女子とを問はず其官立と民立とを撰ばず。其國に忠にして其の士を愛し一歩たりとも他に後れを取らじとの觀念を宿さんとする手段は實に千萬にして足らざるなり。先づ其國民教育を奨励せんとするに當り己れを信じ己れを愛し他を蔑し他を排して然かも斯くの如く我れは彼れに勝ること甚だ多かるに彼れは近來斯く／＼の事業我れを凌駕せり。云々の學術我れを壓倒せり。我れ焉んぞ彼れに後れて可ならんやとの意氣込みは中々容易のものにあらず。試みに彼等が其最も純白無邪氣なる幼年兒童に教ふる所の小學讀本を見るべし。孰れもあらゆる其國の長所を擧げ帝王の聖德人民の善行は云ふも

更なり。佛に在りては獨逸に對する敵愾心獨に於ては佛蘭西に反する抵抗心を養成せんと勉むること甚し。(現に近頃の刊行獨逸小學讀本の如き猶ほ佛國に對する敵愾心を發揮して毫も假借する所無きを見るべし)其他英に露に埃に伊にすべて皆斯くの如くならざるは無し。(其例證は尙ほ後に云ふべし)余は斯かる教育方法の其精神を強固にして其士氣を鼓舞するに裨益あらんことを思ひてそらるに欽羨に堪へざりけり。然れども又一方法よりして云はんには若し我が國に於て斯くの如き方針を取りたらんには徒らに燕趙悲歌の士俗に云ふ壯士の狂人を出だし就中女子が如きは唯其もてあまし者を作りなすやも知る可らず。これ其近き頃迄鎖國攘夷の說盛行に行はれたりけん井蛙の見界他を知るの明を塞ぎ國家進歩の速力遅々して世界文明の競争に立ち後れたりけるもの差ひめどなほどもすれば其極端より極端に走らんとする民性の然らしむるによりて容易に其之れを習はしむ可らざるの理あるか。彼の國はこれに反して一方にはかく非常なる敵愾心を養成せんと勉むるとも尙ほ其外交の圓滿を欠かず。

巧みに能く、國賓外客を其掌中に弄する術に長けたる女子に在りては殊に、最も驚くべきものあり。其天性か、將た習慣か。鬼まれ彼れに在りては、全善の事も我れに在りては、全不善の事無しとせず。其利の鋭き所は、其害も亦鈍からず。之れを取り、之れを行はんとするには、決して、輕舉の振舞なし難きは、今更言を俟たずと雖ども、其國の利害に關する事項に當りては、官民貴賤老若男女自黨も、反對黨も、賢者も、不肖者も、みなことごとく一致して協心戮力、勝を他國に制せしめ、じとの競争心は、其教育の進歩と共に、日一日より、其速力を加ふるに似たり。(こは戦争外交談判の如き、大事に於てのみ、然るにあらず。例へば、一小些事即ち、一科の教授法商品の賣り方、諸職業の上、に於るも、すべて、みな斯くの如くなるなり)ざるを、我れは、わが武人教育の餘熱、猶存する所の者最も、忠君愛國の情切にして、其日新開明の歐化主義行はるゝ所、却りて、其熱度の低落せしが如き、嫌ひ無きか。彼れを見、是れを考へて、能く愛に慮る所無かる可からずとぞ覺ゆる。

さて女子が塾舎の形狀を、逐次見聞のまゝに掲げ載せんとし、先づ其學校寄宿

宿舎の規則、習慣等を詳言せんに、其國其所、又其愛舎の成り立ちなどよりして、其組織、目的、方法等を異にするべきは、勿論の事たるべしと雖ども、概して云へば、公け立ち、廣らかなる塾に在りては、百般の事、愈々、能く整頓して、外見如何にも立派なれども、其寄宿生の風は、何と無く男子らしきに過ぎて、女子らしき所に乏しきが如し。若し、それは、是等塾生をして、教師とし、技術家として、一生獨立の生活を爲す者とせば、猶可なるべしとも云はん。されど、彼等をして、尋常普通人の妻たり、人の母たる者とせんとすれば、大いに鑑る所無くは、ある可らずとぞおぼえたりし。又私しとまに、かごやかに爲なして、生徒の數も餘りに多からず、萬づ、塾生と起居動作をともにする、所謂家族的塾舎は、何事も、充分に、能く整頓すること能はずと雖ども、塾生は、却りて、注意深き母の膝下に教育せられたるが如く、日常女子が實踐の事に就きて、甚だ見るべきものあるに似たり。さて、斯く、學校に通學し、家庭に寄宿れる女生徒は、先づ、大抵中等の階級なるが多しと雖ども、希れには、富貴の家の女子も、其母の考案により、他人の目をも、迅く見せ置きて、且つ、幾分か、世の辛酸をも嘗

めしめたしなどの希望にて寄宿舎に居らしむる者もありと云へり。又、ク
 ンブリッチ、オックスフォードなどの寄宿舎には、随分に身分ある人の高等
 なる學科を修めんとて到る者或は諸外國の貴族などの來たり宿する無き
 にしもあらず。(委しくは別記すべし) 兎にも角にも余が各國に於て見聞
 したる塾舎の多くは實に清潔に甚だ秩序立ちて其規律の正しきには何方
 に在りても痛く驚歎したりしなり。總べて規律の整然たる又其時間を守
 るに嚴かなる事は學校寄宿舎共に愈々恰も軍艦の中の生活即ち水夫等が
 上に施されつゝある法規にも似て誠に嚴然たるものなりき。余は早くよ
 り職を學校に奉じて時間を守ることは随分に正しき積りなりしかども斯
 う様の女塾に寓居したる當座は甚だ窮屈なるを感じたりき。よりて思ふ
 に若しわが國にして俄かに斯くの如き塾則を設けて必ずこれを遵守せし
 めんとせば(其貸費生等ならば兎も角も)到底過半の生徒には塾則違反の罰
 を加へざる可らざらんかと迄心竊かに慨歎せし事もありけり。斯くの如
 く最も嚴重に最も秩序立ちたる塾舎の内に教育せられたる女子は他日嫁

して人の妻となるに及びても少年の習慣は彼等が第二の性となりて家政
 百般の事を取りしたゝむるに當りても整然たる秩序肅然たる規律を守る
 に毫も困難窮屈を感じざるも宜なりけり。是等數分子の集合せる社會
 の團結また斯く秩序あり規律ある風俗を作りなしたる決して偶然にはあ
 らざるなるべし。然しながらこの幾何法を以て物を粗立てたるが如きは
 其外觀甚だ立派にして内部また寸隙なきに相違なきも一方よりして云ふ
 時には更に餘音餘香等言外に溢るる趣味微妙の風を欠くことを免かれ
 ず。前條既に中等社會家庭のありさまの内にも云へるが如く善を善とし
 惡を惡とし雪は白きもの墨は黒きものなりと断定すれば此間また一つの
 緩取りを如ふるもの無く將た情狀を斟酌する等の事少く彼れは善事を
 なせりゆゑにこれを賞すべし。彼れは惡事をなせり。ゆゑにこれを罰す
 べしと云ふがとき道理々々を支配し論理々々の法によるを先づ大抵學
 校寄宿舎出身の女子一般の主義とするが如し。凡そ人道理によりて道理
 を行ふ甚だよし。誰れかこれを不可なりと云ふものあらん。然れども其

道理の裏却りて不道理の隠るゝことあり。不道理の裡成ひは道理の竊め
る事無しとせず。賞罰嚴明なるは甚だよし。されど時ありては其れをし
て烟雲模糊の間に暫らく抹殺し置かざるべからざること無しとせず。其
善を善とし悪を悪とし雪を白しとし墨を黒しとするは苟くも其道を知る
限りの人は誰れしかも能くせざる事あるべき。唯同じく其善を勸め悪を
退ぞけ黑白を分つに當りて其時と場合と緩急と實に誠に一體云ふ可らざ
る巧妙の手腕ありて能くこれを行ふをこそ活る働きとは云ふべきなめれ。
斯くてぞ一人を賞して千萬人悦び一人を罰して千萬人懲るてふことも出
で來べきなる。然れども彼の國の人一般に引き切りにしてさらに物のあ
はれを汲み分けずといふにはあらず。彼れの所謂スワイートネスなる語
は其幾多云ふ可らざる微妙の意味の含めるを知らん。是故にこの多數の
人を一定の時間に於て相ひ率ひ相ひ教へざる可らざる學校教育に於ては
かの造花師の造り出だせる花卉の巧みに天工を奪ひて餘す所無きも添へ
んと欲して添ふることも能はず加へんと欲して加ふることも能はざる天香眞

教授の方法
及び塾長、
教師、塾生
の擧止

美を移すことを得ざるとひとしく此中に在りては閑雅優艶高尚貞肅の淑
女を作り出だすこと難してふ輿論は遂に彼等上流社會富貴の人を動か
して家庭教育即ち女子は深窓の裡に在りて慈母が恩愛の園中に培養し機熟
して後更に社會の交際場裡に美花を咲かしむるの方法を取らしかじど
いへる所説に傾きたる又多年經驗の結果なるべし。(但し我が國に於ては
家庭教育のなほ容易ならざることば前巻に述べ置きつ。尙ほ貴族令嬢の
風采等は後段風俗の所に別記すべし。)

余が各種の塾舎視察の中に於て最も意外なる迄驚歎したりしは其塾長又
は教頭なる人の威權最も強き事これなりとす。彼等が其取る所の主義を
確守し且つ之れを生徒に確守せしめんとするに當りては随分に厳しき體
罰をしも行ふに慣らざるなり。其塾則を勵行するに於ては何等の事情を
も何等の事柄をも決して宥恕すること無きなり。故に塾生の彼等を畏敬
すること實にわが往時武門時代の嚴師父に事ふるの趣きを追想せしむる
ものなり。(大學生を宿泊せしむるある他の校舎に於ての外は教師が生徒

の名を呼び捨てにする等は無論の事なり。宜なり。活潑剛毅にして或は強情執拗なりといふべき彼の女生徒等を駕御する法若し一度過ちて其轡を緩べ彼れが奔逸するに任せたらんにはまた決して再び埒の内に入りたることを能はざるなるべし。而して其最も老練に最も徳望ある塾長教師の如きは恩威並び行はれ寛嚴其當を得て生徒のこれを敬ひこれを慕ふこと實に君の如く親の如き者ありき。されど是等は其最も玄の又玄其の最良なる者を云ふのみ。多くは大抵其確乎たる憲法によりて以て勉めて其格式を有ちつゝある者の如し。然るに余等が眼よりして見れば殊に最も奇異不思議なりとまでの感と興へたる者は其塾長教師等の時ありては生徒と打ち交りて話ひもし踊りもし或は茶番狂言などをさへも諸共に演じ興じて昨宵は恰かも一つの朋友の如く打ちくつろぎ相ひ戯れたる人が今日に更に講堂に立ち教場に入りて眞面目なる演説をしむづかしき講義を爲すに當りて教師も生徒も恰かも別人なるが如く又ありつる嬉戯も忘れたるが如く嚴然肅然として聽講質問等を爲す唯平日に異ならざるなり。

これ其早くよりの習慣風俗人情の上よりしても斯くの如き一種の制限を作り出だされたるなるべし。總じて彼國の人は何事に限らず何人によらずその働く時と遊ぶ時との區別畫然として互みに相ひ犯さざるを常とし人の行爲實に器械の運轉するに似たるものあり。且つ其箇人々々が期せずして己れが格式を有ち他をして一步をだもわが境界に踏み入らしめんとすること極めて甚だ嚴重なるなり。故に彼の教師等の己れ殆ど年少の人と化し去りて笑ひ樂み遊び戯ぶれつゝある折も若し一つの生徒が何等か教師の範圍内に立ち入り或は馴れ侮るが如き言語舉動ある時は教師等が笑みの唇は忽ちに引き引き細やかになりける眼は俄かに大きく凄く光りて歡喜の顔は頓に叱責の語と變るを常とす。且つ其無邪氣なる年少の生徒と雖ども亦た少しく物の心を思ひ知る許りになれる者は年少は年少にして其考へは幼稚なるにもせよ猶ほ其己れが格式に疵つけじと希ふ心の深きは實にまた驚くに堪へたり。これによりて彼れを思へばありつる我が武家教育時代には汝は武士の子と云ふ事を無上の榮譽無上の褒詞

否、此上も無き責任あるものなりと思ひたるが如き感ありし事の、今更にいと惜しくも、慕はしくも覺ゆかし。彼等が生徒を教へ、生徒を戒むる語に曰く、御身は英國人、佛、獨逸、伊、其他各國皆然らんなるぞ。又汝は耶蘇教徒ぞ、又曰く、神に誓言するを得るかなどの語は、實に無比なる修身の攻具なりかし。兎に角、其教ふる人も、教へらるる人も、亦、其教へを受けしむる父母も、眞面目にして、本氣なることは、就中、何事にまれ、最も眞面目なるは、英國人を以て、最とすといへり。甲も乙も、みな、大抵然らざる無し。彼の、諸國、滑器を以て、世に聞えたる、佛蘭西人と雖ども、其職を執り、業に就くに當りては、決して、諸國を云はざるなり。滑器を用ひざるなり。其飲食起居を共にして、我が兒の如く、慈み、教へ、誠むる、彼等教師の一般が、皆、愈々、聖人賢者にあらざるは、勿論の事にて、其心底を尋ねる時は、ようせずば、我が教員の多數よりも、甚だ強慾に、最も意地悪きやも、量る可らず。然れども、彼等は、極めて、強慾なるが故に、其慾や、決して小ならず。其名を求め、利を欲する心の深ければ、深きだけ、其名の爲に、利の爲に、能く、其生徒に、親切なるなり。能く、其教授に、熱心な

るなり。(眞正なる宗教家の或者が、純一に、信神の心深きが爲に、名利を離れて、慈仁、正義を行ふの徒は、取除けとして、)而して、教師の獎勵法能く、其當を得たるが爲に、なるべく、一校に、永任して、出來得べき限り、其職に、経験を積まんと、勉むること、厚く、且つ、深きが故もあるべし。(例へば、獨逸人某が、其普通教育の、目今、佛國に、凌駕せらるることを、慷慨して、痛論したる、教育意見書中に曰く、近來、往々、小學教員は、長く、其職に、安ぜず、其業に、専らならず。其これに増るものある時は、他に、轉じ、外に移りて、己れが、榮達にのみ、汲々たるにあらずや。全國、小學教員の、其教育の職に在るもの、平均、廿々、年強、其裁判官の職に在る者との、長短を比較する時は、其差果して如何。教育は、斯かる、腰掛的の、仕組にて、出來得るものにあらず。當局者たらん、人宜しく、其永任の方法を講ずべし云々)とありき。彼れの言ふ所は、其小學教員の、就職年限、平均の數なり。決して、一人をさしたるにあらず。平均、數、廿々、年ならば、格別短くも、覺えぬを、斯くても、なほ、其職に、就くこと、短くして、其経験を、積むに、難しと、説けり。彼國に於ける、教員獎勵の方法に、熱心なる、また、惟ふべきなり。

生徒が父母等は教育を重んじ、又學校塾舎生涯をも心得居て其教へを信じ、道を尊ぶとの淺からざる代りに我れの如く善きにも惡しきにも冷淡ならず。塾長(校長)も教員は常に其家人より種々雑多の質問を受け、褒貶の語耳に絶えずして、中には随分に無理なる注文も、不適當なる評論をも蒙ること少なからず。加ふるに是等教師が伴侶には己れが國と國とは相敵視しつゝある外邦人も、備ひ備はれて卓を同じうし、机を並べて業を競ひ、學を比べざる可らず。又内國萬國の教育會場上には、其教授方法の可否得失をも露はに論じ、公に評せらる。爰に於てか如何氣概に乏しく愛國心に欠けたる人なりとも、苟くも多少の學問を修めたる者が、何として平然高臥眠りに就きておらるべきかは。斯くの如く各種の攻具は常に彼等の身邊に圍繞して、已む無くも彼等を獎勵叱咤しつゝあるなり。又其生徒が上を如何と見るに、こも亦た一級の中にも英人あり。佛人あり。伊あり。獨あり。埃あり。露あり。故に共同相ひ和して、以て事を行ふ時にも、自から我れ、いかで他邦の人に劣らんや、ほどの激憤心は、いつも彼等が腦裡を離れざるなり。

而して其幼きより宿されたる神なる者の觀念は、終始またこの可憐無邪氣なる年少女児が、無形の精神を支配して、能く正直、眞率なる境域に導くことを得るに似たり。彼等は其教師が神なる一語の下に裁判し、訓戒せらるゝ時は、更に決して、尙ほ偽り陳ずることを得ず。(例證は、なほ後段に云ふべし)幼きよりして、妙齡に及ぶ迄、邪曲淫猥の事を見聞せしめざる、社會的道德は、また能く彼等をして、久しく天真爛漫たる無我の童心を有たしめて、其學理に技術に敏捷なる才は、存外早くより、俗事に大人ひて、且つませたる方には、傾かざるなり。掻き垂れ髪、の肩を過ぎて、長く總やかに生ひ廣ぶる迄も、猶裾短かなる衣服を穿ちて、高く笑ひ、迅く走りて、遊歩場に競争を試むる少女の、その年齢を問へば、二八を過ぎて既に嫁期に達するもあり。實に見馴れぬ眼よりすれば、これは餘りなる迄とさへに驚かすかし。斯く活潑にして、子どもらしき女生徒等が、其塾舎に寄宿する間、勿論教師、舎監等の眼を離るゝ事甚だ少なき組織上よりしても、制限せらるゝこと、多きにもせよ、思ひの外に、人の隱語、中口、惡評等の少なきことは、大いに我が女どちの中らひとは、其

趣きを異にするに少なしとせず。斯くの如く雄々しく打ちつけたる氣質は、又一方には疎暴となり。剛愎となり。強情となり。不忍耐となることを免かれず。彼等は陽に服従して、陰に不満を抱き、退きて、後言などのことを稀れなる代りに、ともすれば同盟を企て、塾長に迫り、教師に抗ふこと無しとせず。(勿論右様の時には、校塾ともに強硬手段を取り、厳しくこれを處分するを常とするよしなれども)されば、校規に背き、塾則に違ひ、又は教師の命令を用ひざる等の事ある時は、随分に嚴なる罰則に當て、これを懲らすことあり。其の參觀人のあるにも、關はらず、教師が命じて、教場外に逐はしめられたる生徒の、兩眼に一杯の涙をたゝへながら、靜かに立ちて、室外に出で、聲を呑み、厭苦を忍びて、長く往來繁き廊に直立したるさまなどを見る時は、能くぞ、其當人も、父兄も、餘りに、手酷して、不平の起らざるものよとの感無きにしもあらず。而して、其理由を問へば、たゞ、其の教師が再應制したるにも、關はらず、失笑して、替古に、身を入れざりしなりと云へり。是等は、なほ、其罰の最も輕きものたるなり。要するに、我國ならば、高等女學校に入

るべき程若しくは、師範學生の年齢許りなる女子を取り扱ふ事、恰かも尋常小學より僅かに、高等一二年許りの年少女児を取り扱ふ如く、教師が遠慮無く、教へ戒しめ、叱り懲らす事を、生徒また、無邪氣に受けて、善しとも、惡しとも、言ひ行ふに似たり。總じて、塾舎に設けたる規律は、甚だ嚴かに、且つ正しくして、出入及び、其時限も、中々に容易からぬ代りに、所謂膠柱的、杓子定木の仕組には、あらずして、其が中に、また甚だ自由で、分子を含まれつゝあるなり。いかに、其外出のむつかしき規則なるも、其母あるは、信用すべき近親の親ら來たり、又は、懇篤巨細の書狀を寄せて、塾長及び、其れに代る人に、歸宅を請ふ時、其を認めて、理りなりと思へば、其教授上に、差し支へ無き限りは、其規定の外と雖ども、これを免すに憚らざるなり。概して云へば、校内塾中の事は、長又は、其監督者に、特權ありて、其權利の中に於て、能くこれを處置し、能くこれを取り扱ふものとす。扱其幼少の頃より、物の秩序立つる事を尊び、時を惜むの習慣は、能く萬事に亘りて、手早く、簡便に、こと取りしたゝむるが故に、餘計の手續を要し、繁文褥禮餘り、複雑に、面倒なるなどの事、少なくして、總べて、

皆能く迅速に搬ぶに似たり。
 塾長及び監督者等は、日々に極めて多忙なるなり。先づ朝大抵七時半より、八時許りが程、神に祈禱を捧げて後朝飯終れば各教場の見廻り、各種書状質問などの廻答をなし、且つ、さまじくの校用塾務を取りしたため、晝食後も同様なれども、三時頃よりは、大抵生徒が親戚朋友の來たり問ふ、應接にいと間無し。(勿論所によりては、日を定めて、一週に二回若しくは三回の外は、臨時の出來事あるに非れば、面會せぬ規則の所もあり) 扱この人々が塾生に面會を請ふ時には、たゞひ其來訪者が女子なるにもせよ、先づ大概は何人か同席して、面會せしむるが多きなり。又時として、塾生を伴ひて、智徳體育上、有益なる郭外公園、書籍博物館其他各所に遊ぶことあり。夜はまた時々、教師生徒相ひ集まりて、音樂談話(外國語學等)討論演説、さまざまの娛樂の内に、煮陶を試むるなど、實に、勉めたりと云ふべし。又生徒が日課は、如何と云ふに、授業及び温習時間(温習時間も、存外に長からざるなり)の外は、戸外の遊戯運動を爲すもの多く、夜分の如き、或る特別の場合の外は、先づ大抵學に就

くこと少なく専ら、心身の衛養を勉むることを旨とせり。(尙委しくは後段に云ふべし)。

然るに、此女教師中には、一種最も、嫌惡すべく甚だ恐怖すべき、惡弊、欠點の養成せらるゝものあり。それを如何と尋ねれば、すべて、この女子教育の程度の大第に高まりもて行き、且つ、其技術も、長足の進歩を爲し、其一身の生活に困窮する所無くなりぬる者は、なまじひなる家に嫁し、心に濟まぬ夫を迎へて、己れが自由を束縛せられ、不愉快窮屈なる生活を送らんより、寧ろ、獨身にて、長閑に、此世を終らんと欲する輩の、其資性純良なる人は、さても、あらまほしかりぬべけれど、其頑なにして、且、險しき者に在りては、其學びたる所の、學文技術は、却りて、彼れが、險峻なる心をして、益險峻、悍惡ならしめ、其夫を愛し兒を慈む、普通の人情を解せざるがゆゑに、か、其性行は、知らず、薄情となり、殘酷となり、彼等が、普通の事として、懲らす所のものも、其懲さるゝ入に在りては、唯地獄の惡鬼が、呵責に似たる、思ひを爲すこと、少なしとせず。是故に、老練にして、能く事理に通曉せる、老教育家は、其有夫女教師の時ありては、種

々なる差し支への爲に引き籠りの日數多き困難あるにも關はらず、希くは其一家を爲し其夫にも事へたる人を得まほしと希望すと云はれたる、また味はひある言なるべし。總じて是國のたどひ陽べになりとも男子が女子を鄭重に取り扱ふ習慣風俗はまた陰に是等我儘勝ちなる獨立女子の性行をして、益峻險の岐路に導かしめたるが如き理りもやあるらん。一利に伴ふ所の一害能く鑑むべき事なりかし。

寄宿舎中他よりの來狀は縱令父母同胞よりするものと雖ども塾長又は教師の開封して一見せし後ならでは生徒に渡すこと無く又生徒より其親戚朋友に通信するものも亦た必ず點檢濟みの上送ることなり。されは其書狀の文句書方等に就きて此の通信には斯く認むるものぞ。斯うくの事は斯く記すべきものにあらざなど教師は能く其實地に就きて叮嚀親切に教訓添削するを常とす。さて郵書を出さんとする者は一定の時間に一定の箇所に差し出だし置く事にてこの時間に後る時は其翌日迄は非常の出來事ありて監督者の許可を得たる時の外は臨時に出だすこと能はず。

其需用品購求の規則も大抵大同小異なり(大學生は右等の範圍外なり。こは又別に云ふべし)總べて何科によらず勉めて實利實益に近づけんと勉むること切なり。先づ其一二を云へば來幾日は開校紀念日に當り當夜何々の餘興を演ずべし。此費用何許にして生徒一人の負擔幾ばくなるかの如き算術の問題に應じて能く適切に綿密に且つ迅速に見積り豫算して出だしたる時は往々其意見を採用し且つ褒賞を與ふる等の事もあり。又運動に郊外に出づれば我等が塾より其所迄は幾ばくの距離なりしか都の中央より何れの方角にあたるか歩行にては幾時間涼車にては如何馬車にては如何なども翌日の地理數學の問題に登るは普通の事にて殊更に取り出でし云ふべきにもあらず。なほ圖書を學び刺繡を習ふ者は其儘かに兎やら角やら其形を寫し其運針を覺え得たるものは畫なれば直ちに鹿末なる素焼きの器に畫きこれに一種の樂をも自ら懸けて父母祖父母親友などに贈り又自分が用具ともなすなり。刺繡の如き編物の如きも極めて拙劣なる爲習ひの程より先づ實用に供する物を作らしむるなり。(委しくは後

段に云ふべし。されば音楽の如きも唱歌の一つ洋琴の一手習ひ覺ゆれば、忽ち來客の時宴會の折に公衆の前にて誦ひ奏づるを常とす。其外國語學などに於るも佛語を學ぶ者は忽ち佛人の參觀者、獨語を修むる者は獨人の訪問者の前に教師に伴なはれて出づる事にて猶片なりなる語を以て怯めず憶せず之に應答するの習慣は早くより着くるものとせるが故に一藝を學び一術を習ふものは從ひて修め從ひてこれを實地に復習するやうの爲くせとなり居れり。勿論校塾等を參觀訪問する人も皆其冗なる時間を徒らに費やす習慣なければ其應對の挨拶談話も僅々小時間に於て終り大抵其遊戯放課時間を以て之に充つ。又運動場に於ける遊戯の如きは參觀者も其父母等時々立ち交りて、テニス等の競争に加はるも珍らしからぬ事なり。概していへば極めて窮屈に最も嚴重に規則立ちたる中に又一種打ち寛ろきたる所ありて教師も生徒も參觀人もなるべく相ひ共同歡樂して知らず、斯道に進ましめんと勉むるものゝ如し。

塾生の總べてが待ちに待つ所のものは春夏冬三期の休業日なりけり。否

其年少生徒がいつしかと待ち渡るのみならず、半白の年長者教師等も殊に休業日數の長き夏期休業を、こよ無き樂しみと爲しつゝあるは孰れの國も同じさまにぞ有るべき。休業の日數の長短も其國と其學校塾舎とによりてまた多少の異同あり。縱令は熱帶の國に夏期休業時日を長くし寒帯の國に冬期休業を長くするが如き變更あれども概して云へば最長を夏期休業とし、春期冬期は大差なし。さて其夏期も大學は大抵滿二ヶ月餘、中小學は四十日より五十日の間、希れには卅日間のものあり、春期は二週間一週間の所もあれど冬期は十日間内外なり、十二月クリスマスの前日よりして一月三日迄なるが多けれども中には一月は一日のみに止めて、二日より授業する所もあり。夏期休業中は塾によりては、悉皆の生徒を歸省せしめて決して滞留せしめざるもあり、又は其望みに任するもあれども、格別遠國より來り學ぶが如き者の外は先づ其止宿を希ふ人少なし。但し時としては塾長、教頭等の誘引によりて塾生もともに旅行を試むる事無きにしめあらず。總じて泰西人の旅行好きなるは男も女も老人も子供もみな大旨同一にし

て、且つ、轉地及び新鮮の空氣を呼吸することの、精神上、身体上に大いなる裨益ありて、衛生説の次第に其度を高むると同時に、彼等が嗜好は、恰かも、得手に帆を揚げたるが如く、秋期、學年の始めに於て、顔の日焼けして、赤報色に染まらぬ人は、何と無く、肩幅狭きやうの感有るもをかし。先づ、長き休暇の日數終へて、寄宿舎に、戻りたる生徒等が、其遊歩場に、休憩所に、打ち集ひつゝ、互みに、一別以來の物語りを爲す時、御身は、此夏は、那邊に遊びたまひしか、何れの國に渡り玉ひしか、甲の君は、伊太利に、乙の主は、佛蘭西にとや。あな、羨まし。己れは、唯僅かに、某々の海濱に、など云ひて、其最も、遠方に、旅せし人の誇りかなる、其近傍に、止まりし人の、羨ましげなるも、理り、しばし、外國に旅行する程の人は、必ず、其財産も、饒かならざる可らず。果して、又知らぬ境珍らしき所に、漫遊すれば、せし程の利益は、之ありしなるべし。斯かる風俗人情に、しあれば、其教師たる者の、爪くはへて、生徒が、珍談佳話を、聞きて、あらるべきにも、あらねば、無理わざしても、なるべく、遠隔の地に、旅せんと、勉むるなりとぞ。(そが中にある、極めて、赤貧なる某教師の、わが、往昔の、能因法師を學

びて、夏期休業中、なほ、府中の、狭き下宿屋の二階に、籠り居つゝ、頻りに、地理を研究し、己れ、外國の旅行を、せしさまを、粧ひたりつるが、恰かも、其年、其所に、生じたりつる、出来事を、知らず、年少の生徒に、そが、偽りを、見顯はされたりとかいふ、可笑しき、咄もある程なるに、なほ、其旅行熱強きを知るべし。凡そ、此夏期休業は、もと、炎熱の候にあひては、心身ともに、ゆるびて、且つ、疲勞する時節なるからに、人々が、務め、勞づく職をも、休みて、専ら、精神と、身体とを、加養するが、目的なるべし。然るに、余等が、如き、盛夏には、随分に、暑さに、喘ぎながら、はしたる國よりして、渡り至りける、英佛の京などにては、夏の程の、涼しさは、恰かも、わが六月の、始めつかた、或は九月の、未方許りの、氣候、其、御ま暑し堪へがたし、斯くては、一日も、早く、わが業爲卒へて、山の麓、海の邊りに、鮮らけき、空氣吸はでは、など、さゝいめき、合ふを、聞けば、げに、人は、習慣がらによりて、なりけりと、を、かしく、さへに、覺ゆかし。これに、反して、嚴冬の、真中には、倫助あたりにては、寒暖計、零度以下を示す時、さへ、屢々ありて、暖爐の前につと、寄り添ひ居つゝ、炭さしく、べくして、だに、尙ほ、後背より、冷水、漲ぎかけらるゝやう

なる朝などこそ却りては斯くて、日一日を過すよしもがなとのみ希はる
 るとなるが、さても寒さに堪ふべく作りなしたる外套は、打ち破るからに身
 の内最と暖たかくなりて、且つは靴して、早足に踏みならし行く、敷石の大
 さす方に至り着く程には、左許り寒しとも感ぜずなりぬかし。さても、斯か
 る寒威は、火の力にても防がば、防がれぬべきを、此嚴冬の間、他邦人の身には、
 最も、佗しく、物心細く覺ゆるは、倫敦府中の黒霧なりき。さらでだに、午後四
 時に至れば、暑は、早く暮れを急ぎて、暗黒の世界となるを常とすなるを、此霧
 深き所にては、晝もなほ、夜中の如く、瓦斯電氣の火ともして、業授くる日も珍
 らしからざるとなり。見知らぬ者の眼より見れば、夏季はさても有りなん、
 この惱鬱き冬三月をこそは、長き休業時ともなさま、欲しき心地こそすれど、
 云ひたりしに、否とよ、斯く見る物聞く物につけて、一つも心を奪ふこと無き、
 此都府の光景造化の神は、彼等に恵みせざるにあらざして、却りて、これに幸
 ひすること深きなりけり。何となれば、一年十二月の中、それが半ばは、萬般の
 事に心を散らすよしも無き土地柄、それが住民の如何にしてか、己が勞く業に、

身を碎き、思ひを凝らして、勉め勵み、此暗き夜も、金の光りに真晝となし、或は、
 斯う、埋れいたき境をも離れて、風清く、氣晴らかなる所に、歡樂を買はんとこ
 そ、勉めなすめれ。前條にも云へるが如く、彼等が能く務め、能く遊ぶことも、
 亦た、天然の催促によりて、かたへは、斯かる習俗にもなり、けんをど、云はれ
 たる、げに、さる事も、ぞありぬべき。さて、以上述べたるが如く、夏期休業中は、
 殊に、其日數の短か、らぬが故に、それが、經濟の許す限り、教師も、生徒も、己がじ
 し、心々に、散り退出て、旅路に登るが多けれど、中には、其生計も、充分ならず
 して、學藝も、なるべく、速成を欲し、一日も早く、將來安堵の道をも、立て定めん
 ど、欲する輩は、手藝の如き、其餘りに、腦髓を費やさでも、よき科業を、此休眼中
 に、務むるもあり。又は、伊太利の如き、酷暑の國よりしては、此間涼しき都府
 に、移ろひ住みて、或る一術を、修めんとするも、無しとせず。されば、教師等も、
 亦た、夏期の内職として、此程の人々を、授業せんとて、殊更に、都に残り止ま
 るもあり。千差萬別、極めて、嚴重に、規則立ちたるが如き、教育社會中にも、亦
 た、種々、さまざまの、方針を取り、方法を、設くるものあれど、何事に、付けても、人

は人、我れは我れとすまして、世間姑母の口器ましからざる、これぞ自由主義を尊ぶ國柄に在りて、然る故か。將た敵國と相ひ睨むことの隙無きが故か。兎まれ。内地に在りての感とは、百般の上、いと思ひよらぬ事のみこそ多けれ。

學校にまれ。寄宿舎にまれ。最も慎重に極めて嚴肅を守りて、教師も生徒も亦た其父兄も、諸心に勞き勉め、悦びて、其が費用を投ずるものは、神祭の事これなりとす。(佛伊の如き、加教が非常なる弊害にあひ、絶体的之れを挽めんと欲し、それが反對の針路を取りつゝある政府に於ても、其宗教學校に於て、なしつゝある神祭の事は、なるべく、默許に歸するは勿論、小學の如きは寧ろ、宗教てふ修身の道具は、暗に利用しつゝあるに似たり。)先づ朝夕兩度の祈禱は、そが中には最早、眞に、一つの儀式即ち、告朔の餼羊に似たるものゝあるにもせよ。兎まれ、あらゆる人の、皆協心に肅然として、默禱し、そが國君の壽を捧ぐるが如き、甚だ、好き習慣とこそ覺ゆれ。げに禪定に坐すれば、心自から禪定なり。其經典の語を謹讀して、其過ち勿からんことを希ふ程知らぬ

我れさへ、何と無く、心改まり、形ちの正さるゝ心地して、いと清やかに覺えぬかし。就中、クリスマス、加教のノエルの大祭日前に至れば、思ひく、そが贈り物の意匠を凝らし、且つ、女生徒などに在りては、其近親の人、教師、親友などには、なるべく、自からが製作品を參らせんと、競ふ事にて、繪畫にまれ、刺繡にまれ、其他、百般の物を習ひ營むに、知らずく、一つの獎勵法となりたるが如し。

塾舎の構造、少しく、其規則立ちたる所にては、講堂あり。溫習室あり。書籍器械室等あり。而して、寢室は、大抵廣間の兩側、又は三列にも四列にも、寢臺を並べ、帳は、其洗手臺共に引き廻らし、覆はるゝやうに爲なして、各自朝起きて、衣裳を整へ、終ふる迄は、此帳を引き置き、終れば、絞りて、何もく、一目、能く見ゆるやうにしなしたるが多し。斯くて、其左右兩端には、舍監二人、又はこれに代るべき女教師の寢臺ありて、塾生と寢を共にするなり。(極めて廣き室には、監督者三人も四人もの寢臺あり。)又は、顔洗ふ所別に設けて、寢室には、寢臺、衣服棚のみなるもあり。或は、衣服棚の別室に設けたるもあれども、

兎にも角にも衣服及び襯衣、帽、手袋、靴等、一切のものは各の姓名を記したる棚又は器に入れられ洗ひたる物、洗はざるもの、區別より置き場置きかたは勿論、其褶み方、大きさ、造り、一定の規則あり。衣服は制服なるも、然らざるもあれども、多人數を入るべき塾舎に於ては、大抵制服なるが故に塾生は、一般質素にして最も清潔なるを尊べり。浴みは、大抵一週間に一度なるが多し。食堂は、一卓毎に必ず教員又は監督者の席あり。常に生徒と食を共にす。此間時々外國語を交へ用ひて、語學實踐の習古に充つ。食物は普通先づ朝飯は、其米に在りては、紅茶或ひは珈琲に牛乳、麵包と牛酪及び魚、鶏卵、冷肉、鹽肉等の如き物一種他大陸諸國は、朝は肉類を食せぬ代りに、チョコレト等の飲物あり。晝は肉と野菜と二皿許り、晚餐には尙此上に肉汁を加ふるのみの所もあり。又は尙今一皿の肉類を供ふるもあり。總じて調理も手輕にて、且つ質素なれども、衛生には充分に注意せるもの、如し。(或る宗教學校等の特別なるものを除くの外は、尙午後四時より五時の間に於て、茶を喫す。點心は、バター塗りたる麵包の薄片、ビスケットの類なり。授業料、

食料塾費等は國により所により、且つ、其校塾の種類又は學科の高下等によりて、一樣ならずと雖ども、一ヶ月總計英京倫敦にては、十磅内外、佛京巴里にては、二百二三十フラン内外なるを普通とす。然れども、獨逸其他の國に在りては、これより少しくや、廉なり。勿論此内には、夏冬二季に用ふる制服を算入せるなり。(其表着のみ)前條にも云へるが如く、塾生の衣服は、其制服と否とに關はらず、極めて質素、單白なるものにして、且つ、其制服の如きは、大抵襟と袖口とに、別の布片を附し、多くは、男子のシャツの如き、強く糊したるものを用ふ。屐々取り換へて洗はるゝやうにし、襯衣、鞆、手巾等、一切の物は、一ダース許りを供へ置き、日を定めて洗濯に出だすことなるが、大抵一週間に一度此間、其膚に觸るゝ所の者は、少なくとも、二日目三日目か程には取り換へて、其汚れたるは、皆一つの大きな袋の中に入れ、口をメめて、我が名を附したる戸棚の内に入れ置き、之れを出だす日には、其品物は、數と、月日と、姓名とを一々、紙片に書きつけて、小使の女に渡し、洗濯屋の洗ひて持参したる時は、始めの書附を添へて返すを以て、小使は、又、叮嚀にこれを改め、更に持主をし

一六八
て、檢見せしめ、定日に於て、代價の支拂ひを爲すなり。(總じて、彼國に在りては、大抵如斯、何事も、嚴重に取りしたゝむるを常とすなれば、物の紛失する等の事、極めて少なきなり。)先きにも述べたる如く、男女ともに、中學迄の生徒が、取締りは甚だ厳しきものにて、ある寄宿舎に於ては、就寝後は必ず其寢室に錠を下ろし、夜中一二回の見廻り人の外は、翌朝迄絶えて、其戶外に出づるを許さざるが如きもありと聞けども、余が親しく參觀せし所は、すべて前條に述ぶるが如きものなりき。

女子の教育概畧

余は、今女子の風俗をいへんと欲して、勢ひ先づ少しく女子教育のことを云はざる可らざるに至りたれば、爰に此一項を挿入して、次に女子の風俗を云ふべし。

女子教育の一項に於るは、前條女塾のありさまの所に畧記し、且つ其範圍中なる文學技藝等も、其序に少しく云ひ置きつる事もあり。されば極めて其概畧を摘みて、一わたり爰に掲げんとはすなりけり。さるからに、ある事柄によりては、或ひは前號と重複せるが如きものもあるべきを、讀者幸ひに宥恕せられよかし。

泰西女子教育の發達は、實に十八世紀の終りに於て、勃興し、現世紀に至りて益隆盛の氣運に向ひ、屢々乎として、日々に其歩を進むるものなりと云へり。凡そ物を製造するは、其需用の漸々多きを加ふるに從ひて、其製造の數を増すが習ひなめるを、ひとり今の女子教育のありさまは、これと異なり、女子の

教育(文學、技藝等)

自から進みて次第に高尚の學を修め、又且つ種々の専門にも別れ入る者の、
多くなりて行くまゝに、さらば此事も女子に任かせて見ん、彼の事も委ね
試みてんとて爲しつるが、存外に其結果の宜しかりしより、さらば彼れも斯
くせん、是れも鬼せんと計りなす事になりたりと云ふ人あり。左もやあ
らん。然るを、北米合衆國の如きは、此機に乗じて女子も男子と同じく學べ
ば爲すを得行へば遂ぐるを得。何んぞ、男女の職責を限りて、御身等に其範
圍を畫らるゝことあるべきかとの女子が意氣込餘りに強く成り増りて、其
風潮は、歐洲大陸にも次第に漲り進り、其勢力容易に侮り難きに至れり。斯
くては、男女兩性と區別して生れたるも甲斐なし。猶女子は、女子の天職に
よりて、其れ相應の物を學ぶに止めまほしとの説には、男子の随分に力を入
るゝのみならず、保守主義の女子は、大概これに左袒して、其方針を取りつゝ
あり。されば、彼等が主義の仲間々々に、一郭をなしつゝ、互みに負けじ劣ら
じと競争しつゝ進歩するの現象、就れも、一利一害ありて、容易に一方の攻口
のみに勝を制せらるべしとも見えぬと、げに世の中の事は、不思議にも、危険

の業珍奇の事其餘りに、正確着實ならぬ、輕跳のしさまの、また存外に行はる
し者にて、有徳有望なる識者が、確乎たる議論の障壁をも押し破りて、彼の女
學を益々高尚ならしむべき説と、男女同權論とは、其實女尊男卑論相ひ待ち
て、彌々進行の度を高むるに似たり。(勿論女學を高尚にするの論は、無下に
悪しといふにはあらず。寧ろ賞揚すべきことたるべきなれども、其名によ
りて、其實甚だ有害なる企てを爲す者もあり。)

前條にも、風々云へるが如く、歐米各國の文明は總べて盡く、宗教其ものより
生れそめしものたる事は、何人も既に了知する所にして、而して、其徳育の基
礎は、無論宗教的、即ち神の信仰心を堅うし、靈魂の不滅を説き、勉めて、人間毀
譽名利の外に超然として、能く正義に従ひ、正道を蹈み、各自其義務を盡し、其
資格を保ち、又且博愛慈惠の念を養ふことを以て、教への基礎としたるもの
にして、勿論、佛伊は、ことに羅馬教の弊害に懲り、且つ羅馬法王の專横を歴へ
んとしたる等、種々の事情よりして、今現に政府が取る所の徳育の方針は、宗
教以外別に一種のものを組織せんとし、哲學、神學等の中を、採萃して、生徒に

授くることゝしたり於ての學校に。然れども其結果未だ充分ならざるが故に今尙當局者は頻りに是等に就きて苦慮考究しつゝあるなり。最も伊に於ては哲學主義なる德育は小學以上の學校にのみ用ふることゝして、小學校には猶依然宗教主義を用ひ、各教場毎に伊國皇帝の寫眞と基督の像とを掲げたるを見たり而して其導く所は愛國の精神なり。國民的元氣なり。故に就これの國に在りても其小學教科書の如きは如何なる學科に於るも皆な敬神と愛國との觀念を宿すべき事柄と文字とを以て充たされたるものにして教師が教場にて生徒に教ふる時も其國民の振はざる可らざる所或ひは其敵國の爲に敗を取りたる事の如きは戦争にまれ談判にまれ又は商法にまれこれを講ずるに當りては氣昂り、語激し、覺えず手を擧げて卓を打つもの屢々なりき。是時に於て平生徒も亦其參觀人の側らに立てることをも忘れたるが如く甚だしきは歎歎流涕して答ふること能はざるに至る者ありき。是等は更に珍らしき事に非ずと雖ども余が見たるものゝ内其最も甚しかりしは、

某女學校に於て某女教師の男兒に歴史科を教授したる時なりき。余は其授業終りたる後試みに其女師に問ふに餘りに幼少の頃よりして慷慨悲憤の觀念を與ふるは其健康上よりも精神上よりも或ひは過度にして不可なること無からんかといひしに彼女答へて否々愛國の精神は其最も幼稚の時より養ふを可とす。而して斯の如き學科のあとには必ず音樂とか体操とかの如きものを科し其談笑嬉戯の間に於て能く其最も感情強き者に就きては懇篤に之を慰諭し之を教訓しさて其慷慨の氣をして決して疎暴の舉動あらしめざらんことを教ふることは女師に於て其最も適當なるを見ると答へたりしかば余は更に彼女に向ひてわが武家教育の最も之れに相ひ似たることありしを談りたりしに彼は甚だ得意の色ありき。げに次の教場即ち体操科に於て彼等は更に沈鬱せる狀無く活潑なる運動を爲しつゝありしを見たり。

而して幼稚園小學校等に於て最も嚴に訓誡する所の者は嘘言と後言とにして之を恐れしむるに神の冥々に見聞する事を以てし其教場に在りての

舉止長者に對する禮節の如きは之を誠むる實に甚だ嚴格なり。故に少年男女の學校家塾に入りて見る時は自由國なる名は那の邊に在りて存するか。わが師弟の禮の薄くなりたるは抑も何れより習ひたるかと驚かるとなり。然れ共其遊戯に其運動に教師生徒等相集りて團樂嬉戲するの狀は亦決して我れに見る可らざる圓滿の情快樂の感あり。是れ畢竟其社會と家庭との制裁習慣より來たること多きに居るなるべしと雖も亦教師其人の温嚴宜しきを得る者極めて小なからざるにも依れるなるべし。要するに歐米各國が其德育の基礎に於て定むる所のものは敬神と其國毎に多少の厚薄小異はあるにもせよ愛國との二者にして歸する所はセルフ即ち己れなるもののみ。即ち其己れを重んじ己れを尊び之を愛し己れを信するの情厚きもの相ひ集合して自立の精神を固うし箇々の福利を増し人々の資格を高うし率きて社會に及ぼし擴めて全國に達したるものなるべし。此點其教へのよりて起る所大いに東洋と異なる所あるを見る。而して其社會一般の改良進歩を助長して以て今日に至らしめたるものは單へに女

子教育發達の結果亦興りて力ありと云はまく而已。

歐米各學校學科程度其方針並に課目の概略に就きて之を列記せんとせしに其方針も其國により所により又其學校によりて異ならざるを得ず。殊に學科課目と程度との如きは其專門教育家の參考として記さんにも或必要の事件の起りたる時の外は逐一之を讀むの煩はしく且其益の少なからんことを恐れ詳細は携へ歸りたる各學校の規則書に就きて見るを得べければ暫らく是等は別記して他日更に翻譯掲載することとせん。爰には先づ其學校を大別し其れに就きてなるべく簡略に記述せんとするものなり。而して今現に行はれつゝある歐米の國民的教育の主旨は勉めて其實利實益を計り其學理と實際と相抵觸齟齬すること無からしめんと欲すること切なるが故に其政府が大體に於る教育令及び其教師が學生に對する獎勵法及び其就學者に科する罪罰等の法規の如きものこそ各府各縣至る所殆ど同一に行はると雖も其學校の規則學科課目及び其程度の如きは實に其係官教師等が實地に考究制定する所に一任するものゝ如く其風俗

に熟知せざる他邦人の目を以て之を通覽する時は甲の邑乙の郷僅々數里の隔たりに於るも猶其校規學則の區々別々なる大いに其不規則を怪むが如き感ありと雖も顧みて子細に當局者が苦心と注意とを聞き再び其實況に就きて之を熟察すれば其不規則に似たる其不躰裁に類せるもの却て其教育の實際に裨益あるべきを歎賞せずんばあらざるなり。(然るに伊國に於ては公立學校を巡視せしに羅馬府中に於る小學は四校巡視せしに於て大抵皆其規律畫一せるもの如く教師が一號令のもとに於て進退する生徒が執禮の如きは却て英佛等の公立小學に勝るかの感ありしかども其衣裳の清潔ならざる又其食物の衛養に適せざるかの疑ひに至ては實に前の二者に比して甚だ劣れるものあるを知るべく且其二三父兄に就きて聞く所は大いに其程度方法の實際に伴はざるの歎あるが如し。是れ伊國政府が目下財政の整理上より又且羅馬法教の權を壓へたること等より尙百般の改良に着手しつゝあるが爲に其變動の時期已む無くも教育上に幾多の影響を及ぼしたるものなるにもせよ。兎にも角にも實際問題を先にして外面

大學

の修飾を後にするの利益は英國に於て最も他國よりも長じたるを證すべきに似たり。
大學 何れの國に於ても大學の目的は學理の蘊奥を研究し且其學術上の分限を公認する所なれ共英國ケンブリッジ、オックスホルド大學の目的は一種特別にして學術に非ず教育なり。英國紳士の資格を保つべき爲に組織したるものにして其學術の如きは獨逸等と比ぶれば之に劣れるもの少なからずとぞ。蓋し學理を研究することに於てその進歩著しきは獨國にして學生の品格の高きは英國を以て優れりといへり。凡そ女子にして大學に入るもの其他日高等教育を授くべき教員たらんと欲する者あり(ケムブリッジ、オックスホルド、兩大學の女子卒業生は其の分科を卒へたる上に尙一年若くは二年教育學を修め女教師實地練習所に於て自ら兒童を教授し又は當所の女子中學校等に於て女子を教授するものとす)或ひは又女醫となり著述者となり新聞雜誌記者たらんと志す者あり。而して卒業後直ちに嫁娶するものもありといへり。(大學々科は數學、醫學、文學等多し

とぞ。尙退學後の結果の所にいふべし。
 中學は大抵普通學科を修めて後其希望の學科を専門に就きて修むるを以て目的とするものにて他日大學に入るの豫備校の如きものなれ共其のコーレージは、やゝ其趣きを異にし大抵學生は此コーレージに止宿し勉學し而してたい大學に通ひて講義を聴き且其試験を受くるものとす。しかしてわれの所謂中學の如きものは彼れのハイスクールと稱するものにしてわが高等女學校の如き組織なり。故に小學全科卒業の後に入るべきものと其初學教育滿四十年を終へたる程の學力のものを入るゝものとあり。又は、小學校の上に今三四年を課すべき高等科を置きたるもの多し。(これは直ちに中學とは號く可らざるも。)

小學は云ふ迄も無く普通學を授くる所のものにして即ち國民教育の基礎を固むるに於て最も必要の所たれば孰れの國に於ても殊に深く其普及と進歩とを計り其目的は幼兒の精神を強固にし愛國の元氣を養成し兼て實理實用に必須なる卑近の學藝を修めしむるに在り。且つ男兒と女兒と

は全く別々にしたる所も或は混同せるも在るなり。
 師範學校は其教師となりて子女を教育訓導する爲に設けたるものにして理論と實驗との二者を習熟訓練するものとす。而して女子の入學者は漸次其數を加ふるなるが就中北米合衆國の如きは女教師の結果男子よりも却りて宜しとの事にて女子の(前條にも述べたる如く)師範學校に入りて教員たらんと希ふもの年一年よりは増加し當局者も亦大いに其目的を達せんとするに熱心盡力せりといふ。

幼稚園の必要は社會の次第に多忙なるに従ひて人々之を感ずること甚だしく孰れの國にても目下漸次隆盛に趣けり。其目的は極めて幼稚なる小兒の未だ學齡に達せざるものを取りて之に適宜なる遊戯運動を爲さしめ保姆は彼等が母に代りて之を撫育し其知らずの間に智徳の觀念を宿し身軀の發育を充分ならしめんと勉むるものなり。幼稚園は中等以下の人即ち其兒の爲に保姆家庭女教師を備ふこと能はざる者及び又殊に其母の多忙なる職業に預かる人の爲には最も大いに便宜を與ふるものといふ

へし。(余が參觀せし英女皇の女なる、獨逸先帝の后が補助のもとに設立されたる英京ロックベルコレイヂ中の幼稚園は、殊に其教法組織宜しきを得て、生徒が活潑愉快なる遊戯の間に各種の學科を習ひて、毫も其身軀に故障無きを見たり。)

學科課程

此他、専門學校は大抵、其専門の名に於て其目的を知るを得べく、其特色あるものを爰に掲げんとするも、極めて繁雜の嫌ひ無きにあらねば、暫く先づ筆を止めて、學科程度課程の大畧をいへんとす。
學科課程は、孰れの國如何なる學校に於ても、其初學に在りては、讀書算術を以て、必習科とし、之に亞ぐものは、圖畫習字、裁縫にして、(裁縫は勿論女子にのみ)やゝ進みては、地理なり、歴史なり、また之れに亞ぐは、博物、理化、數學、音樂、外國語及び洗濯、勿論洗濯は女子のみ、又料理を科する所もあり、漸次高等の學科に及ぼし、又は専門の技藝學術に移るものとす。而して、蘇邦女子小學校の如きは、普通科に手工を置きて、此中には木工の初歩、即ち鉋の使ひ方、釘の止め方等、又紙工には、書籍の綴ぢ方、紙の合せ貼り方等をも、教ふるを見

學科程度

たり。又女子職工學校に於て、大抵、重に授くる所のものは、裁縫、刺繡、レース、編物造花、或ひは、製帽、料理、洗濯、圖畫、泥工、速記法及び電信、電話術等、(圖畫より以下は、男子もにして、獨逸の女子職工學校に於ては、寫眞術をも教ふるを見たり。而して、其國土風俗により、其最も必要なるものを課して、其實用に適切ならぬものを省くこと、何れも大同小異の方法を以て、實行しつゝあるなり。
學科程度の女子が學べるものに於て、最も高く、且廣きは、北米合衆國にして、次は、英、獨、佛、勿論、目下、女子が高等なる學科を修する者の多數なるは、英なり、次は、瑞、白、伊、次は、澳にして、米國、英領、加、奈、太、は、英、佛、及、合、衆、國、と、三、國、の、風、混、合、せる、が、故、に、詳、か、に、其、程、度、を、區、分、論、定、し、難、し、と、雖、も、其、多、年、女、子、教、育、に、從、事、せる、人、の、言、に、よ、れば、猶、母、國、英、の、本、部、に、は、及、ば、ざ、る、こ、と、遠、し、と、雖、も、漸、々、隆、盛、に、趣、く、の、傾、き、な、り、と、ぞ。兎、に、も、角、に、も、女、子、教、育、の、度、は、歐、米、各、國、と、も、に、疑、ひ、も、無、く、日、に、月、に、高、ま、り、つゝ、あ、る、の、證、は、實、に、全、く、顯、著、な、り、と、い、へ、り。其學科の程度を餘りに高からしめざるの説、多數を占めたる、澳京の如

きも、亦女子が大學に入るを許して、亦之を望む者、年々其數を増すを見ても知らるべし。

男女生徒が就學の年限は其國によりて、小異あり。其重なる所のものを舉れば、英は滿五歳より始まりて、但し五六歳迄は大抵幼稚園に於てし、七歳より小學に入る、十四歳に終り、佛獨は六歳より十四歳迄とす。其他各國の學齡、獨佛に准じたるが多しと雖も、澳の如き、或る地方に於ては、七歳より十四歳迄なる、又は六歳より十二歳迄なる等もあり。而して、大抵、尙其小學に入りてより、滿四年間は、わが尋常小學義務學齡として、其規定に従はざる父母には、相當の罰則あり。目下、大半、強硬的獎勵法を以て、普通教育の普及を計ること急なり。伊國の如き、現今、政府が財政の整理上より、各般の改革に着手しつゝある時とて、義務學齡兒童が、男女を通じて、就學を促すこと甚だ嚴なりと聞きぬ。女子が、普通學齡の終りたる後、其適宜、高等學科及び其専門に就きて、學ぶ者の最も多數なるは、(さきにもいへるが如く)北米合衆國にして、次を英國とす。故に、其年齡の如きも、之に准じて、多きを加ふるを常とす。

れ共、概して言へば、其就學年間の長きは、何方に在りても、大抵中等社會なるが如し。蓋し、上流社會は、中等に比して、嫁娶の期早く、下等は、各自生活の爲なるべく、速に其職業に就かんことを勉むるが故なり。

學資は、公私立共に、通例其父母及び之に代る人より納むるを常とすれ共、或る場合により、或る人によりては、公立學校には、官費、貸費の二種ありて、之を生徒に給與することあり。私立に於けるも、之に准ずる方法を行へるもあり。又、貧賤なる人には、政府より、特に無月謝にて、就學せしめ、委しくは、他日貧民教育の所に云はんとすれば、省きつゝ、私立にても、亦同じ方法を以て、無報酬にして、貧兒を教ふる所少からず。寺院學校に於ても、最も是等の慈善教育を行ふ者多しとす。さて、其學資、即ち、授業料は、普通學(初等)の學科は、大抵、一様の定額なれ共、其他は、往々、各校、皆區々にして、其學科の最も費用を要するものは、殊に、其授業料額を多くせり。試験料の如き、英國、オ、兩大學を始として、法學院等は、數十磅より、百四十磅許の高額を納むることにて、此外、高等學科に在りては、大半、試験料を徴收するものとす。而して、其就學中要する

所の資は、筆墨紙書籍及び教具用一切にして、寄宿生は更に食料塾費及び衣服(大抵塾生は一定の制服を用ふるを常とす)等なりとす。(學資金額の事は、すでに女塾のありさまの所に、ほゞ掲げれば省きつ)斯くて、其父母が學費を拂ふに、不充分なるが如き家の子女は、なるべく、其學校の教員助手となり、又は書記、其他の事に従ひて、ちどの報酬を得、かたはら己が勉強をもなし得る等の方法組織にしたる所もあるなり。

歐米諸國の、体育を重んずることは、今更云ふ迄も無き事ながら、就中英の如きは、之に力を用ふることも、最も甚しく、女子の如きも、体操科の成績悪きは、德育の欠點と殆ど同様の感をもて、自らも恥ぢ、人をも排斥する迄に至れり。

歐米に行はるゝ所の、体操方法を大別して、其緩嚴をいはい、先づ三個に分たるべし。一、純然たるヂムナスチックの正式に従ふ者及び男子の兵式体操に類似のもの、二、ヂムナスチックに舞踏の手を交へたる者、三、遊戯に屬して、筋肉の發達に注意し、四肢の働きを適度ならしむるもの等なり。而して、其蘇邦女學校に旨と用ふる所のものは、第一に掲げたる者にして、其体操科に着用

する、女子の服装も、一見男子と紛るべく、其技術の兵式に類似せる其動作の活潑にして、其膂力強健なる、歐米巡廻中實に多く見ざる所なりき、(蘇人の体格男女共に最も著しく立派なるは、即ち体育獎勵の結果なりと云へり)此種の体操を、スエヂシニ様と稱すれ共、其本國なる瑞の体操は、却て斯の如き、男子らしき程度に至らざるに似たり。(余は校長に向ひて、其女子に課するに、餘りに男子に類して、少く過度ならずや。其衛生上却て不可なるなからん乎と問ひたりしに、彼女答へて、否決して然らず、是れ即ち蘇邦の特色にして、女子が身、強健、精神、活潑なる、わが大英國に冠たる所以なりと語れりき)且運動時間の遊戯にも、女子の、クリケットを盛に爲すを見たり。(此遊戯は、壯年の男子にしても、中々に膂力を要するものなりと聞けり)獨逸の女學校に行はるゝ所のものは、重に其第二の方法なり。而して、英京、倫動にも、同様の流儀次第に流行し、もて行くところ、余が參觀せし、英京女子体操學校の如き、即ち是なり。其他佛の如き、澳白の如きも、専ら此種の体操法を採用するもの多く、米の如きは、第一、第二者を合せ用ひて、殊に、遠足、他行を悦ぶといへ

り。其第三者は、歐米孰れの國に於ても、幼稚の生徒が、体育に用ひつゝある所のものなり。總て彼國の女子が、骨格の逞げなる、其肌膚の肥滿せる、其色澤の麗しきも、皆其体育を勉めたる結果にして、前條にも云へるが如く、終に大抵男子と共に、遠洋を航海し、蕃地に移住して、毫も恐れ撓む所無きに至れり。

眞美即ち心の美は、赫德智の三育とも包含して、離る可からざるものにして、其犯すべからざる尊嚴の威、其親み懐く可き温和の徳氣、高き品格風姿は、愈心美の外に顯るゝものなり。まかして、これを裝飾する所の、衣裝の色取り形の配合より、言語動作の美の如きも、亦皆美育なる教によりて、附け加へらるゝものなるが故に、彼等は、古代より有名なる美術家が、工夫と妙技とに成れる、繪畫彫刻、泥工、刺繡より、陶器、石工、各種の物を集めて、其參考とし、其練習と、意匠とを進めて、以て心の美と形の美とを整へんと勉むるから、今に赫德智の三つの外に、更に美育なるものをも加へ稱ふるに至り、之を獎勵せし結果、近來各種の美術上にも、大なる進歩を見るに至れり。而して、天然の

佳景が能く、人間の美術意匠を助くることは、今更云ふ迄も無きことにて、即ち歐洲中、最も山水明美なりといふ、瑞西を過らざれば、畫匠と詩想とを巧ならしむること能はず、太古の遺物を集めたる、羅馬に遊ばざれば、到底美術の奧妙を探るによしなしとして、佛國の如きは、わざ／＼羅馬に、アカデミーを建設し、毎年美術學生の優等なる者二十餘人を撰びて、其所に遊ばしむることにて、彼等が言に、たゞ羅馬の天色を仰げば、學ばずして自ら美の玄妙を感得すといはしむるに至れり。其他、歐米各國の美育に熱心なる人は、皆羅馬の古寺舊跡を巡覽するを以て、一つの學科となすに及べり。

歐洲各國學務委員が、其就學兒童男女退學後の結果如何に就きては、熱心に取調べつゝあることなるが、殊に、其重なる國に於て、女子高等教育の進歩は、疑ひも無く、社會の程度をして、高からしめしに相違無く、多少弊害の伴ふことあるにもせよ、又各職工業美術等の増進は、其女子が、獨立の生計を營み、又其良人を助け、子女を教育するの裨補となり、其下等貧民に在りては、漸次彼等が饑寒の辛苦を離れて、自活の道を計るを得ること多きを加へ、且各商店

の賣子の如き、女子にして、此事に關するもの、日一日より多くなり行きたる其の結果も、亦良好なりといへり。又其下婢子守奉公を爲す者も、普通の筆算を學び得たるが爲甚だ其備主をして、便宜を感ぜしむると同時に、一方には、彼等をして、人の備役を受くることを嫌ふの風を生じ、現に、今、英京、倫敦府中、小學卒業女子、五万人の内、大抵下婢となるべき程の身分の者にて、其下婢となりしは、僅に、四千二百十四人なりとぞ。故に、當局者は、深く是等の事に就きて、其法もがなと講究しつゝありと聞けり。然し、其就學中甚だ嚴正なる規則と訓誡とに馴れたる女子等は、其退學の後も、時間の正きを守り、日課の則に従ひ、且其業に就き、事を取るに當り、喃喃々元語を爲し、左顧右眴、側見を爲すこと、の弊を減じて、其業を取り、職に就ける下等人民の有様を見て、自ら、整然秩序あるの國たることを知るべく、従つて、其就業時間中、彼等が仕事の多くは、こぶこと、亦甚だ熱くに堪へたり。一利一害の相伴ふは、實に理の免れざる所なれ共、兎まれ、畫一秩然たる、文明社會を形くれる、彼れ歐米各國の現況、能く爰に顧て、女子一般教育の普及を計らざる可からざる時なるべし。

女子の文學

るべし。

以上述べたるが如き、女子教育の進歩に伴ひて、發達振興せる文學の有様はいかにと云ふに、彼の生存競争の益烈き世界に在りては、彼等が文學も、決して、たゞ單に、花を愛し、月を賞する、遊樂風雅の花たるには、あらずして、是も亦、其實利實益の實を結べるもの、如し、勿論、富貴の家の子女が、偶々、詩を弄し、文を翫ぶを以て、樂みとする者無きにしも、あらぬとぞ。文學を學び得て、以て、世に立たんと希ふ女子等は、その教育事業に、生涯を委ねるか、さらぬは、著述家と成り、新聞記者と成り、また、雜誌屋と成る者多く、(前段にもいへるがごとく)中には、其立論といひ、文章といひ、天晴、有聲の男子を壓倒して、其前に膝を屈せしむるが如き、女博士無しとせず。或は、其良人、父兄を勵まして、一大著述の助手たる婦人も、亦少からずかし。(彼の有名なる、ホーセツト婦人の、盲目なる夫が、經濟論を聽書きして、世に著したるが如き、工學博士の妻、女、ライナム女史の、夫が著書の文章を、悉皆添削したるが如き、皆其一例として見るべし。)